

長岡市埋蔵文化財調査報告書

浦及浦西遺跡

—二級河川郷本川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013

新潟県長岡市教育委員会

長岡市埋蔵文化財調査報告書

浦及南西遺跡

—二級河川郷本川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013

新潟県長岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、新潟県長岡市島崎254-2他に所在する浦反甫西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、二級河川郷本川河川改修事業に伴うものであり、平成21・22年度に長岡市教育委員会が試掘確認調査を行い、平成25年度に長岡市が新潟県長岡地域振興局から委託を受けて本発掘調査を実施した。
3. 試掘確認調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫および県費の補助交付金を受けた。また、本発掘調査に要した費用は、原因者である新潟県長岡地域振興局が全額負担した。
4. 遺物の注記は、浦反甫西遺跡の略記号「UTN」の後、出土位置、層位等を記した。
5. 調査・整理体制は以下のとおりである。

(試掘確認調査) 平成21・22年度

調査主体 長岡市教育委員会 (教育長 加藤孝博)
事務局 長岡市教育委員会科学博物館 (館長 山屋茂人)
調査担当 長岡市教育委員会科学博物館 主任 丸山一昭

(本発掘調査) 平成25年度

調査主体 長岡市教育委員会 (教育長 加藤孝博)
事務局 長岡市教育委員会科学博物館 (館長 山屋茂人)
調査担当 長岡市教育委員会科学博物館 主査 加藤由美子
発掘調査員 南波 守 (株式会社大石組)
調査補助員 遠藤昌代 (株式会社大石組)
現場代理人 笹川順司 (株式会社大石組)

(整理作業) 平成25年度

調査主体 長岡市教育委員会 (教育長 加藤孝博)
事務局 長岡市教育委員会科学博物館 (館長 山屋茂人)
整理指導 長岡市教育委員会科学博物館 係長 田中 靖
長岡市教育委員会科学博物館 主査 丸山一昭
整理担当 長岡市教育委員会科学博物館 主査 加藤由美子
整理調査員 南波 守 (株式会社大石組)
整理補助員 遠藤昌代 (株式会社大石組)

6. 本書の執筆は、第I章を加藤由美子、その他を南波 守が担当した。なお、第V章の中・近世遺物については竹部佑介が執筆を担当した。編集は、加藤由美子の指導の下、南波 守が行った。
7. 自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。
8. 発掘調査で出土した遺物及び、測量図面・写真等の記録類は、長岡市教育委員会で保管している。
9. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。(順不同・敬称略)

浅井 勝利 安藤 正美 前嶋 敏 新潟県長岡地域振興局地域整備部与板維持管理事務所
島崎集落

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
1 調査に至る経緯	2
2 発掘調査および整理作業の経過	
第Ⅱ章 遺跡を取り巻く環境	3
1 遺跡の概要	4
2 周辺の遺跡	
第Ⅲ章 発掘調査の方法と概要	5
1 調査区とグリッドの設定	6
2 基本層序と発掘調査の概要	
第Ⅳ章 遺構	7
第Ⅴ章 遺物	9
1 遺構出土遺物	10
2 遺構外出土遺物	
第Ⅵ章 自然科学分析	12
1 試料	13
2 分析方法	14
3 結果	15
4 考察	16
第Ⅶ章 まとめ	19
1 遺構と遺物について	20
2 遺跡の性格について	21

挿図・表目次

第1図 遺跡の範囲とトレンチ位置図	2	第1表 周辺の遺跡一覧	5
第2図 遺跡の位置	3	第2表 珪藻分析結果	17
第3図 周辺の遺跡	4	第3表 花粉分析結果	17
第4図 グリッド設定図	5	第4表 遺構観察表	21
第5図 基本層序	6	第5表 土器・陶磁器・瓦観察表(1)	21
第6図 1～3地点の模式柱状図 および試料採取位置	17	第6表 土器・陶磁器・瓦観察表(2)	22
第7図 花粉化石群集	17	第7表 土器・陶磁器・瓦観察表(3)	23
第8図 珪藻化石写真	18	第8表 土器・陶磁器・瓦観察表(4)	24
第9図 花粉化石写真	18	第9表 銭貨・鍛冶関連遺物・砥石観察表	24
		第10表 木製品観察表	24

図版目次

図版1 調査区全体図	図版13 遺物実測図(6)
図版2 遺構分割図(1)	図版14 遺跡全景写真
図版3 遺構分割図(2)	図版15 基本層序・遺構写真(1)
図版4 遺構分割図(3)	図版16 遺構写真(2)
図版5 遺構詳細図(1)	図版17 遺構写真(3)
図版6 遺構詳細図(2)	図版18 遺構写真(4)
図版7 遺構詳細図(3)	図版19 遺構写真(5)
図版8 遺物実測図(1)	図版20 遺構写真(6)・作業風景写真
図版9 遺物実測図(2)	図版21 遺物写真(1)
図版10 遺物実測図(3)	図版22 遺物写真(2)
図版11 遺物実測図(4)	図版23 遺物写真(3)
図版12 遺物実測図(5)	

第 I 章 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

郷本川は、長岡市の北西部の和島地域と三島地域の境界、標高202.9mの笠拔山に源を発し、山間に谷底平野を形成しつつ蛇行しながら北へ向かい、保内川・小島谷川・荒巻川を合流した後北西に向きを変え、寺泊地域の丘陵地帯を流れて寺泊郷本の海岸部で日本海に注ぐ、流域面積30.78km²、流路延長12.3kmの二級河川である。郷本川の一部は、旧島崎川の河川ルートを踏襲する。旧島崎川は、大河津分水路開鑿以前に東頸城丘陵の西側丘陵と東側丘陵の谷底平野を北西へ流れていた河川であり、本書では現在の島崎川と区別するため「旧」を冠して呼ぶ。

旧島崎川は和島・寺泊地域を蛇行した後、新潟平野の南縁部に至り、牧ヶ花（現燕市牧ヶ花）で信濃川の分流である西川へ合流した。近世には信濃川から出雲崎港に至る内水面交通の要として、和島地域に椿森・島崎などの船着き場が設けられ、また農繁期には周辺農村の農業用水・排水の根幹を成す重要な河川であった。しかし、上流と下流との河床高低差が小さく、信濃川の氾濫時には水が西川を経由し旧島崎川に逆流するなど、周辺一帯は洪水常襲地帯でもあった。

1870年（明治3）、大河津分水路の開鑿が始まると、旧島崎川は分水路により分断され、西川への合流が事実上困難となる。それを補う排水手段として、郷本川・落水川（現在の島崎川）・新島崎川の3水路による、日本海への放水計画が持ち上がる。郷本川は旧島崎川の支流の一部を踏襲して開削され、寺泊郷本の海岸に河口を持つことからこの名が付いた人工河川である。その開鑿の歴史は古く、1768年（明和5）に最初の工事請願が出され、1774年（安永3）に工事が行われた。1872年（明治5）には分水路の開鑿を契機に二度目の工事が行われ、江戸時代の工事を踏襲しながら進められたが、人力掘削では水路幅・深さ共に限りがあり、現在の川幅となったのは、分水路の竣工に合わせて1922年（大正11）から翌年9月にかけて行われた改修工事以後である。日本海への放水路が実現したことで、旧島崎川流域の洪水被害は大きく軽減された。しかし、近年も豪雨時における沿岸市街地への浸水被害は相次いでおり、なお抜本的な治水対策が切望されている。新潟県では昭和63年から郷本川改修工事を継続しており、平成17年4月には「郷本川水系河川整備計画」を作成した。現在は和島市街地をバイパスする郷本川水路約2.3km区間の整備を重点に、計画区間延長7,190m、計画流量200m³/sの改修工事を進めている。

平成21年11月と平成22年6月と同12月、長岡市教育委員会（以下、「市教委」）は事業者の新潟県長岡地域振興局地域整備部与板維持管理事務所（以下、「振興局」）の依頼を受け、郷本川改修工事地内における埋蔵文化財の試掘確認調査を行った。その結果、川東遺跡（長岡市No.1304）、浦反甫東遺跡（同No.1308）、浦反甫西遺跡（同No.1396）の3遺跡を新たに発見した。調査の結果を受け、遺跡の今後の取り扱いについて振興局と市教委とで協議を行い、治水工事の趣旨や緊急性から工事計画の変更は難しいと判断されたため、上記の3遺跡については市教委が工事に先立ち、遺跡の記録保存のための本発掘調査を行うことで合意した。浦反甫西遺跡については、平成25年4月、長岡市は市教委が調査主体となること、発掘作業は平成25年度、整理作業・報告書刊行は平成26年度に行うこと、費用は全額振興局が負担すること等を記した「平成25年度埋蔵文化財包蔵地（浦反甫西遺跡）発掘調査業務委託に関する資料について」（以下、「計画書」）を振興局へ提出。この計画書を元に、平成25年4月26日、振興局と長岡市は平成25年度浦反甫西遺跡発掘調査の契約を締結し、市教委は速やかに本発掘調査に着手した。なお、平成25年度に発掘調査を実施した結果、当初計画より効率良く作業が進んだため、以後の工程を見直し、平成25年度中に報告書刊行

まで行う変更協議を平成25年7月11日に行い、その旨を両者で合意した。

2 発掘調査および整理作業の経過

(1) 試掘確認調査

平成21年11月24日～30日に試掘調査を実施した。12か所の調査トレンチを設定し、調査面積は108㎡である。調査の結果、浦反甫東遺跡を新たに発見した。翌年の確認調査で発見される浦反甫西遺跡の東側にも3か所のトレンチを設定したが、ここでは遺物・遺構とも確認できなかった。

平成22年6月3日～8日、12月14日に、遺跡の内容をより詳細に把握すべく確認調査を行った（第1図）。30か所の調査トレンチを設定し、調査面積は256㎡である。調査の結果、22・23・27～29Tで遺構・遺物が確認され、新たに浦反甫西遺跡の存在が明らかとなった。遺物は平安時代の土師器・須恵器が少量あり、遺跡の本体は北側の畑地にあることが予想された。本発掘調査の必要範囲は、約1,000㎡前後であることが想定された。

(2) 本発掘調査

工事の進捗状況に合わせ、平成25年春に着手した。5月23日から調査区の基本測量を行い、重機による表土除去を行った。同29日から作業員を動員した人力による発掘調査を開始した。トレンチ壁面の整形、サブトレンチの掘削を行い、6月4日から遺物包含層発掘を行った。遺物量は少ないものの古代の土師器・須恵器、中・近世の遺物が出土した。同5日から遺構検出を行い、調査区北西隅を中心に溝・ピットが確認された。同17日に遺構検出状況写真を撮影し、遺構発掘を開始した。同26日、ラジコンヘリによる調査区全景写真を撮影し、遺構の裁ち割り、遺構測量を行った。7月1日に全ての発掘・測量作業を終え、作業道具を現場から撤去した。その後、重機による調査区の埋め戻し作業を経て、同19日に現地作業を完了した。調査期間中は天候に恵まれ、順調に調査を進めることができた。

(3) 整理作業

調査終了後、速やかに遺物の水洗・注記・接合を行い、順次図化した。その後、図面トレース、遺物写真撮影、レイアウト、原稿執筆を経て入稿・校正作業を行い、本報告書を刊行した。（加藤）



第1図 遺跡の範囲とトレンチ位置図 (1/2,500)

第Ⅱ章 遺跡を取り巻く環境

1 遺跡の概要

浦反甫西遺跡は、新潟県長岡市島崎地内に所在する(第2図)。海岸線からは直線で約3.4kmを測り、旧島崎川(現在の郷本川)沿岸の沖積地に立地する。遺跡の北側には島崎の集落が展開し、集落内を旧島崎川が北流する。遺跡は旧島崎川の右岸、小島谷川との合流点付近に当たり、現況は水田で、標高は15.0m前後である。

今回の浦反甫西遺跡の調査では、掘立柱建物が検出された居住域と想定される調査区北側と、遺構密度が低い南側の低地部に分かれることが判明した。このことから古代の集落本体は、北側の調査区外に当たる畑地や現在の島崎集落が立地する微高地上に展開していたものと考えられる。



第2図 遺跡の位置 (1/250,000)

2 周辺の遺跡 (第3図・第1表)

旧島崎川流域では、後期旧石器時代から近世に至る遺跡が分布しており、これらは旧島崎川兩岸の丘陵部から沖積地にかけて立地する。ここでは、浦反甫西遺跡の中心となる古代について、周辺遺跡の概要と歴史的環境について触れる。

和島地域・旧島崎川流域は、古代において越後国古志郡に属した。周辺には古代の遺跡が多く存在し、これに加え須恵器や瓦の窯跡、製鉄遺跡等の生産遺跡も集中する重要な地域である。

飛鳥時代では、下ノ西遺跡において7世紀後葉から8世紀前葉の掘立柱建物や方形の区画溝が検出された。一辺が1mを超える柱掘方や、主軸方位を等しくする遺構群は、古志郡衙成立以前の様相を示すものとされている。東側丘陵の北端には横滝山廃寺があり、7世紀後半の白鳳期に属する県内最古の寺院とされる。木造基壇外装を持つ建物が検出されたほか、瓦・埴仏・鷄尾などが出土している。さらに、横滝山廃寺の北西5kmには和銅二年(709)の開基と伝えられる国上寺を中心とする遺跡群がある。また、旧島崎川上流部の谷あいには立地する梯子谷窯跡では、7世紀末の須恵器窯が検出されている。

律令体制が定着した奈良時代では、下ノ西遺跡で引き続き掘立柱建物群が造営される。出挙に関わる記録簡や国府にあった官司「今浪人司」より発給された木簡などが出土し、古志郡家の本体と推定されている。八幡林官衙遺跡では大型の掘立柱建物が造営され、養老年間に属する「沼垂城」木簡や蒲原郡司から発せられた郡司符などが出土し、国レベルの官衙関連遺跡と考えられている。

平安時代になると、9世紀前半に八幡林官衙遺跡において大領館の中核と考えられる平面積180㎡を測る大型建物が造営される。その後9世紀後半には下ノ西遺跡において四面庇付建物が出現し、これが平面積250㎡を測る古志郡最大の建物で、上級官人や郡家の政庁正殿と推定されている〔和島村教育委員会2003〕。また、浦反甫東遺跡では9世紀後半を中心とする大型の掘立柱建物群や帯飾り・漆製品などが出土しており、官衙と関連を持った遺跡であるとされている〔丸山2013〕。10世紀に入ると八幡林官衙遺跡が衰退、やや遅れて10世紀前半頃に下ノ西遺跡が衰退し、新たに門新遺跡が造営される。大小の建物が整

然と配置され、有力者層（開発領主）の居宅であったと考えられている。この他に、周辺には須恵器窯跡とされる窯跡や瓦窯跡、製鉄関連遺跡や製塩遺跡など生産に関わる遺跡が多く見つかり、これらの生産遺跡が政治的機能を持つ遺跡群と有機的に結びついていた様子が窺える。（南波）

番号	名称	時代	備考
1	有馬崎	古代(平安)	
2	国上寺遺跡群	古代	
3	天王	古代(平安)	
4	弁才天窯跡	古代	須恵器窯か
5	日光畑	古代(奈良・平安)	
6	向屋敷	古代	
7	夏戸窯跡	古代	須恵器窯か
8	七ツ石	古代	製塩遺跡
9	郷本	古代	
10	太屋敷	古代(平安)	
11	五千石	古代(平安)	
12	諏訪田	古代(平安)	
13	京田	古代(平安)	
14	横滝山	古代(白鳳～平安)	白鳳期の寺院跡
15	門新	古代(平安)	古代開発領主の居宅
16	上新田	古代	
17	上桐神社裏	古代	
18	北野大平	古代	
19	和島中道	古代	
20	北野丸山	古代(平安)	
21	川東	古代(平安)	
22	浦反甫東	古代(平安)	
23	浦反甫	古代(平安)	

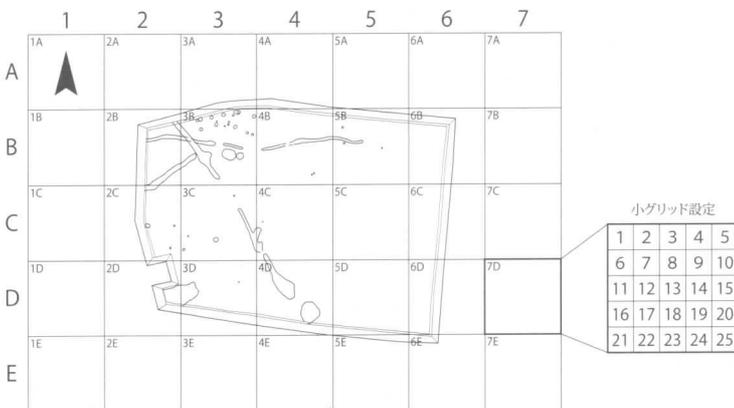
番号	名称	時代	備考
24	浦反甫西	古代(平安)	
25	大武	古代(平安)	
26	奈良崎	古代(平安)	
27	姥ヶ入製鉄	古代	製鉄関連遺跡
28	姥ヶ入南	古代(飛鳥～平安)	
29	立野大谷製鉄	古代	製鉄関連遺跡
30	山田郷内	古代(平安)	
31	八幡林官衙	古代(奈良・平安)	官衙関連遺跡
32	吉沢	古代(平安)	
33	板谷	古代(平安)	
34	下ノ西	古代(飛鳥～平安)	古志郡官衙関連遺跡
35	旧北辰中学校	古代	瓦窯跡
36	梅田	古代	
37	本合分	古代	
38	オクマンサマ	古代	
39	メチガ谷	古代(飛鳥・奈良)	
40	大慶寺御経塚	古代	
41	久田製塩	古代	製塩遺跡
42	梯子谷窯跡	古代(飛鳥・奈良)	須恵器窯跡
43	寺前	古代	
44	乙茂島崎川	古代(平安)	
45	向江山	古代(平安)	

第1表 周辺の遺跡一覧

第三章 発掘調査の方法と概要

1 調査区とグリッドの設定（第4図）

調査区は、平成22年度の試掘確認調査で得られた情報を基に、遺構・遺物が確認され工事予定地となる範囲に設定した。グリッドは、調査区北西に基準（世界測地系 座標値 X=175120、Y=23590）を設定し、1Aグリッドとした。ここから10m×10mのメッシュを設定し、西から東に向けて1から7の数字を、北から南へAからEの英字を割り振り、これを大グリッドとした。さらに1つの大グリッドを2m×2mメッシュに細分し、北西隅から南東隅に向けて1から25の数字を割り振り、これを小グリッドとした。これら2種を組み合わせ、3B-17、6C-6のように表記し、遺構の位置や遺物の出土位置の記録に用いた。



第4図 グリッド設定図 (1/1,000)

2 基本層序と発掘調査の概要

調査地の現況は水田跡地で、一部には盛土がなされていた。旧島崎川と小島谷川の合流点に当たり、調査区を含む田面はほぼ平坦である。調査区北側は、島崎の集落および畑地が微高地上に展開する。調査地周辺の標高は15.0m前後を測る。遺跡周辺で一般的に確認できる基本層序は、おおむね0層からVI層に分けられる(第5図)。

0層：盛土

I層：2.5GY6/1 オリーブ灰色粘質土(現代の水田耕作土)

II層：5Y5/1 灰色粘質土(近代以前の旧耕作土、中世から近世の遺物包含層)

IIc層：5Y5/1 灰色粘質土(II層のうち炭化物を多く含む層で、部分的に存在する)

III層：(中世の遺物包含層)

IV層：10YR4/1 褐灰色粘質土(古代の遺物包含層)

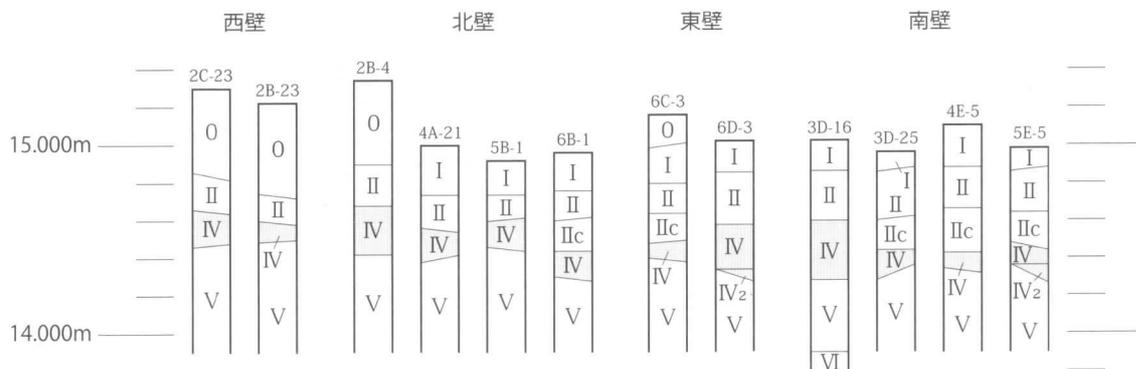
IV₂層：10YR4/1 褐灰色粘質土(IV層のうち地山ブロックを多く含む層で、低地部でよく確認できる)

V層：7.5Y7/1 灰色粘質土(地山)

VI層：5GY6/1 オリーブ灰色粘質土

0層は盛土、I層は現代の水田耕作土である。II層は珠洲焼・陶磁器等、中世から近世にかけての遺物を含むが、遺物の出土量が少ないことや後世の耕作等により攪拌されている可能性が高いため、今回の調査では対象外とした。II層は本来近世以降の遺物包含層と考えられるが、中世遺物を含むのは上記の通り後世の耕作等による攪拌のためであろう。中世の遺物包含層とされるIII層が今回の調査では確認できなかったことも、先述の理由によるものと見られる。IV層は須恵器・土師器や鍛冶関連遺物等、古代の遺物包含層である。IV層についても、後世の攪乱による影響を受けているためか、珠洲焼や陶磁器等の中・近世遺物が層上部に混じる。また、調査区西側を中心に古墳時代の土師器が少量出土しており、周辺からの流れ込みと考えられる。なお、IV層では地点によってV層ブロックの巻き込みが認められ、これをIV₂層とした。後世の耕作等による人や家畜の踏み込み痕跡と捉えたい。V層は地山で、VI層は深度の高い遺構底面で確認できた。

調査は、まず重機により0・I層および調査対象外としたII層を除去し、人力でIV層包含層の掘削を行った。その後、V層上面で遺構検出を行ったが、地点によっては酸化鉄やマンガン粒子の集積が著しく、遺構が非常に見えにくい状況であった。そのため、場所によっては、V層上面から酸化鉄・マンガン粒子の影響が少ないレベルまで掘り下げて、再度遺構検出を行った。(南波)



第5図 基本層序 (1/40)

第IV章 遺 構

検出した遺構は、掘立柱建物2棟、土坑3基、溝3条、性格不明遺構1基、ピット22基で、検出面はP33～37がIV層中、その他はV層上面である。遺構は調査区北西部、標高のやや高い範囲に集中する。調査区南側では、地形が南に向かい緩やかに傾斜する様子が確認でき、河川が存在が想定される。

SB1(図版5) 調査区北西部で4基の柱列を検出した。SB2とは重複関係にある。大部分が調査区外へと伸びるため詳細は不明であるが、梁行3間×桁行3間以上の南北に長い長方形プランを呈するものと考えられる。規模は梁行4.85mで、柱間距離1.55～1.65mを測る。南北棟とした場合の主軸方位はN-11°-Wを向く。柱穴は、長軸0.46～0.85mの円形または楕円形で、深さは0.18～0.54mと不揃いである。P3・5・6では、径0.13～0.16mの柱痕跡を検出しており、細身な柱を使用していた様子が窺える。また、P6はSB2の柱穴も兼ねており、その切り合い関係からSB1→SB2の変遷が分かる。遺物はP3より須恵器の甕(1)、P4から土師器細片、P5では須恵器の無台坏(2)が出土した。2は9世紀後半と考えられるが、柱掘方部の検出面より浮いた状態で出土しており、時期の決定には慎重を要する。

SB2(図版5) 調査区北西部で4基の柱穴を検出した。SB1と重複し、同様に大部分は調査区外へと伸びる。梁行2間×桁行2間以上で、南北方向を主軸とした場合はN-13°-Eを向く。規模は梁行5.15m、桁行2.05m以上で、柱間距離は2.05～2.60mを測る。柱穴は、長軸0.38～0.52mの円形または楕円形で、深さは0.24～0.52mと不揃いである。P6・21では、径0.13～0.16mの柱痕跡を検出した。SB1同様に細身の柱を使用していたものと考えられる。遺物はP2・21より土師器細片、P24からは須恵器の有台坏(3)が出土した。時期は9世紀後半の中でも古い段階と考えられる。

SK11(図版5) 調査区北西部に位置し、SD1を挟んだ北側にはSB1・2が在り、東側にはSK14が隣接する。平面は楕円形、断面は台形状を呈する。長軸1.83m、短軸1.38m、深さ0.32mを測る。主軸方位はN-74°-Wで、SB2の梁行方向やSD1に似る。覆土は2層に分かれるが、大部分は黄灰色土で一度に埋没した様子が窺える。その位置関係から、SB1・2に伴う廃棄土坑と考えたが、遺物が少なく詳細は不明である。出土遺物は、須恵器の無台坏(4・5)と土師器細片である。9世紀中頃の所産であろうか。

SK13(図版6) 調査区南部に位置する。SD9の南東端付近に在り、関係性を窺わせるが判然としない。平面は不整な円形、断面は弧状を呈する。長軸2.81m以上、短軸2.50m、深さ0.26mを測る。覆土は3層に分かれ、レンズ状に堆積する。規模や形状から土坑としたが、遺物が出土せず性格は不明である。水溜施設のようなものであろうか。検出面から古代の遺構と考えられる。

SK14(図版5) 調査区北西部に位置し、SK11に隣接する。平面は円形、断面は弧状を呈する。長軸0.91m、短軸0.84m、深さ0.15mを測る。覆土は黄灰色土の単層で、出土遺物は土師器甕細片のみである。検出面および出土遺物から古代の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

SD1(図版2・3・6) 調査区北部に位置し、3B-11グリッドではSD9に切られる。東西方向に蛇行しながら不連続に伸びる溝で、西側は調査区外へと及ぶ。断面は弧状、台形を呈する。主軸方位はN-78～86°-E、またはN-81°-Wを向き、3Bグリッド付近ではSB2の梁行方向にほぼ平行する。調査区内で長さ25.22m、幅0.26～0.63m、深さ0.05～0.28mを測る。西側ほど検出面からの掘り込みが深く、東側では浅い。底面標高は14.20～14.32mを測り、凹凸があるものの東から西方向に緩やかに傾斜する。覆土は3層に分かれる。2層は炭化物を多く含む層で、3B-11グリッド以西で確認できる。SD1は溝より北側でのみ建物が検出されていることから、居住域を示す区画溝のような機能を持っていたと考えられる。遺物は、上面か

ら3層にかけて出土しており、特に上面と2層からの出土が多い。上面出土遺物より覆土中の遺物が古相を示すが、両者間での接合関係も認められ、時間をかけて緩やかに埋没したものと考えられる。種別は須恵器・土師器が主体で、この他に縄文土器の深鉢(27)、銭貨(28)がある。須恵器は坏蓋(6~8)、有台坏(9・10)、無台坏(11~13)、壺蓋(15)、壺類(16~19)、甕(20)があり、土師器は無台坏(14)、甕(21~25)が、これに加え製塩土器(26)がある。遺構の時期は8世紀後半から9世紀後半と考えられ、縄文土器や銭貨は流れ込みと考えられる。

SD9(図版2・4・6) 調査区西部に位置し、3B-11グリッドではSD1を切る。北西から南東方向に不連続ながらも直線的に伸び、北側は調査区外へと及ぶ。断面は弧状を呈する。主軸方位はN-31~39°-Wを向き、SB1・2とは方位が異なる。調査区内で長さ23.10m、幅0.33~2.04m、深さ0.08~0.21mを測る。底面標高は14.25~14.32mでほぼ平坦である。3B-17グリッド周辺が最も深く、遺物が集中して出土した。覆土は褐灰色土の単層で、地点によっては底面付近に地山土ブロックを巻き込む。遺物は上面から覆土中にかけて出土しており、須恵器の横瓶(29)はSD1および包含層出土片と接合した。この他に、須恵器の坏蓋(30~33)、有台坏(34~36)、無台坏(37~49)、長頸壺(53~55)、土師器の無台椀(50~52)、甕(56~61)、筒型土製品(62)、中世の土師器皿(63)が出土した。また、須恵器の甕(64)は、SX10および包含層中から同一個体片が出土している。時期は8世紀後半から9世紀代と考えられるが、SD1よりは新しい。古相を示す土器はSD1からの混ざりである可能性がある。中世の土師器皿は流れ込みと考えられる。

SD15(図版2・6) 調査区西部に位置する。やや蛇行して伸びる溝で、西側は調査区外へと及ぶ。断面は弧状を呈する。主軸方位はN-55°-Eを向く。調査区内で長さ7.85m、幅0.54~1.02m、深さ0.27mを測る。覆土は単層で、灰オリーブ色の砂質土である。洪水等により、一度に埋没したものと考えられる。遺物が出土せず時期は不明であるが、検出面から古代であろうか。

SX10(図版6) 調査区南西部の低地部に位置する。調査区では一部を検出しており、西側は調査区外へと伸びる。平面は楕円形、断面は弧状を呈すると考えられ、調査区内で長軸4.53m、短軸2.61m、深さ0.30mを測る。覆土は単層で、地山土に灰色土のブロックが混じる。谷状地形の中心に当たり、自然地形である可能性があるが、遺物が集中することなどから遺構として扱った。遺物は、須恵器の有台坏(65)、甕(69)、土師器の無台椀(66~68)と、椀形鍛冶滓(70・71)、金床石と考えられる台石(72)が出土した。所属時期は8世紀後半から9世紀前半頃か。SX10の周辺地形は、南側に向けて緩やかに傾斜して落ち込んでいる。調査区南西には現在小島谷川が北流しており、古代においても遺跡に近い位置を河川が流れていたものと推測できる。SX10を含む谷状地形は、この河川に至る道であった可能性が考えられる。

ピット(図版7) 本遺跡では、掘立柱建物を構成するピットを除くと、計22基が検出されている。大半が単層で遺物の出土もなかったため、ここでは特筆すべきピットについてのみ記述する。なお、詳細は遺構観察表を参照されたい。

P16は調査区西部に在り、上面から古墳時代と考えられる短脚の高坏(73)が出土した。P17は調査区西部に在り、覆土中より須恵器の甕(74)が出土している。P26は調査区西部にあり、本遺跡で唯一柱根(205)を出土したピットである。ただし、当ピットを用いて構成される建物は検出できなかった。P33~37では、杭または杭と考えられる木製品(206~210)が出土した。調査区内に点在しており、どのような機能を果たしていたかは不明である。覆土は青灰色土で、古代の遺構覆土とは様相が異なる。検出面がIV層であることを踏まえると、比較的新しい時代のものと思われる。(南波)

第V章 遺物

コンテナ浅箱で7箱分が出土した。調査面積に対する遺物出土量としては少ない。種別は縄文土器、古墳時代の土師器、古代の須恵器・土師器、中世の土師器、珠洲焼、陶磁器、近世の陶磁器や、瓦、鍛冶関連遺物、砥石、銭貨、柱根、杭など多岐に渡る。主体は古代の須恵器・土師器である。須恵器には、硬質であるが焼成が甘く酸化状態（土師質）のものや、還元しきれずに断面が褐色を呈するものが定量認められる。これらは、旧島崎川流域に存在する在地の西古志窯跡産と考えられる。佐渡小泊窯産須恵器は一定量認められ、遺構外出土に限れば在地窯産をしのぐ。遺構外出土遺物が大半であり、遺構出土のものは少ない。遺構別出土量ではSD9が最も多く、次いでSD1となり、中には遺物が全く出土しなかった遺構もある。遺構外遺物を含めた中での出土傾向は、調査区北西部・南西部に偏りが認められ、鍛冶関連遺物に限れば、調査区南西部に集中する様子が窺えた。なお、ロクロ成形土器のうち、ロクロの回転方向が分かるものは観察表に記した。以下、遺構、遺構外の順に記載し、柱根・杭などの木製品は最後にまとめる。

1 遺構出土遺物

SB1（1・2） 須恵器の甕（1）はP3上面から出土した。無台坏（2）はP5上面出土で、小泊産と考えられ9世紀後半に比定される。

SB2（3） 須恵器の有台坏（3）はP24より出土した。在地产で9世紀中頃の所産か。

SK11（4・5） 4・5は、口径13.0～13.5cmを測る浅身の須恵器の無台坏である。やや軟質気味で、灰白色を呈する。小泊産の中でも古手、下ノ西編年7期に相当するものと考えられる。

SD1（6～28） 須恵器（6～13・15～20）、土師器（14・21～25）、製塩土器（26）、縄文土器（27）、銭貨（28）が出土した。6～8は坏蓋で、6・7は口径18.2～18.4cmを測る大振りな資料である。深身の有台坏とセットになるものと考えられる。9・10は有台坏で口径13.9～16.5cmを測る。9は浅身、10は深身タイプである。11～13は無台坏で、口径11.5～12.6cmを測り、口縁部はわずかに外反する。14は無台坏で、器面が磨滅し調整は判然としないが、畿内系の暗文が入るタイプであろうか。15は壺蓋で、口縁端部を外方につまみ出す。口径13.4cmを測る。16～19は壺で、16・17は外面に1～2条の横位沈線を入れた長頸壺の口縁部である。18は体部片、19は内端接地の高台が付く底部片でいずれも長頸壺と考えられる。20は須恵器甕で、21～25は土師器甕である。26は粘土紐の輪積み痕が明瞭な底部資料で、製塩土器と考えられる。27は縄文土器で、粗製の深鉢である。縄文時代晩期の所産であろうか。28は1039年（宝元2）初鑄の北宋銭「皇宋通寶」で、字体は篆書体である。時期が明確な遺物が少ないが、7・11は土師質であり8世紀後半から9世紀前半、14も畿内系無台坏とすれば7・11に近い時期のものと考えられる。一方、9・10・13は小泊産で9世紀後半に比定され、SD1はある程度時期幅を持つものと考えられる。層位別では、上面より2層出土遺物が古相を示す。27・28は流れ込みであろう。

SD9（29～64） 須恵器（29～49・53～55・63）・土師器（50～52・56～62）、中世の土師器（63）が出土した。29は横瓶で、SD1および包含層出土片と接合する。内面の当て具痕をナデ消す。30～33は坏蓋で、30は口径21.3cmを測る大型品、31～33は口径14.6～15.5cmを測る。つまみはボタン状を呈する。34～36は有台坏で、34は口径17.5cmを測る大型品である。37～49は無台坏または無台坏と考えられる資料で、37～42は土師質である。口縁部が残るものは口径11.4～14.5cm、底部が残るものは底径7.2～10.4cmを測る。土師質のものがやや大振りな傾向を示す。43・45では、内面に漆の付着が認められた。50～52は、無台坏

または無台椀と考えられる資料である。50は口径17.9cmを測り、器壁が非常に薄い。53～55は長頸壺である。53は口径9.6cmでやや広口、54は口径5.9cmで外面には2条の平行沈線が巡る。56・57は甕口縁部である。56は口径32.1cmを測る大型品、57は口径18.6cmの小型品で、いずれも長甕と考えられる。58～61は甕底部で、いずれも平底を呈する。61の外面に見える沈線はガジリの可能性を残す。62は筒形土製品と考えられ、口径20.9cmを測る。器壁が厚く、粘土紐の輪積み痕を残す。63は中世の土師器皿で、口径10.8cmである。内面はハケメ調整である。遺物の多くは8世紀後半から9世紀代の所産と考えられ、須恵器のうち土師質のものは古手である。32・43～49は小泊産と見られる。

SX10 (65～72) 須恵器 (65・69)、土師器 (66～68)、鍛冶関連遺物 (70～72) が出土した。65は有台坏で、焼成が甘く土師質を呈する。66～68はいずれも無台椀と考えられ、66は底部に回転糸切り痕が認められる。69は甕で、内外面に平行のタタキ・当て具痕が見える。土器はいずれも8世紀後半から9世紀前半の所産か。70・71は椀形鍛冶滓で、正面の発泡が強く凹凸が激しい。裏面は平滑である。72は正面に大小の凹み痕が確認できる。全体的に淡く被熱しており、鍛冶に関わる遺物と捉え台石とした。

ピット (73・74) 73はP16上面出土の高坏である。短脚で頸部が太い。古墳時代後期の所産と考えらる。74はP17出土の須恵器甕である。焼成が甘く土師質を呈する。

2 遺構外出土遺物

(1) 古墳時代の土器 (75～81)

75は二重口縁壺で外面に明瞭な段を持つ。口縁は外反し端部は面を持つ。76・77は甕で、76は外反する短い口縁、77は外反した後わずかに内湾する口縁部を持つ。3点とも前期後半の所産と考えられる。78～80は高坏の頸部から脚部の破片である。78は棒状の脚部で中期、79・80は短脚であり後期の所産と考えられる。80は坏部内面を黒色処理する。81は甕である。口縁部は外反し、胴部はゆるやかに張る。外面の頸部から体部下半はハケメ調整で、底部付近はケズリとなる。後期の所産か。

(2) 古代の土器

須恵器 (82～131・140～163) 82～92は坏蓋である。口径16cmを超える大型品と、12cm大のものがある。つまみは擬宝珠タイプ、ボタンタイプ、環状タイプとバラエティが認められる。端部が残るものはいずれも下方に折れ、85は内面に沈線様の袂りが巡る。88は内面に漆が付着し、漆パレットとしての転用が考えられる。82は断面灰褐色を呈し、85は土師質である。83・84・86～89・90～92は小泊産と見られる。93～102は有台坏で、全体を窺える資料は少ない。93～97は、土師質または断面褐色を帯びるものでやや古相である。中でも93は高台が外方に張り出すタイプで、8世紀前半まで上がる可能性を残す。98・100・102は小泊産と考えられ、おおむね9世紀後半に比定される。101は底部切り離しが糸切りで、その後ナデ調整を行う。103～130は無台坏である。103～110は土師質または断面が褐色を帯びるもので、在地窯の所産であろう。また、確実に小泊窯産と考えられるのは115～130である。前者は器壁が厚く底部からの立ち上がりは比較的緩やかで、後者は器壁が薄く底部からの立ち上がりは直線的なものが多い傾向を示す。117は底部外面に墨痕が認められた。墨痕がはっきりしているのは「ハ」の字様の払い部で、その中に薄い墨痕が見える。「今」や「倉」のように見えるが判然としない。140～152は壺である。140～143は長頸壺、144・145は小型の長頸壺と考えられる。141～143の高台は外方に張り出すタイプで古手、8世紀中頃に位置付けられる。147は器壁が厚く、被熱のためか薄く発泡する。壺と見られるが判然としない。148は短頸壺、149は小型の無頸壺である。148は数条の沈線を外面に巡らす。153～156は横瓶で、

153は外に開く口縁部を持つ。154は土師質で、閉塞部付近である。157～162は甕である。157は外面に波状文が認められる。159は断面褐色、161は土師質でやや古手か。160は大甕の頸部付近と見られ、頸部と体部の接合面の調整は粗雑である。

土師器（132～139・164～173） 132～139は無台坏または無台椀で、非ロクロ成形のもの（132・133）とロクロ成形のもの（134～139）がある。164は短頸壺と見られ、外面はハケメ調整である。165～173は甕である。167は頸部が「く」の字に折れ、口縁端部は直立する。168はロクロ成形で、長甕と考えらる。169～173は底部資料で、平底のものが大半を占める。173は輪台気味である。（南波）

（3）中・近世の土器・陶磁器

土師器（174・175） 174・175はともに大きな平底を持ち、口縁部は直線的に立ち上がる。同一系譜に連なるものと考えられる。

瀬戸・美濃製品（176～178） 177は天目碗で、高台が欠損する。胴部は高台付近が水平に削り出され、丸みを持って立ち上がる。口縁部はほぼくびれが認められない。古瀬戸後期様式に比定され、14世紀後半の所産か。178は折縁小皿で内面には鑄手が施される。内外面全体に灰釉が施釉され、見込には重ね焼きの痕跡が認められる。大窯第3段階から第4段階、16世紀後半の所産と考えられる。

珠洲焼（179～186） 179～181は壺で、179・180の胴部外面には綾杉状の叩き目が見られる。182～186は播鉢である。182・183ともに口縁破片で卸し目は残存しない。口縁端部は強いナデにより外側に引き出されており、吉岡編年Ⅳ期に比定される。184は口縁端部が内削ぎ状で波状文が施されている。吉岡編年Ⅴ期に比定される。185・186はともに底部破片で静止糸切りが行われている。185は比較的細い卸し目が8条以上施されていたと考えられる。186は比較的太い卸し目が12条以上施されていたと考えられる。

越前焼（187） 播鉢の底部破片で立ち上がりが一部残存する。胴部内面には卸し目が認められるが、見込には施されない。胎土は浅黄橙色で無釉である。16世紀以降には下らない。

肥前陶磁器（188～191） 188は削り出し高台で高台中央が肥厚する。淡緑色の釉薬が内面に施されており、砂目痕が2箇所認められる。189は碁笥底の高台で、胴部が僅かに丸みを持って立ち上がる。内面および外面上半に灰釉がかかる。内面には窯壁由来の溶着物が多い。17世紀前半の所産か。191は波佐見のくらわんか碗で、胴部外面に梅樹文、高台内には記号が描かれる。「大明年製」の崩れたものか。（竹部）

（4）その他の遺物

瓦（194） 丸瓦の破片で外面はナデ、内面は布目痕が認められる。分割面の調整はナデで粗雑である。

鍛冶関連遺物（195～200） 195・196は羽口の先端部破片である。器壁が薄く、小ぶりである。197～199は椀形鍛冶滓で、197は裏面に炉床土が付着する。重量感があり、鉄を含むものと考えられる。198は発泡が強く軽い。木炭を多く含む。199は扁平な形状で、裏面は炉底の形状を良く残しているものと考えられる。正面は発泡が強く凹凸が激しいが、裏面は平滑で発泡も弱い。200は土製で中央が浅く凹む。炉本体、もしくは埴塼のような容器と想定されるが判然としない。

砥石（201～204） いずれも1～2面の使用面を持ち、微細な擦痕が認められる。使用面には、使用以前の剥離痕が残ることから、使用頻度はあまり高くないものと考えられる。鍛冶関連遺物が多く出土していることから、これらの砥石も鍛冶に使用された可能性がある。

木製品（205～211） 205はP26出土で柱根と考えらえるが、現状は薄い板状を呈する。加工痕は認められない。206～210はそれぞれP33～37からの出土である。206～208は尖底で、3～6面にはつり痕が認められる。211は下部先端が炭化する。側面が加工されているものと考えられる。（南波）

第Ⅵ章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

浦反甫西遺跡（新潟県長岡市島崎地内）は、寺泊丘陵と和島丘陵との間に形成された谷底平野（島崎川低地）に立地する。本遺跡では、発掘調査の結果、古代の掘立柱建物や溝跡のほか、船着き場と想定されている凹地などが確認されている。

本報告では、浦反甫西遺跡の古代頃の高植生および調査区内の堆積（水域）環境の検討を目的として、珪藻分析、花粉分析を実施した。

1 試料（第6図）

浦反甫西遺跡の基本土層は、発掘調査所見などからⅠ～Ⅴ層に区分されている。本遺跡ではⅢ層を除くⅠ～Ⅴ層までが確認されており、Ⅰ層が現代の水田耕作土、Ⅱ層が近代の水田耕作土、Ⅲ層が中世の遺物包含層、Ⅳ層が古代の遺物包含層、Ⅴ層が地山に相当する。

基本土層を構成する堆積層の岩相は、Ⅰ層が極細粒～細粒砂からなる偽礫（ブロック）が混じる暗灰色砂混じりシルト、Ⅱ層とⅣ層が炭化物混じる（暗）灰色シルト～粘土、Ⅴ層が灰白色（本来は青灰色）シルト～粘土からなり、全体的に酸化の影響などにより褐色を帯びる。また、Ⅳ層下部とⅤ層上部は擾乱が著しく、層界付近にはⅣ・Ⅴ層を母材とする偽礫が分布するほか、植物根痕なども観察される。

試料は、担当者により選択された掘立柱建物が検出された地点（1地点；4B杭付近）、遺構の分布が認められない地点（2地点；5E杭付近）および船着き場と想定される凹地部（3地点；調査区南西隅付近）の3箇所より採取した土壌11点である。これらの試料のうち、担当者による層位の選択と堆積層の観察所見に基づき、珪藻分析には1地点のⅡ・Ⅳ・Ⅴ層（試料番号2～4）、2地点のⅣ・Ⅴ層（試料番号1, 2）の計5点、花粉分析には1地点のⅡ・Ⅳ・Ⅴ層（試料番号2～4）、3地点のⅣ・Ⅴ層（試料番号2, 5）の計5点をそれぞれ供した。

2 分析方法

（1）珪藻分析

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返した後、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1,000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数する。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。珪藻の同定と種の生態性については、[Hustedt,1930-1966]、[Krammer & Lange-Bertalot,1985-1991]、[Desikachary,1987]などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示す。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や〔島倉,1973〕、〔中村,1980a〕などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類を-（ハイフオン）で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3 結果

(1) 珪藻分析

結果を第2表に示す。以下、地点毎に産状を述べる。

1) 1地点

Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ層（試料番号2～4）の3試料は、いずれも低率ながら珪藻化石が検出された。珪藻化石の保存状態は、ほとんど半壊しているだけでなく、溶解の痕跡が認められる殻も多いことから、状態としては、極不良である。

検出された分類群は、海水生種を主として、極低率に淡水生種を伴う種群で構成される。特徴的に認められた種は、海水生種の *Chaetoceros* spp.、*Coscinodiscus* spp.、*Paralia sulcata*、*Thalassionema nitzschioides*、*Thalassiosira* spp.、*Thalassiothrix longissima*、淡水生種の *Pinnularia* spp. などである。

2) 3地点

Ⅳ層およびⅤ層（試料番号2, 5）の2試料からは、いずれも低率に検出された。化石の保存状態は、認められたほとんどの殻が破片状であるだけでなく、一部の個体は溶解していることから、状態としては極不良である。

検出された分類群は、海水生種を主として、極低率に淡水生種をともなう種群で構成される。特徴的に認められた種は、海水生種の *Biddulphia* sp.A.、*Coscinodiscus* spp.、*Thalassionema nitzschioides*、*Thalassiosira* spp.、*Thalassiothrix longissima* などである。

(2) 花粉分析

結果を第7図、第3表に示す。以下、地点毎に産状を述べる。

1) 1地点

本地点では、Ⅱ層（試料番号2）より花粉化石が豊富に産出するが、花粉外膜が破損・溶解するものが含まれるなど保存状態は良好とは言えない。花粉化石群集では草本花粉の割合が高く、イネ科が優占する。この他、カヤツリグサ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節、ヨモギ属、タンポポ亜科などが認められ、水湿地生植物のガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、サンショウモも認められる。なお、多産したイ

ネ科花粉には、栽培種のイネ属に類する形態を示す花粉（以下、イネ属型）が含まれる。その他の栽培種では、ソバ属も確認された。木本花粉は、かろうじて定量解析が行える程度の産出であり、マツ属、ブナ属を主体とし、モミ属、ツガ属、トウヒ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属などを伴う。

IV層・V層（試料番号3,4）は、花粉化石がほとんど検出されず、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属などが、草本花粉ではイネ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節などが、わずかに認められる程度である。

2) 2地点

本地点では、全体的に保存状態が悪く、IV層（試料番号1）より、かろうじて定量解析が行える程度の花粉化石が産出する。花粉群集組成は、木本花粉の割合が高く、マツ属が多産し、モミ属、ツガ属、トウヒ属、ブナ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多く認められ、サナエタデ節ーウナギツカミ節、ヨモギ属などを伴う。なお、1地点と同様にイネ科花粉には栽培種のイネ属型が確認される。

V層（試料番号2）は、花粉化石がほとんど検出されず、木本花粉ではトウヒ属、ハンノキ属、ブナ属が、草本花粉ではサナエタデ節ーウナギツカミ節が、わずかに認められる程度である。

4 考察

(1) 堆積環境

1地点のII～V層（試料番号2～4）についてみると、いずれも珪藻化石の産出率が低いため、堆積時の環境を推定することは困難である。また、少ないながら検出された種群をみると、群集が貧弱である上に、殻の保存状態が不良であることから、検出された化石は古い時代の地層からの再堆積群集であると推定される。その根拠としては、認められた種の大半が海水生種の破片であることと、検出された殻の保存状態が極めて不良である点があげられ、認められた海水生の種は下位層準（おそらく新第三系）からの再堆積の可能性が高く、実際の堆積時に生育した群集は堆積後に分解消失した可能性が示唆される。このような産状は、同様の珪藻群集組成が認められた3地点のIV層・V層（試料番号2,5）についても指摘できる。

本分析試料のように、二次化石と思われる種群が主体となる事例は、沖積層や氾濫原堆積物に多く認められる。これは、沖積層や氾濫原の堆積物の場合、堆積後の環境が好氣的環境であり、堆積時に生育していた珪藻の殻は比較的早く分解されるが、二次化石の個体は分解に耐えることができることから、二次化石が多く保存される場合がある。二次化石が分解し難く残り易い理由は、一度、地層中に化石として保存されると、殻の表面が他の物質によりコーティングされたり、殻の分子構造が変化するなどして強固になるためである。また、生育時に生産力の高い種が検出されることが多い傾向にある。これは、元来、生産力の高い種類の方が地層中に含まれる量が多いことから、再堆積した場合にもそれらが取り込まれ易いと考えられる。

以上のことから、II～V層の堆積時には、基本的に好氣的環境下にあった可能性が示唆され、各層準を構成する堆積物は河川の氾濫等による一過性の堆積物の可能性が考えられる。

(2) 古植生

1,2地点のII～V層の花粉化石の産出状況は、地山に相当するV層（1地点 試料番号4、2地点 試料番号2）ではわずかに検出される程度であった。古代の包含層とされるIV層は、1地点（試料番号3）を除き、2地点（試料番号1）と、化石の産出が予想されたため概査を行った凹地部とされる3地点（試料番号2）より、定量解析が行える程度の花粉化石が産出した。2,3地点の2試料は、いずれもマツ属が多く産出し、モミ属、ツガ属、トウヒ属、スギ属などの針葉樹、ブナ属、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹が認め

られた。

本遺跡周辺では、東に隣接する浦反浦東遺跡、西方に約2.5kmの丘陵縁辺に位置する吉沢遺跡などで古代頃古植生に関わる資料が作成されている。これらの遺跡との比較ではモミ属、ツガ属、トウヒ属、マツ属（特にマツ属単維管束亜属）の出現率が高い傾向にある。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている [中村,1967; 徳永・山内,1971; 三宅・中越,1998など]。本層より産出した花粉化石は、全体的に保存状態が悪いことから経年変化の影響を受けていると思われ、また上述した珪藻分析では二次化石と思われる種群が産出していることから、同様に二次化石に由来する針葉樹花粉も多く残されていることが推定される。

以上の産出状況や上述した調査事例などを考慮すると、周辺丘陵にはブナ属やコナラ亜属などからなる落葉広葉樹林が分布しており、モミ属やツガ属なども混交していた可能性がある。また、丘陵を開析する沢沿いや河畔などにはスギ属、サワグルミ属、ニレ属一ケヤキ属などが生育しており、これらの林分の林縁にはツツジ科、タニウツギ属、スイカズラ属などが認められたと考えられる。また、マツ属複維管束亜属は二次林などとして周囲に分布していたと考えられる。なお、上述した浦反浦東遺跡では河畔林構成種を含むハンノキ属が多産しているほか、適湿地を好むニレ属一ケヤキ属、トチノキ属なども多く産出するが、本遺跡のⅣ層ではこれらの分類群は未検出あるいはわずかに産出する程度であった。このような異なる産出状況は局地的な植生の違いを反映している可能性もあるが、堆積機構や堆積後の経年変化の違いなどが起因している可能性も示唆される。なお、Ⅱ層（1地点 試料番号2）はⅣ層と概ね類似する木本組成を示した。この結果から、おそらく古代頃と同様の森林が分布したと考えられる。また、上記した吉沢遺跡では、古代および古代以前の試料に比べ近世の試料においてマツ属複維管束亜属が優占するという特徴が確認されている。このような変化は、本遺跡のⅡ・Ⅳ層間には認められなかったが、本地域における森林（植物）利用および古植生変遷を検討する上で重要と思われ、さらに周辺遺跡での調査事例の蓄積による検討が期待される。

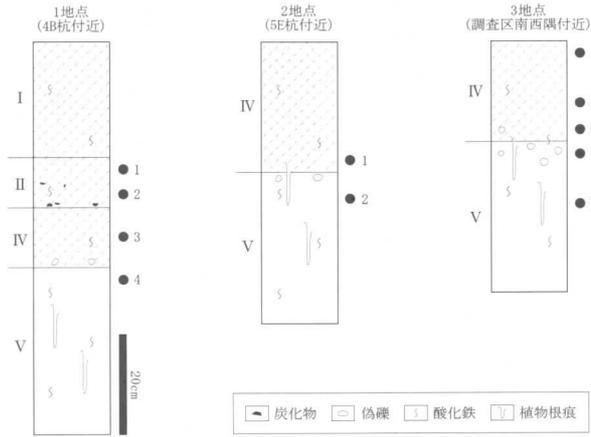
一方、草本類では、イネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節一ウナギツカミ節、ヨモギ属などが検出された。いずれも明るく開けた場所に生育する人里植物を多く含む分類群であることから、周囲の草地環境に由来すると考えられる。3地点では、水湿地生草本のオモダカ属、ミズアオイ属が僅かであるが確認された。化石の保存状態が悪いため詳細な比較は難しいものの、このような産出の違いは2地点と異なる水域環境を示している可能性がある。

近代の水田耕作土とされるⅡ層（1地点 試料番号2）は、草本花粉の出現率が高率となる。多産した草本類では、イネ科が優先し、栽培種のイネ属型花粉も産出する。[中村,1980b]によれば、現在の水田耕作土に含まれるイネ属花粉の割合は30%以上の比率であることから、イネ科が多産し、かつイネ属の割合が30%以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稲作が行われていたとみなせると述べている。Ⅱ層におけるイネ属型の割合は約18%であり、上述した事例との比較ではその割合は低いものの、調査所見や花粉化石群集全体におけるイネ科の割合が高いことなどから、調査地および周辺域で稲作が行われていたことが推定される。また、ソバ属も検出されていることから、周辺域でのソバ栽培も推定される。なお、Ⅱ層では、ガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、サンショウモなどの水湿地生草本やシダ類が検出された。これらの分類群は、調査地付近での稲作が行われていた場合、水田雑草などに由来する可能性があり、イネ科やカヤツリグサ科にも水田雑草として生育した分類群が含まれる可能性がある。な

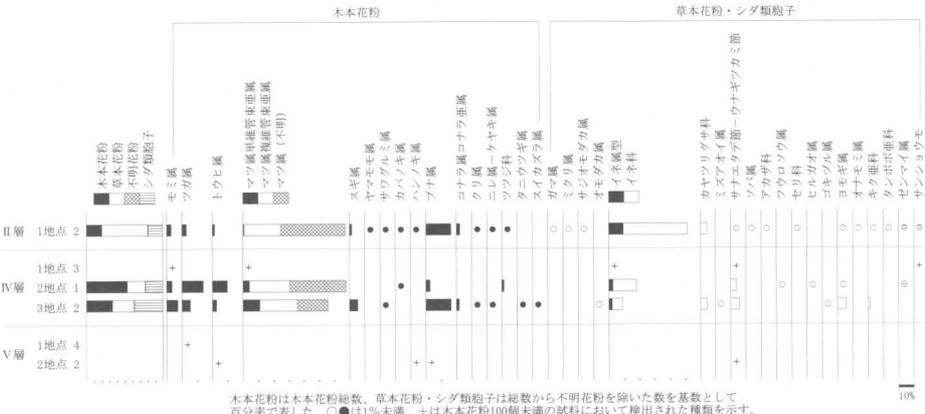
お、IV層からもイネ属型が確認されている。産出個数が少ないため詳細な検討には至らないが、イネ属花粉の産出から周辺域で稲作が行われていた可能性がある。また、栽培種および水湿地生種を除く分類群ではサナエタデ節ーウナギツカミ節、アカザ科、ヨモギ属、タンポポ亜科などが検出された。これらは、周囲の草地環境などに由来すると思われる。

引用文献

- 安藤一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
- Asai,K. & Watanabe,T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35-47.
- Desikachary,T.V.,1987,Atlas of Diatoms.Marine Diatoms of the Indian Ocean.Madras science foundation, Madras,Printed at TT.Maps & Publications Private Limited 328,G.S.T.Road,Chromepet,Madras-600044. 1-13,Plates:401-621.
- Hustedt,F.,1930,Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz.under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs unt der Schweiz,7,Leipzig,Part 1,920p.
- Hustedt,F.,1937-1938,Systematische unt ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java,Bali und Sumatra.I ~ III.Arch.Hydrobiol.Suppl.,15,131-809p,1-155p,274-349p.
- Hustedt,F.,1959,Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz.under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs unt der Schweiz,7,Leipzig,Part 2,845p.
- Hustedt,F.,1961-1966,Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz.under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs unt der Schweiz,7,Leipzig,Part 3,816p.
- 伊藤良永・堀内誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.日本珪藻学誌,6,23-44.
- 小杉正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用.第四紀研究,27,1-20
- Krammer,K.and H.Lange-Bertalot,1985,Naviculaceae.Bibliotheca Diatomologica,vol.9,p.250.
- Krammer,K.and H.Lange-Bertalot,1986,Bacillariophyceae,Susswasser flora von Mitteleuropa 2(1):876p.
- Krammer,K.and H.Lange-Bertalot,1988,Bacillariophyceae,Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2):596p.
- Krammer,K.and H.Lange-Bertalot,1990,Bacillariophyceae,Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3):576p.
- Krammer,K.and H.Lange-Bertalot,1991,Bacillariophyceae,Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4):437p.
- 三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.
- 中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
- 中村 純,1980a,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- 中村 純,1980b,花粉分析による稲作史の研究.自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 -総括報告書-,文部省科研費特定研究「古文化財」総括班,187-204.
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- 徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.
- 長岡市教育委員会,2012,吉沢遺跡



第6図 1～3地点の模式柱状図および試料採取位置



第7図 花粉化石群集

分類群	生態性		環境	1地点 (4B杭付近)					3地点 (調査区南西隅付近)		
	塩分	pH		II層	IV層	V層	II層	IV層	V層		
Actinococcus ehrnbergii var. tenuis (Dob.) Hustedt	Euh		A, B	-	1	*	-	-	-	-	
Bidalphia sp. A	Euh		A	-	-	2	-	-	-		
Ceratulus spp.	Euh		A, B	-	-	1	-	-	-		
Chaetoceros spp.	Euh		A, B, D, E	22	21	8	-	1	-		
Coscinodiscus marginatus Ehrenberg	Euh		A	1	1	-	-	1	-		
Coscinodiscus radiatus Ehrenberg	Euh		A	4	7	7	6	6	-		
Grammatophora spp.	Euh		A, B	-	1	-	-	1	-		
Hyalodiscus spp.	Euh		A, B	1	-	-	-	1	-		
Nitazenia spp.	Euh		A	-	-	-	-	1	-		
Paralia sulcata (Ehr.) Cleve	Euh		A, B	2	-	2	-	-	-		
Rhizosolenia spp.	Euh		A	-	1	-	-	-	1		
Stephanoecypris spp.	Euh		A	-	-	1	-	-	-		
Thalassionema nitzeioides (Grun.) Grunow	Euh		A, B	16	4	3	6	16	-		
Thalassiosira eccentrica (Ehr.) Cleve	Euh		A	-	-	-	-	1	-		
Thalassiosira spp.	Euh		A	5	5	-	6	4	-		
Thalassiothrix longissima Cleve et Grunow	Euh		A, B	2	1	-	-	2	-		
Thalassiothrix spp.	Euh		A, B	-	2	-	-	-	-		
Triceratium spp.	Euh		A	-	-	-	-	-	-		
Cyclotella striata-C. stylorum	Euh-Meh		B	-	1	-	-	-	-		
Cyclotella spp.	Euh-Meh		B	-	1	-	-	-	-		
Emetia pectinifera (Dillwyn) Rabenhorst	Ogh-hub	ac-11	ind	0, T	-	-	1	-	-		
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-		
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-und	al-11	ind	RA, U	-	-	1	-	-		
Pinularia subopitata Gregory	Ogh-und	ac-11	ind	RB, S	-	-	-	-	-		
Pinularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	1	1	-	-	-		
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-	1	-	-		
海水生種				54	44	18	21	32			
塩水～汽水生種				0	2	0	0	0			
汽水生種				0	0	0	0	0			
淡水～汽水生種				0	0	0	0	0			
淡水生種				2	1	1	3	0			
珪藻化石総数				56	47	19	24	32			

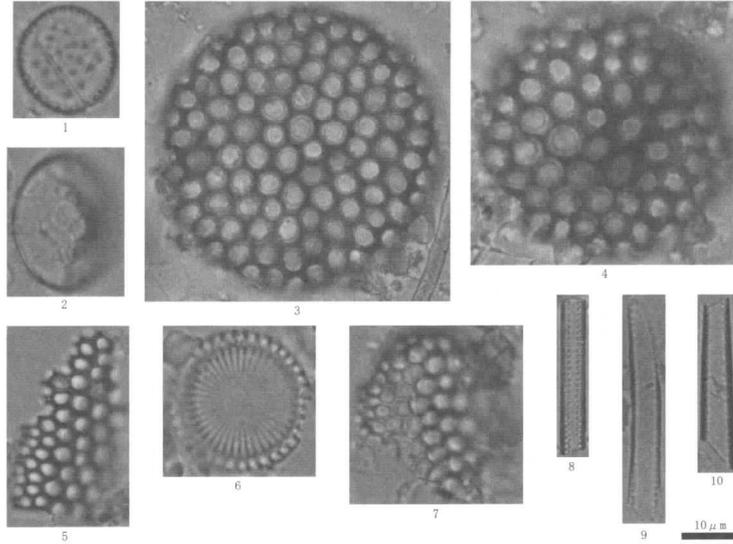
凡例
 Salinity: 塩分濃度に対する適応性 pH: 水素イオン濃度に対する適応性 Current: 流水に対する適応性
 Euh: 海水生種 al-b: 真アルカリ性種 l-h: 真正水性種
 Euh-Meh: 海水生種-汽水生種 al-1: 好アルカリ性種 l-ph: 好止水性種
 Meh: 汽水生種 ind: 好アルカリ性種 ind: 淡水不応性種
 Ogh-Meh: 淡水生種-汽水生種 ac-1: 好酸性種 r-ph: 好流水性種
 Ogh-h: 貧塩好塩性種 ac-h: 真酸性種 r-b: 真流水性種
 Ogh-und: 貧塩不応性種 unk: pH不明種 unk: 流水不明種
 Ogh-hub: 貧塩極塩性種
 Ogh-unk: 貧塩不明種

環境指標種
 A: 外洋指標種, B: 内湾指標種, C: 海水濁海指標種, C2: 汽水濁海指標種
 D1: 海水低質干潟指標種, D2: 汽水低質干潟指標種, E: 海水低質干潟指標種 (以上小杉, 1988)
 G: 淡水浮遊性種群, H: 河口浮遊性種群, I: 上流性河川指標種, K: 中～下流性河川指標種
 L: 急下流性河川指標種群, M: 湖沼浮遊性種群, N: 湖沼沿岸地帯指標種, O: 湖沼地帯指標種
 P: 高層塩原指標種群, Q: 陸域指標種群 (以上安藤, 1990)
 S: 好汚濁性種, U: 広適応性種, T: 好流水性種 (以上Asai & Watanabe, 1995)
 R: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群, RC: C区分, 伊藤・堀内, 1991)

第2表 珪藻分析結果

分類群	1地点 (4B杭付近)			2地点 (5E杭付近)		3地点 (調査区南西隅付近)
	II層	IV層	V層	IV層	V層	IV層
木本花粉						
モミ属	4	1	-	5	-	8
ツグヒ属	4	-	1	20	-	6
マツ属樹皮管束産属	1	-	-	14	3	3
マツ属樹脂管束産属	32	-	-	6	-	12
マツ属 (不明)	57	3	-	53	-	22
スギ属	2	-	-	-	-	6
ヤマモミ属	1	-	-	-	-	-
サワグルミ属	1	-	-	-	-	1
カバノキ属	1	-	-	1	-	-
ハコノキ属	1	-	-	1	-	-
コナラ属コナラ産属	22	-	-	4	1	18
クリ属	3	-	-	-	-	2
タニウツギ属	1	-	-	-	-	1
ニレ属-ケヤキ属	1	-	-	2	-	1
ツツジ科	1	-	-	-	-	1
スイカズラ属	-	-	-	-	-	1
草本花粉						
カヤツリグサ科	2	-	-	-	-	-
ミズアオイ属-ウナギツカミ属	1	-	-	-	-	-
アザミ科	1	-	-	-	-	-
フウロソウ属	1	-	-	-	-	-
セリ科	1	-	-	-	-	-
ヒルガオ属	1	-	-	1	-	-
ゴキツル属	-	-	-	-	-	2
ヨモギ属	4	-	-	2	-	18
オナモミ属	1	-	-	-	-	4
キク亜科	2	-	-	-	-	4
タンニシホ亜科	5	-	-	-	-	4
不明花粉						
不明花粉	5	-	-	1	-	5
シダ類胞子						
ゼンマイ属	4	-	-	1	-	-
ゼンショウモ	2	1	-	-	-	-
他のシダ類胞子	120	1	13	60	36	117
合計	134	4	1	143	7	109

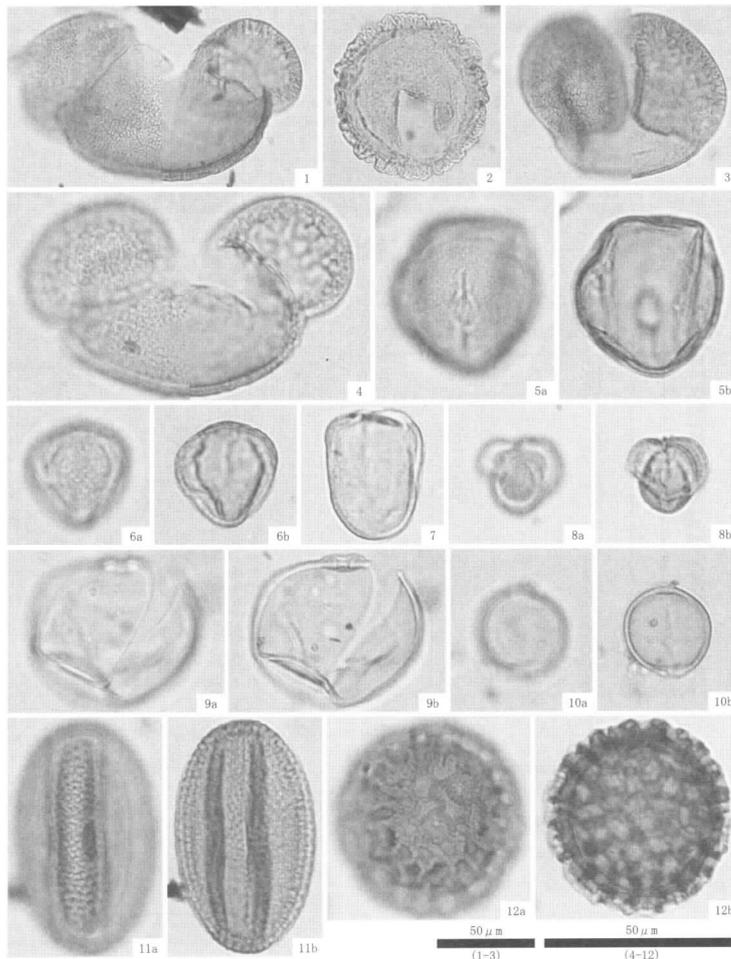
第3表 花粉分析結果



1. *Chaetoceros* spp. (1地点;2)
2. *Chaetoceros* spp. (1地点;3)
3. *Coscinodiscus marginatus* Ehrenberg (1地点;3)
4. *Coscinodiscus marginatus* Ehrenberg (1地点;3)
5. *Coscinodiscus* spp. (1地点;3)

6. *Paralia sulcata* (Ehr.) Cleve (1地点;2)
7. *Thalassiosira* spp. (1地点;3)
8. *Thalassiothrix longissima* Cleve et Grunow (1地点;3)
9. *Thalassionema nitzschioides* (Grun.) Grunow (1地点;3)
10. *Thalassionema nitzschioides* (Grun.) Grunow (1地点;3)

第8図 珪藻化石写真



1. モミ属 (1地点;2)
2. ツガ属 (2地点;1)
3. トウヒ属 (2地点;1)
4. マツ属 (1地点;2)
5. ブナ属 (1地点;2)
6. コナラ属コナラ亜属 (1地点;2)
7. カヤツリグサ科 (1地点;2)
8. ヨモギ属 (1地点;2)
9. イネ科(イネ属型) (1地点;2)
10. イネ科 (1地点;2)
11. ソバ属 (1地点;2)
12. サナエタデ節-ウナギツカミ節 (1地点;2)

第9図 花粉化石写真

第Ⅶ章 まとめ

1 遺構と遺物について

調査の結果、古代の掘立柱建物2棟に加え土坑、溝などが見つかった。出土した遺物は縄文土器や古墳時代の土師器、古代の須恵器・土師器、中・近世の土器に加え、瓦、鍛冶関連遺物、砥石、木製品など多岐に渡る。出土した遺物の中で主体を成すのは、古代の須恵器および土師器である。遺存度が悪く時期の明確な遺物が少ないが、おおむね8世紀前半から9世紀後半に収まると見られ、中でも8世紀後半と9世紀後半の2時期に一定のまとまりが認められる。前者は在地窯産と考えられる須恵器、後者は佐渡小泊窯産須恵器を主体とする。土器組成は食膳具が全体における割合が高く、その中でも須恵器が圧倒的多数を占め、遺跡の性格を示すものと捉えられる。

特筆すべき遺物としてはまず墨書土器がある。文字の判読には至らなかったが本遺跡の性格を知る上で重要な資料と言える。次に丸瓦が1点のみであるが出土している。瓦は、本遺跡の南に近接する同時期の下ノ西遺跡でも確認されており関係性が窺える。この他に鍛冶関連遺物が定量出土した。鍛冶に関わる遺構は検出されなかったが、集落内において鍛冶行為が成されていたものと考えられる。古代以外では、中・近世遺物が定量認められた。基本層序において後世の攪乱等が認められたことも踏まえると、古代以降の人々が現代に至るまで場所を同じくして生活を営んでいた様子が窺える。

遺構は調査区内北西部の微高地上に集中して展開している。本調査では集落の縁辺部を検出したものと考えられ、古代の集落本体は現在の島崎集落が立地する微高地上に立地するものと推定される。自然科学分析の結果から、古代の生活面は好気的環境下にあったとされ、住みやすい状況であったと推察できる。検出した掘立柱建物2棟(SB1・2)は全容を把握できないが、柱穴の規模や柱間距離等から比較的小型の建物であったと想定される。また、建物の南側では集落域を示す区画溝と考えられる遺構(SD1)を検出した。さらに、調査区南西部の低地では川岸に続く入口部を想定させる凹地部(SX10)が検出された。本遺跡は、小島谷川と郷本川(旧島崎川)の合流点付近に位置しており、古代においても河川の近くに立地していたものと推察される。古代における和島地域は旧島崎川を中心とした内水面の利用が盛んであったとされており、浦反甫西遺跡でも河川との結び付きがあったものと考えられる。調査区南西部の地形は、このような背景があったことを意味づけるものと捉えたい。

2 遺跡の性格について

最後に周辺遺跡との関係から、浦反甫西遺跡の性格を探ってみたい。本遺跡の半径約1km圏内には沖積地に立地する川東遺跡、浦反甫東遺跡、浦反甫遺跡、下ノ西遺跡等が所在し、北西には丘陵部一帯に展開する八幡林官衙遺跡など古代の遺跡が密集する。本遺跡を含めたこれら周辺の遺跡は、7世紀後半から10世紀前半の中で互いに連動し合い機能していたものと考えられ、八幡林官衙遺跡や下ノ西遺跡、浦反甫東遺跡では大型の建物群を中心とした遺構が展開する。一方で、本遺跡や浦反甫遺跡では比較的小型の建物が造営される。狭い範囲の中で公的な施設を有する大規模な遺跡と小規模な遺跡群が存在し、それぞれが密接に関わっていたものと考えられる。このような背景の中で、浦反甫西遺跡はあくまで一般的な集落として機能していたものと捉えたい。

また、『和名類聚抄』『延喜式』には古代の越後国古志郡において「大家郷」「大家駅」の記載がある。八幡林官衙遺跡Ⅰ区出土の「大カ家驛」と記された墨書土器や、下ノ西遺跡Ⅴ区で検出された官衙風の建

物を中心とする遺構群や馬の洗い場状遺構の存在から、「大家郷」を和島地域と捉え、「大家駅」が下ノ西遺跡の施設に比定できると考えられていおり〔和島村教育委員会 2003〕、歴史的にも重要な地域の1つと言える。いま未特定の郷や、駅家跡、古代北陸道など問題はあがるが、歴史的に見ても重要と言える和島地域の中で、浦反甫西遺跡を含む周辺の遺跡群が、古代においてそれぞれどのような性格を持って機能していたかを追求していくことが今後の課題となろう。 (南波)

参考文献

- 春日 真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域制」『新潟県の考古学』 高志書院
- 春日 真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について ―「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に―」『新潟考古 第16号』新潟県考古学会
- 木村 孝一郎 2008 「越前焼の編年的研究ノート」『吾々の考古学』 和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』 九州近世陶磁学会
- 品田 高志 1999 「第5章 中世・近世 第3節 中世の在地生産 第1項 中世土師器」『新潟県の考古学』 高志書院
- 寺泊町 1991 『寺泊町史 資料編1 原始・古代・中世』
- 長岡市教育委員会 2007 『山田郷内遺跡』
- 長岡市教育委員会 2010 『平成21年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』
- 長岡市教育委員会 2011 『五千石遺跡』
- 長岡市教育委員会 2011 『平成22年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』
- 長岡市教育委員会 2012 『吉沢遺跡』
- 長岡市教育委員会 2013 『天王遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集 梯子谷窯跡』
- 藤澤 良祐 2005 「Ⅲ 窯炉と陶磁器の分類・編年」『日本の遺跡5 瀬戸窯跡群 歴史を刻む日本の代表的窯跡群』 同成社
- 藤澤 良祐 2008 「第1部 編年研究編 第5章 古瀬戸後期様式の編年」『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
- 丸山 一昭 2012 「旧島崎川流域における古代の遺跡 ―近年新発見の遺跡を中心に―」『長岡市立科学博物館研究報告 第47号』長岡市科学博物館
- 丸山 一昭 2013 「長岡市 浦反甫東遺跡の調査」『新潟県考古学会 第25回大会 研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会
- 吉岡 康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 和島村 1996 『和島村史 資料編I 自然・原始古代・中世・文化財』
- 和島村 1996 『和島村史 通史編』
- 和島村教育委員会 1995 『和島村埋蔵文化財調査報告書第4集 門新遺跡』
- 和島村教育委員会 2000 『和島村埋蔵文化財調査報告書第9集 下ノ西遺跡Ⅲ』
- 和島村教育委員会 2003 『和島村埋蔵文化財調査報告書第14集 下ノ西遺跡Ⅳ』
- 和島村教育委員会 2005 『和島村埋蔵文化財調査報告書第16集 八幡林遺跡Ⅳ』
- 和島村教育委員会 2005 『和島村埋蔵文化財調査報告書第17集 門新遺跡谷地地区Ⅱ』

第4表 遺構観察表

* ()は調査区内における遺構の規模

図版No.	遺構名	グリッド	検出面	形状	間数	面積 (㎡)	梁行 (m)	桁行 (m)	方位	備考	
5	SB1	3B-2~4	V	平面長方形か	2間×1間以上	-	4.85	-	N-11° -W		
図版No.	柱穴	グリッド	検出面	形状	間数	面積 (㎡)	梁行 (m)	桁行 (m)	方位	備考	
5	P3	3B-2	V	平面形	断面形	長軸 (径)	短軸	深さ	底面標高 (m)		
5	P4	3B-3	V	円形	階段状	0.54	0.50	0.20	14.18	N-28° -W	
5	P5	3B-3・4	V	円形	階段状	0.46	0.40	0.18	14.20	N-25° -E	
5	P6 (西側)	3B-4	V	円形	階段状	0.51	0.46	0.23	14.15	N-71° -E	
5	P6 (西側)	3B-4	V	楕円形	階段状	0.85	0.54	0.45	13.90	N-69° -W	柱径径0.13m 切合SB1-P6>SB2-P6
図版No.	遺構名	グリッド	検出面	形状	間数	面積 (㎡)	梁行 (m)	桁行 (m)	方位	備考	
5	SB2	3B-2~5・8・9	V	平面長方形か	2間×2間以上	-	5.15	(2.05)	N-13° -E		
図版No.	柱穴	グリッド	検出面	形状	間数	面積 (㎡)	梁行 (m)	桁行 (m)	方位	備考	
5	P2	3B-2	V	平面形	断面形	長軸 (径)	短軸	深さ	底面標高 (m)		
5	P2	3B-2	V	円形	台形状	0.42	0.38	0.24	14.13	N-73° -W	
5	P6 (東側)	3B-4	V	円形	階段状	0.38	-	0.52	13.81	-	柱径径0.13m 切合SB2-P6<SB1-P6
5	P21	3B-9	V	楕円形	階段状	0.52	0.4	0.3	14.08	N-46° -E	
5	P24	3B-8	V	円形	U字状	0.46	0.39	0.31	14.06	N-5° -W	
図版No.	遺構名	グリッド	検出面	形状	間数	面積 (㎡)	梁行 (m)	桁行 (m)	方位	備考	
5	SK11	3B-13・14・18・19	V	平面形	断面形	長軸 (径)	短軸 (幅)	深さ	底面標高 (m)		
6	SK13	4D-19・20・24	V	不整な円形	弧状	(2.81)	2.50	0.26	14.03	N-11° -E	
5	SK14	3B-18・19	V	円形	弧状	0.91	0.84	0.15	14.22	N-55° -E	
2・3・6	SD1	2~5B	V	蛇行	弧状、台形状	(25.22)	0.26~0.63	0.05~0.28	14.20~14.32	N-78~86° -E N-81° -W	区画溝か 切合SD1>SD9
2・4・6	SD9	2・3B、3・4C、4D	V	直線状	弧状、不整な弧状	(23.10)	0.33~2.04	0.08~0.21	14.25~14.32	N-31~39° -W	切合SD9<SD1
2・6	SD15	2・3B、2C	V	蛇行	弧状	(7.85)	0.54~1.02	0.27	14.12	N-55° -E	
6	SK10	2・3D	V	不整な楕円形	弧状	(4.53)	(2.61)	0.30	13.90	N-83° -E	自然地形由来か
7	P7	2C-25	V	円形	U字状	0.26	0.24	0.17	14.23	N-3° -E	
7	P8	3C-21	V	楕円形	半円状	0.38	0.28	0.14	14.24	N-24° -E	
7	P16	3C-18	V	不整な円形	弧状	0.60	0.58	0.15	14.20	N-70° -E	
7	P17	2C-13・14	V	楕円形	階段状	(0.57)	0.50	0.18	14.20	N-75° -W	
7	P18	3B-10	V	円形	U字状	0.32	0.27	0.17	14.16	N-56° -E	
7	P19	3B-10	V	円形	U字状	0.33	0.30	0.16	14.18	N-78° -W	
7	P20	3B-4・9	V	円形	U字状	0.20	0.18	0.22	14.16	N-55° -E	柱径径0.08m
7	P22	3B-8・9	V	円形	弧状	0.19	0.18	0.10	14.28	N-7° -W	
7	P23	3B-5、4B-1	V	円形	台形状	0.47	0.43	0.20	14.11	N-43° -E	
7	P25	3C-16	V	円形	漏斗状	0.18	0.17	0.15	14.22	N-5° -W	
7	P26	2C-15	V	円形	U字状	0.22	-	0.33	14.04	-	柱根
7	P27	3C-4	V	円形	半円状	0.19	0.18	0.09	14.27	N-66° -W	
7	P28	3B-9	V	円形	不整なU字状	0.22	-	0.19	14.21	-	
7	P29	3B-4	V	円形	U字状	0.25	0.23	0.18	14.18	N-79° -E	
7	P30	3B-7	V	円形	U字状	0.41	-	0.24	14.15	-	
7	P31	5B-11	V	不整な楕円形	U字状	0.26	0.22	0.14	14.25	N-39° -E	
7	P32	5B-6	V	円形	U字状	0.26	0.25	0.21	14.18	N-86° -W	
7	P33	5B-14	IV	円形	U字状	0.18	0.17	0.26	14.11	N-73° -W	杭
7	P34	4C-24	IV	円形	U字状	0.14	0.12	0.13	14.24	N-37° -W	杭
7	P35	4C-24	IV	円形	U字状	0.21	-	0.21	14.16	-	杭
7	P36	4C-11	IV	円形	U字状	0.13	0.11	0.29	14.06	N-86° -W	杭か
7	P37	3D-9	IV	円形	U字状	0.15	0.12	0.30	14.00	N-44° -E	杭か

第5表 土器・陶磁器・瓦観察表(1)

*混入物凡例 石:石英 長:長石 角:角閃石 チ:チャート 骨:海綿骨針 白粒:白色粒子 黒粒:黒色粒子 赤粒:赤色粒子 砂:砂粒

図版No.	遺物No.	出土位置	遺構名	層位	種別	器種	法量 (cm)		残存率	焼成	胎土	混入物	調整		回転方向	備考	
							口径	底径					器高	外			内
8	1	3B-2	SB1-P3	上面	須恵器	甕			体部片	良好	やや密	石・白粒・礫	灰白	格子目タタキ	同心円当て具痕		
8	2	3B-5	SB1-P5	上面	須恵器	無台坏	7.6		底部1/6	良好	密	白粒・黒粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	左	黒斑噴出 底:回転ヘラ切り
8	3	3B-8	SB2-P24	1層	須恵器	有台坏	7.6		底部1/8	良好	密	石・白粒・黒粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		断面:灰褐
8	4	3B-19	SK11	上面	須恵器	坏	13.0		口縁部1/10	やや良好	密	石・白粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
8	5	3B-19	SK11	上面	須恵器	無台坏	13.5	9.0	底部1/6	良好	やや密	石・白粒・砂	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	右か	底:回転ヘラ切り
8	6	2B-10 3B-11 3B-22 4B-22 4B-25	SD1	2層 上面 IV IV	須恵器	环蓋	18.4		口縁部1/6	良好	やや密	白粒・黒粒・礫	灰/灰白	ヘラケズリ ナデ	ナデ	左か	断面:灰褐
8	7	2B-14	SD1	2層	須恵器	环蓋	18.2		口縁部1/26	やや良好	やや密	石・白粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
8	8	3B-12 5C-13	SD1	上面 IV	須恵器	环蓋			体部片	良好	やや密	白粒・黒粒・礫	褐灰/灰	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	左	断面:にふい赤褐
8	9	2B-14	SD1	2層	須恵器	有台坏	16.5		口縁部1/18	やや良好	密	白粒・礫	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		断面:灰褐
8	10a	4B-12	SD1	上面	須恵器	有台坏	13.9		口縁部1/6	良好	やや密	白粒・黒粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		黒斑噴出
8	10b	4B-14	SD1	上面	須恵器	有台坏	11.5	8.0	底部1/3	良好	やや密	白粒・黒粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		黒斑噴出
8	11	2B-10	SD1	2層	須恵器	無台坏	11.5		口縁部1/6	良好	密	白粒	淡黄/浅黄	ロクロナデ	ロクロナデ		
8	12	2B-15	SD1	2層	須恵器	無台坏	12.6		口縁部1/36	やや良好	やや密	石・白粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
8	13	3B-12	SD1	上面	須恵器	無台坏	8.6		底部1/2	良好	やや密	白粒・黒粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	左か	黒斑噴出 底:回転ヘラ切り
8	14	3B-11	SD1	2層	土師器	無台坏	9.4		底部1/6	やや良好	密	石・白粒	浅黄橙	ロクロナデか	ロクロナデか	右	
8	15a	4C-17		IV	須恵器	蓋			体部片	良好	やや密	石・白粒・黒粒・礫	灰/灰白	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		
8	15b	3B-11	SD1	2層	須恵器	蓋	13.4		口縁部1/12	良好	やや密	石・白粒・黒粒・礫	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
8	16	3B-11	SD1	2層	須恵器	長頸壺	5.6		口縁部1/6	良好	密	白粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
8	17	2B-13 3B-13	SD1	上面 IV	須恵器	長頸壺			頸部片1/2	良好	密	石・白粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		黒斑噴出
8	18	2B-14	SD1	上面	須恵器	壺			体部片	良好	密	黒粒・礫	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		外:自然釉
8	19	2B-13	SD1	上面	須恵器	長頸壺か	11.4		底部1/8	良好	やや密	石・長・白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
8	20	5B-12	SD1	上面	須恵器	甕			体部片	良好	密	白粒・黒粒	灰/灰白	平行タタキ	同心円当て具痕		
8	21	2B-14	SD1	2層	土師器	甕	13.6		口縁部1/12	やや良好	やや粗	石・長・砂	浅黄橙	ナデ	ナデ		
8	22	3B-12	SD1	上面	土師器	甕	18.6		口縁部1/24	良好	やや密	石・砂	浅黄橙/ にふい黄橙	ナデ	ハケ		
8	23	2B-10	SD1	2層	土師器	甕	18.2		口縁部1/12	やや良好	やや粗	石・長・骨・砂	橙	ナデ	ナデ		
8	24	3B-11	SD1	2層	土師器	甕	6.6		底部1/3	やや不良	やや密	石・礫	橙/浅黄橙	ロクロナデか	ロクロナデか		
8	25	2B-15	SD1	上面	土師器	甕	7.4		底部1/5	やや良好	粗	石・長・赤粒	にふい黄橙/ 灰白	ロクロナデか	ロクロナデか		
8	26	2B-10	SD1	上面	土師器	製塩土器	9.4		底部1/4	やや不良	粗	石・砂	にふい黄橙/ にふい黄橙	ナデ	ナデ		輪積み痕
8	27	3B-12	SD1	3層	縄文土器	深鉢			体部片1/2	やや不良	やや粗	骨・赤粒・礫	にふい黄橙/ 灰白	LR縄文	ナデ		外:下部二次焼成 内:下部オコゲ 付着

第6表 土器・陶磁器・瓦観察表(2)

図版No.	遺物No.	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			残存率	焼成	胎土	混入物	色調 (外/内)	調整		回転方向	備考	
		グリッド	遺構名			層位	口径	底径						器高	外			内
9	29	2B-15 3B-17 2C-25	SD1	2層 上面 IV	須恵器	横瓶				体部片	良好	密	石・白粒	灰	平行タタキ→ カキ目	同心円当て具痕 →ナデ		断面：にぶい橙
9	30	3B-17	SD9	1層 上面 IV	須恵器	円蓋	21.3			口縁部1/20	良好	やや密	白粒	褐灰/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		断面：にぶい褐
9	31	3B-17 3B-9	SD9	1層 上面 IV	須恵器	円蓋	15.5			口縁部1/14	良好	密	白粒・黒粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
9	32	3B-17 3B-17	SD9	1層 上面 IV	須恵器	円蓋	14.6	2.9		口縁部1/6	良好	やや密	白粒・黒粒	灰白	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	右	
9	33	3B-17	SD9	1層	須恵器	円蓋				体部片1/3	良好	やや密	石・白粒・黒粒・礫	灰/灰白	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	右	断面：にぶい橙
9	34	3B-17	SD9	1層	須恵器	有台環	17.5			口縁部1/6	良好	やや密	石・長・白粒・黒粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
9	35	3B-17	SD9	1層	須恵器	有台環	8.6			底部1/3	良好	やや密	石・白粒・黒粒・礫	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	左か	底：回転ヘラ切り
9	36	3B-17	SD9	1層	須恵器	有台環	7.8			底部1/10	良好	密	白粒・礫	灰白	ナデ	ロクロナデ		
9	37	3B-12	SD9	1層	須恵器	無台環	14.5	10.4	3.3	口縁部1/6	やや不良	密	石・長・白粒	灰白	ロクロナデか	ロクロナデか		断面：橙
9	38	3B-17 2B-14 3B-24	SD9	1層 上面 IV	須恵器	無台環	13.0	9.8	4.2	底部1/2	やや良好	やや粗	石・白粒・礫	橙/明褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	右	底：回転ヘラ切り
9	39	3B-17	SD9	1層	須恵器	無台環	8.2			底部1/4	やや良好	やや密	白粒・赤粒・礫	橙/浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	左か	底：回転ヘラ切り
9	40	3B-12	SD9	1層	須恵器	無台環	8.4			底部1/5	やや良好	密	石・白粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		底：回転ヘラ切り
9	41	3B-18 3B-7	SD9	1層 上面 IV	須恵器	無台環		10.2		底部1/4	やや良好	やや密	石・白粒・礫	橙/浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	右	底：回転ヘラ切り
9	42	3B-17	SD9	1層	須恵器	無台環	9.0			底部1/4	やや良好	やや密	石・白粒・赤粒・礫	橙/にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	右	底：回転ヘラ切り
9	43	3B-17	SD9	1層	須恵器	無台環	8.0			底部1/8	良好	密	白粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		内：漆付着
9	44	3B-17	SD9	1層	須恵器	環	11.4			口縁部1/6	良好	密	白粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
9	45	3B-17	SD9	1層	須恵器	環	11.7			口縁部1/8	良好	密	白粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		内：漆付着
9	46	3B-17	SD9	1層	須恵器	環	11.6			口縁部1/10	良好	密	白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		黒斑噴出
9	47	3B-17	SD9	1層	須恵器	無台環	8.2			底部1/8	やや良好	密	白粒・黒粒・礫	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		底：回転ヘラ切り
9	48	3B-17	SD9	1層	須恵器	無台環	7.2			底部1/6	良好	やや密	角・白粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	右か	底：回転ヘラ切り
9	49	3B-12	SD9	1層	須恵器	無台環	9.4			底部1/4	良好	密	石・白粒・黒粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		底：回転ヘラ切り
9	50	3B-7	SD9	1層	土師器	無台碗か	16.9			口縁部1/16	やや不良	やや密	長・白粒	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
9	51	3B-12	SD9	1層	土師器	無台碗	6.0			底部1/6	やや不良	やや密	石・長	浅黄橙	ロクロナデか	ロクロナデか		
9	52	4D-7	SD9	1層	土師器	無台碗か	5.8			底部1/6	やや不良	やや密	石・白粒・赤粒・砂	浅黄橙	ロクロナデか	ロクロナデか		
9	53	3B-17	SD9	1層	須恵器	長頸壺	9.6			口縁部1/10	良好	密	角・白粒・黒粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
9	54	3B-17 3B-3 4B-12	SD9	1層 上面 IV	須恵器	長頸壺	5.9			口縁部1/4	良好	やや密	白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ 2条沈線	ロクロナデ	左か	
9	55	3B-23	SD9	1層	須恵器	長頸壺か				体部片	良好	やや粗	石・白粒・黒粒・礫	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
9	56	3B-17 3B-22	SD9	1層 上面 IV	土師器	甕	32.1			口縁部1/18	やや良好	粗	石・長・砂	灰白	ナデか	ナデか		
9	57	3B-17	SD9	1層	土師器	甕	18.6			口縁部1/10	やや不良	粗	石・長・砂	浅黄橙/ にぶい黄褐	ナデか	ナデか		
9	58	3B-17	SD9	1層	土師器	甕	5.4			底部1/6	やや良好	やや粗	石・砂	にぶい黄橙/ 灰白	ナデか	ヨコハケ		内：オコゲ付着
9	59	3B-12	SD9	1層	土師器	甕	6.0			底部完存	やや不良	やや粗	石・砂	浅黄橙/褐灰	ナデか	ナデか		外：二次焼成
9	60	3B-17	SD9	1層	土師器	甕	5.5			底部1/6	やや不良	やや粗	石・砂	橙/にぶい黄橙	ナデか	ナデか		
9	61	4C-21	SD9	1層	土師器	甕	6.6			底部1/6	やや良好	やや密	石・白粒	灰白/浅黄橙	ナデか	ナデか		
9	62	3B-17	SD9	1層	土師器	筒形土製品か	20.9			口縁部1/16	やや良好	粗	石・長・礫	灰白/淡橙	ナデか	ナデか		輪積み痕 一部二次焼成
9	63	3B-17	SD9	1層	土師器	皿	10.8			口縁部1/10	やや不良	密	白粒	黒褐色	ナデ	ヨコハケ		
9	64a	3B-12	SD9	1層	須恵器	甕	38.0			口縁部1/16	良好	やや密	石・白粒・黒粒・礫	灰白	ナデ、波状文	ナデ		
9	64b	3D-11 4D-13 5D-3	SX10	1層 IV	須恵器	甕				体部片	良好	やや密	石・白粒・黒粒・礫	灰白	平行タタキ→ ナデ	同心円当て具痕		
10	65	3D-11 2D-14	SX10	1層 IV	須恵器	有台環	8.6			底部1/4	良好	やや密	石・白粒	灰白/ にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		底：回転ヘラ切り
10	66	2D-15	SX10	1層	土師器	無台碗	5.2			底部1/4	良好	密	白粒	にぶい黄橙/ 灰黄褐	ロクロナデか	ロクロナデか		底：回転系切り
10	67	3D-6	SX10	1層	土師器	無台碗	5.8			底部1/8	良好	密	白粒	浅黄橙/ 褐灰	ロクロナデか	ロクロナデか		
10	68	3D-11	SX10	1層	土師器	無台碗	6.0			底部1/5	不良	やや密	石・白粒・礫	明赤褐/橙	ナデか	ナデか		
10	69	2D-15 3D11	SX10	1層 IV	須恵器	甕				体部片	良好	やや密	黒粒・礫	灰/灰白	平行タタキ	平行当て具痕		
10	73	3C-18	P16	1層	土師器	高環				頸部完存	やや不良	やや粗	石・白粒・礫	橙/浅黄橙	ナデか	ナデか		
10	74	2C-13	P17	1層	須恵器	甕				体部片	やや良好	やや粗	石・礫・砂	浅黄橙	平行タタキ	同心円当て具痕		
10	75	6C-1	IV	1層	土師器	壺	18.0			口縁部1/18	やや不良	やや粗	石・礫	橙/にぶい橙	ナデか	ナデか		
10	76	-	IV	1層	土師器	甕	14.4			口縁部1/24	やや不良	やや粗	石・礫	明褐灰/橙	ナデか	ヨコハケ		
10	77	6C-17	IV	1層	土師器	甕	17.5			口縁部1/12	やや不良	やや粗	石・砂	灰白	ナデか	ナデか		
10	78	3C-12	IV	1層	土師器	高環				脚部片	良好	密	石・白粒	灰白	ナデか	ナデか		
10	79	4B-16	IV	1層	土師器	高環				脚部片	やや良好	やや粗	石・白粒・礫	浅黄橙/褐灰	ナデか	ナデか		
10	80	3C-25	IV	1層	土師器	高環				脚部片	やや良好	やや粗	石・白粒・黒粒・礫	浅黄橙/黒褐	ナデか	ナデか		坯部内：黒色処理
10	81	6D-22	IV	1層	土師器	甕	17.5	23.5	4.1	口縁部1/12	やや不良	粗	石・礫	浅黄橙/橙	口：ナデ 体：ハケ 底：ケズリ	ナデか		
10	82	3B-12	IV	1層	須恵器	円蓋	16.3			口縁部1/10	良好	密	白粒・黒粒・礫	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		断面：灰褐
10	83	3C-22	IV	1層	須恵器	円蓋	16.2			口縁部1/12	良好	密	石・白粒・黒粒・礫	灰白	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		
10	84	3B-11	IV	1層	須恵器	円蓋	12.6			口縁部1/5	良好	密	白粒・黒粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
10	85	4B-20	IV	1層	須恵器	円蓋	12.5			口縁部1/8	良好	密	白粒	灰黄/ にぶい黄橙	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	右か	
10	86	2C-14	IV	1層	須恵器	円蓋				上部完存	良好	やや密	石・白粒・黒粒	灰白	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	左	
10	87	3C-14	IV	1層	須恵器	円蓋				上部完存	良好	密	白粒・黒粒・礫	灰白	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	右	黒斑噴出
10	88	4B-11	IV	1層	須恵器	環蓋				体部片	良好	やや密	石・白粒	灰白	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	右	内：漆付着 漆パレットとして 転用か
10	89	2D-15	IV	1層	須恵器	蓋				つまみ部	良好	密	白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		黒斑噴出
10	90	2B-10	IV	1層	須恵器	蓋				つまみ部	やや良好	やや密	白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
10	91	3B-12	IV	1層	須恵器	蓋				つまみ部	良好	密	白粒・礫	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
10	92	5D-18	IV	1層	須恵器	蓋				つまみ部	良好	やや密	石・白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
10	93	6B-6	IV	1層	須恵器	有台環	9.7			底部1/8	良好	密	石・白粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	左	底：回転ヘラ切り
10	94	3C-21	IV	1層	須恵器	有台環	8.1			底部1/14	良好	密	白粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		断面：灰褐
10	95	3B-7	IV	1層	須恵器	有台環	9.0			底部1/8	良好	やや密	石・白粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		底：回転ヘラ切り
10	96	3B-8	IV	1層	須恵器	有台環	8.3			底部1/5	良好	やや密	石・白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
10	97	2D-15	IV	1層	須恵器	有台環	6.8			底部1/14	良好	やや粗	石・白粒・黒粒・赤粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		

第7表 土器・陶磁器・瓦観察表(3)

図版 No.	遺物 No.	出土位置			種別	器種	法量 (cm)			残存率	焼成	胎土	混入物	色調 (外/内)	調整		回転 方向	備考
		グリッド	遺構名	層位			口径	底径	器高						外	内		
10	98	4B-20・23		IV	須恵器	有台环	12.7	8.5	5.4	底部1/2	良好	やや密	白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
10	99	2C-4		IV	須恵器	有台环		8.0		底部1/5	良好	やや密	白粒・黒粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		底:回転ヘラ切り
10	100	4D-11		IV	須恵器	有台环	10.2	5.4	6.8	底部1/4	良好	やや密	白粒・黒粒・礫	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	左	底:回転ヘラ切り
10	101	4C-21		IV	須恵器	有台环		6.8		底部1/6	良好	密	白粒・黒粒・赤粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		底:糸切り
10	102	3B-25 4B-17		IV	須恵器	有台环		6.2		底部1/4	良好	やや密	白粒・黒粒・赤粒・礫	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		底:回転ヘラ切り
10	103	2B-25 3D-1		IV	須恵器	无台环	12.4			口縁部1/6	良好	密	長・白粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		断面:にぶい褐
10	104	3B-14		IV	須恵器	无台环	14.5			口縁部1/8	良好	やや密	石・白粒	灰白/ にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
10	105	4B-4・25		IV	須恵器	无台环		9.4		底部1/4	良好	やや粗	石・白粒・黒粒・赤粒・礫	橙	ロクロナデ	ロクロナデ	左	底:回転ヘラ切り
10	106	2C-19 4B-20		IV	須恵器	无台环		10.0		底部1/2	良好	やや密	石・長・白粒・礫	明褐色/ にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
10	107	4B-12		IV	須恵器	无台环		9.2		底部1/5	良好	やや粗	石・白粒・黒粒・赤粒	浅黄橙/ にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		底:回転ヘラ切り
10	108	3D-6・7		IV	須恵器	无台环		8.5		底部2/3	やや良好	やや密	白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	右	底:回転ヘラ切り
10	109	3C-3		IV	須恵器	无台环		8.8		底部1/6	良好	やや密	石・白粒	橙/にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		底:回転ヘラ切り
10	110	3C-17		IV	須恵器	无台环		7.8		底部1/5	良好	やや密	石・白粒	橙/浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	右	底:回転ヘラ切り
10	111	2B-14		IV	須恵器	无台环		8.2		底部1/3	良好	密	石・白粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
11	112	5C-6		IV	須恵器	无台环	13.4	9.2	3.8	底部1/5	良好	やや密	石・白粒・黒粒・礫	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		底:回転ヘラ切り
11	113	3C-13		IV	須恵器	无台环		9.4		底部1/8	良好	やや密	石・白粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	左	底:回転ヘラ切り
11	114	4C-15		IV	須恵器	无台环		10.4		底部1/5	良好	やや密	石・白粒・黒粒・礫	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		底:回転ヘラ切り
11	115	2C-4		IV	須恵器	无台环	14.4			口縁部1/22	良好	密	石・白粒・礫	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
11	116	3C-24		IV	須恵器	无台环	10.9			口縁部1/14	やや良好	やや密	石・白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
11	117	3D-12		IV	須恵器	无台环		8.0		底部1/6	良好	密	白粒・黒粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		黒斑噴出 底:回転ヘラ切り 底:墨書「□」
11	118	3C-5		IV	須恵器	无台环		7.2		底部1/4	良好	やや密	長・白粒・黒粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	左	底:回転ヘラ切り
11	119	4B-14		IV	須恵器	无台环	12.8	9.0	3.8	底部1/4	良好	密	白粒・黒粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	左	底:回転ヘラ切り
11	120	3C-10		IV	須恵器	无台环	12.5	8.6	3.5	底部1/5	良好	やや密	白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		底:回転ヘラ切り
11	121	3C-20		IV	須恵器	无台环		12.2		底部1/10	良好	やや密	石・白粒・黒粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	右	底:回転ヘラ切り
11	122	4C-6		IV	須恵器	无台环		9.4		底部1/8	良好	やや密	石・白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	右	底:回転ヘラ切り
11	123	4C-12		IV	須恵器	无台环		9.2		底部1/8	良好	やや密	石・白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	左	底:回転ヘラ切り
11	124	4B-17		IV	須恵器	无台环		10.6		底部1/4	良好	やや密	石・白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	右	底:回転ヘラ切り
11	125	3D-11		IV	須恵器	无台环	12.0	7.8	2.9	底部1/4	良好	やや密	石・白粒・黒粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	右	黒斑噴出 底:回転ヘラ切り
11	126	4B-6・11		IV	須恵器	无台环	12.2	8.0	3.0	底部1/3	良好	密	角・白粒・黒粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	左	黒斑噴出 底:回転ヘラ切り
11	127	4B-11		IV	須恵器	无台环		7.6		底部1/4	良好	密	石・白粒・黒粒・礫	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	左	底:回転ヘラ切り
11	128	3B-6		IV	須恵器	无台环		8.0		底部1/8	良好	やや密	長・角・黒粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	右	底:回転ヘラ切り
11	129	3D-1		IV	須恵器	无台环		7.6		底部1/4	良好	やや密	石・白粒・黒粒	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	左	黒斑噴出 底:回転ヘラ切り
11	130	4B-18		IV	須恵器	无台环		8.8		底部1/8	良好	やや密	石・白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	左	底:回転ヘラ切り
11	131	4B-22 4D-8		IV	須恵器	盤か		8.2		底部1/3	良好	やや密	石・白粒・黒粒・礫	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
11	132	4B-13		IV	土師器	无台环	14.8	3.1	10.6	底部1/2	やや良好	やや粗	石・角・骨・白粒・黒粒	灰白/浅黄橙	ナデか	ナデか		
11	133	4B-25		IV	土師器	无台环		7.8		底部1/4	やや不良	やや密	石・礫	浅黄橙	ナデ	ナデ		
11	134	4B-8		IV	土師器	无台环		5.6		底部1/3	やや不良	やや密	石・長・白粒・礫	橙	ロクロナデ	ロクロナデ		底:回転ヘラ切り
11	135	5C-6		IV	土師器	无台环		6.0		底部1/3	やや不良	やや密	石・礫	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
11	136	4D-12		IV	土師器	无台环		6.6		底部1/3	やや良好	やや密	石・礫	橙/にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
11	137	4C-11		IV	土師器	无台环		5.2		底部1/2	やや不良	やや粗	石・白粒	浅黄橙	ロクロナデか	ロクロナデか		
11	138	5B-15		IV	土師器	无台环		6.5		底部1/3	やや不良	やや粗	砂	浅黄橙	ナデか	ナデか		
11	139	4C-16		IV	土師器	无台环		5.4		底部1/3	やや不良	やや密	石	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
11	140	2D-10		IV	須恵器	壺	17.0			口縁部1/10	良好	密	石・白粒・黒粒	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
11	141	3B-22 3C-7		IV	須恵器	壺		11.0		底部1/12	良好	密	白粒	黄灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		黒斑噴出 外:自然軸
11	142	2C-25 3C-10 5B-19 5C-3		IV	須恵器	長頸壺か		10.4		底部1/3	良好	やや密	石・白粒	灰白	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	右	底:回転ヘラ切り
11	143	3C-2 4B-1・5		IV	須恵器	壺		11.2		底部1/10	良好	密	角・白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ナデ		
11	144	4C-11		IV	須恵器	壺		6.6		底部1/14	良好	やや密	白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		底:回転ヘラ切り
11	145	4D-15		IV	須恵器	壺		6.4		底部完存	良好	密	白粒・黒粒	灰/灰白	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	左	底:回転ヘラ切り
11	146	3B-8・13 3C-2		IV	須恵器	長頸壺				体部片1/3	良好	密	石・白粒・礫	灰白	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	左	
11	147	4C-11		IV	須恵器	長頸壺か				体部片1/3	良好	やや密	白粒・礫	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
11	148	2C-24		IV	須恵器	短頸壺	9.6			口縁部1/6	良好	密	白粒	灰白	ロクロナデ 洗線	ロクロナデ		外:自然軸
11	149	3B-22		IV	須恵器	無頸壺	3.6			口縁部1/5	良好	密		灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		外:自然軸
11	150	2B-14		IV	須恵器	壺か				体部片	やや良好	密	石・白粒・黒粒	灰白	カキ目か	ロクロナデ		
11	151	2B-14 3D-1		IV	須恵器	壺か				体部片1/3	良好	やや粗	石・長・白粒	灰白	ロクロナデ→ ナデ	ナデ カキ目		断面:灰褐
11	152	3D-20 4D-16		IV	須恵器	壺か				体部片	良好	やや密	白粒・黒粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ→ カキ目		断面:灰褐
11	153	4D-1 5D-9		IV	須恵器	横瓶	11.6			口縁部1/12	良好	やや粗	石・長・白粒・黒粒	灰白	ロクロナデ 平行タタキ→ カキ目	ロクロナデ		
12	154	3B-20		IV	須恵器	横瓶				体部片	良好	やや密	石・白粒・黒粒	灰白/ にぶい黄橙	カキ目	ロクロナデ		
12	155	4B-6		IV	須恵器	横瓶				体部片	良好	やや粗	長・黒粒・礫	灰白	平行タタキ→ カキ目	同心円当て具痕		
12	156	2C-15 2D-10 3C-12		IV	須恵器	横瓶				体部片	良好	密	白粒・黒粒	灰/灰白	平行タタキ→ カキ目	同心円当て具痕		
12	157	4C-11		IV	須恵器	甕				口縁部片	良好	密	白粒・黒粒	灰/灰白	ロクロナデ 液状文	ロクロナデ		
12	158	4D-6		IV	須恵器	甕	21.0			口縁部1/14	良好	やや粗	石・白粒・黒粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		断面:褐灰
12	159	4D-19		IV	須恵器	甕				頸部片	良好	やや粗	石・白粒・砂	灰	ロクロナデ ナデ	同心円当て具痕 →ナデ		断面:にぶい赤褐
12	160	4D-18		IV	須恵器	甕				体部片	良好	密	石・白粒	灰白/灰	平行タタキ→ ナデ	同心円当て具痕 →ナデ		
12	161	2D-15		IV	須恵器	甕				体部片	やや良好	やや密	石・砂	灰白/浅黄橙	平行タタキ→ カキ目	同心円当て具痕		

第8表 土器・陶磁器・瓦観察表(4)

図版No.	遺物No.	出土位置			種類	器種	法量 (cm)			残存率	焼成	胎土	混入物	色調 (外/内)	調整		回転方向	備考
		グリッド	遺構名	層位			口径	底径	器高						外	内		
12 162	2C-14・15			IV	須恵器	甕				体部片	良好	やや密	角・白粒・黒粒	灰	平行タタキ	平行当て具痕		
12 163	2C-13			IV	須恵器	甕				体部片	良好	密	黒粒	黄灰/灰白	格子目タタキ	同心円当て具痕		外：自然軸
12 164	3B-8			IV	土師器	短頸壺	15.8			口縁部1/22	やや不良	粗	石・砂	にぶい黄橙/浅黄橙	タテハケ	ナデか		
12 165	3C-23			IV	土師器	甕	26.7			口縁部1/14	不良	やや密	白粒・礫	橙/にぶい橙	ナデか	ナデか		
12 166	3D-8			IV	土師器	甕	15.6			口縁部1/10	やや不良	やや密	石・白粒	にぶい橙/黒褐	ナデか	ナデか		
12 167	3D-8			IV	土師器	甕	17.7			口縁部1/22	やや良好	やや粗	石・砂	灰褐/にぶい褐	ナデ、ハケ	ナデ		内：オコゲ付着
12 168	4D-6			IV	土師器	甕	19.7			口縁部1/22	良好	やや粗	石・白粒・礫	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
12 169	5B-9			IV	土師器	甕		9.0		底部1/3	やや良好	粗	石・白粒・黒粒・礫	浅黄橙/灰白	ナデか	ナデか		
12 170	3D-11			IV	土師器	甕		9.6		底部1/6	やや良好	粗	石・白粒・黒粒・礫	灰褐/にぶい褐	ナデか	ナデか		
12 171	5D-11			IV	土師器	甕		9.4		底部1/5	やや良好	粗	石・白粒・黒粒・礫	灰白/浅黄橙	ナデか	ナデか		
12 172	4B-21			IV	土師器	甕		9.8		底部1/3	やや良好	粗	石・礫	浅黄橙/灰白	ナデか	ナデか		
12 173	3C-23			IV	土師器	甕		5.4		底部1/5	やや不良	やや粗	石・白粒・黒粒	浅黄橙/にぶい黄橙	ナデか	ナデか		
12 174	3D-3			IV	土師器	皿	11.6			口縁部1/14	やや不良	密	石・角・白粒	灰白/浅黄橙	ナデ	ナデ		
12 175	4C-22			IV	土師器	皿	10.8	3.1	8.9	口縁部1/10	やや不良	密	白粒	灰白	ナデ	ナデ		
12 176	5C-2			II	青磁	碗	13.4			口縁部1/16	良好	密		灰白				軸調：オリーブ灰 14世紀後半～ 15世紀初め
12 177	3B-11			IV	天目	碗	11.5			口縁部1/10	良好	密	砂	黄灰/灰白	ヘラケズリ ロクロナデ	ロクロナデ		軸調： 黒～にぶい赤褐 吉岡戸後期 14世紀後半
12 178	3B-15			II	陶器	皿	10.6	2.6	5.2	口縁部1/4	良好	やや密		灰白	ヘラケズリ	ヘラケズリ		軸調：灰白・ オリーブ灰・濃緑 瀬戸大窯第3～4 段階、16世紀後半
12 179	4C-22			IV	珠洲焼	壺				体部片	やや良好	やや密	石・長・チ	灰白/灰	ナデ、タタキ	ナデ、当て具痕		
12 180	3B-12			IV	珠洲焼	壺か				体部片	やや不良	やや密	白粒・砂	灰/灰白	襷形タタキ	当て具痕		
12 181	3B-18			IV	珠洲焼	壺	8.4			底部1/6	やや不良	やや粗	白粒	灰/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
13 182	3B-9			IV	珠洲焼	播鉢	21.7			口縁部1/10	やや良好	やや粗	長・チ・骨	灰白/黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ		吉岡IV期
13 183	4C-22			IV	珠洲焼	播鉢	28.8			口縁部1/8	良好	やや粗	長・チ・骨	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		吉岡IV期
13 184	5B-24			IV	珠洲焼	播鉢	38.8			口縁部1/5	やや良好	粗	石・長	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		吉岡V期
13 185	3B-7			IV	珠洲焼	播鉢	12.4			底部1/3	やや不良	粗	石・長	灰	ロクロナデ	卸し目		底：静止糸切り 吉岡II～IV期
13 186	3B-14 4B-6			IV	珠洲焼	播鉢	13.8			底部1/4	やや不良	やや粗	石・白粒	灰白	ロクロナデ	卸し目		底：静止糸切り 吉岡II～IV期
13 187	6B-11			IV	越前焼	播鉢	40.2			底部1/32	やや不良	やや粗	石・長	灰白/浅黄橙	ロクロナデ	卸し目		15世紀か
13 188	5C-17				攪乱	陶器	皿	4.7		底部1/2	やや不良	密		にぶい橙～灰白	ロクロナデ			軸調：灰白 内：砂目積 肥前、17世紀前半
13 189	4C-24			IV	陶器	皿	4.1			底部完存	良好	やや密	白粒	灰白～浅黄橙	ロクロナデ			軸調：オリーブ黄 肥前、17世紀前半
13 190	4C-15			IV	陶器	皿	5.8			底部1/6	良好	やや密		灰白	ロクロナデ			軸調：オリーブ灰 信楽か
13 191	3D-4			II	磁器	碗	3.6			底部1/3	良好	密	黒色砂	灰白				軸調：灰白、暗オ リーブ灰～青灰 底：高台内記号有 肥前（波佐見）
13 192	4C-13			II	陶器	鍋か	14.6			口縁部1/10	良好	密		灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		軸調：にぶい赤褐 ～黒褐
13 193	3C-7			IV	陶器	甕	11.6			口縁部1/10	良好	やや密	砂	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		軸調：にぶい黄橙
13 194	3C-12			IV	瓦	丸瓦				端部片	良好	やや密	白粒・黒粒	灰	ナデ	布目痕		

第9表 銭貨・鍛冶関連遺物・砥石観察表

図版No.	遺物No.	出土位置			種類	石材	法量 (cm)			重量 (g)	色調	備考	
		グリッド	遺構名	層位			長さ (径)	幅	厚さ				
8	28	2B-15	SD1	上面	銭貨		2.4			0.1	2.5		「皇宋通寶」初鋳：1039年
10	70	2D-15	SX10	1層	椀形鍛冶滓		7.3	4.3	2.5	140.8	黒		
10	71	3D-11	SX10	1層	椀形鍛冶滓		8.5	7.0	3.2	60.4	黒褐		
10	72	2D-15	SX10	1層	台石か	安山岩	8.6	6.8	2.5	132.6			
13 195	2D-14			IV	羽口		3.9	2.3	1.5	4.5	褐灰		通風孔推定径2.3cm
13 196	3D-11			IV	羽口		3.5	1.5	2.1	7.7	褐灰		通風孔推定径2.1cm
13 197	3B-11			IV	椀形鍛冶滓		4.6	5.1	4.4	133.6	黒褐		裏：炬床土付着
13 198	3D-11			IV	椀形鍛冶滓		5.8	6.6	3.9	59.1	褐		
13 199	4D-4			IV	椀形鍛冶滓		6.6	11.3	2.4	154.2	黒褐		
13 200	4C-21			IV	不明土製品		7.1	7.1	2.6	122.7	橙		伊体または容器か
13 201	3C-7			IV	砥石	流紋岩質凝灰岩	3.3	4.0	0.7	10.3			砥面2
13 202	5D-11			IV	砥石	流紋岩質凝灰岩	7.6	3.5	1.2	33.1			砥面1
13 203	3B-12			IV	砥石	流紋岩質凝灰岩	7.0	5.3	0.8	33.6			砥面1
13 204	3C-17			IV	砥石	流紋岩質凝灰岩	11.7	4.3	3.4	177.3			砥面2

第10表 木製品観察表

図版No.	遺物No.	出土位置			種類	法量 (cm)			木取	備考
		グリッド	遺構名	層位		長さ	幅	厚さ		
13 205	2C-15		P26	2層	柱根か	16.9	14.6	2.7	板目か	全体が腐損し、明瞭な加工痕は認められない
13 206	5B-14		P33	1層	杭	21.0	4.9	4.3	芯持丸太	上部腐損、端部は尖底（はつり痕4面）
13 207	4B-24		P34	1層	杭	10.0	3.0	2.9	芯持丸太	上部腐損、端部は尖底（はつり痕6面）
13 208	4B-24		P35	1層	杭	22.9	6.4	2.7	半割	上部腐損、端部は尖底（はつり痕3面）
13 209	4C-11		P36	1層	杭か	26.2	4.3	2.9	芯持丸太	上・下部腐損し、明瞭な加工痕は認められない
13 210	3D-9		P37	1層	杭	27.9	10.2	3.8	芯持丸太	上・下部腐損、端部付近尖底気味（はつり痕3面か）
13 211	4C-8			IV	棒状材	10.8	1.3	0.7	板目	上部折損、下部被熱、側面加工か

図 版

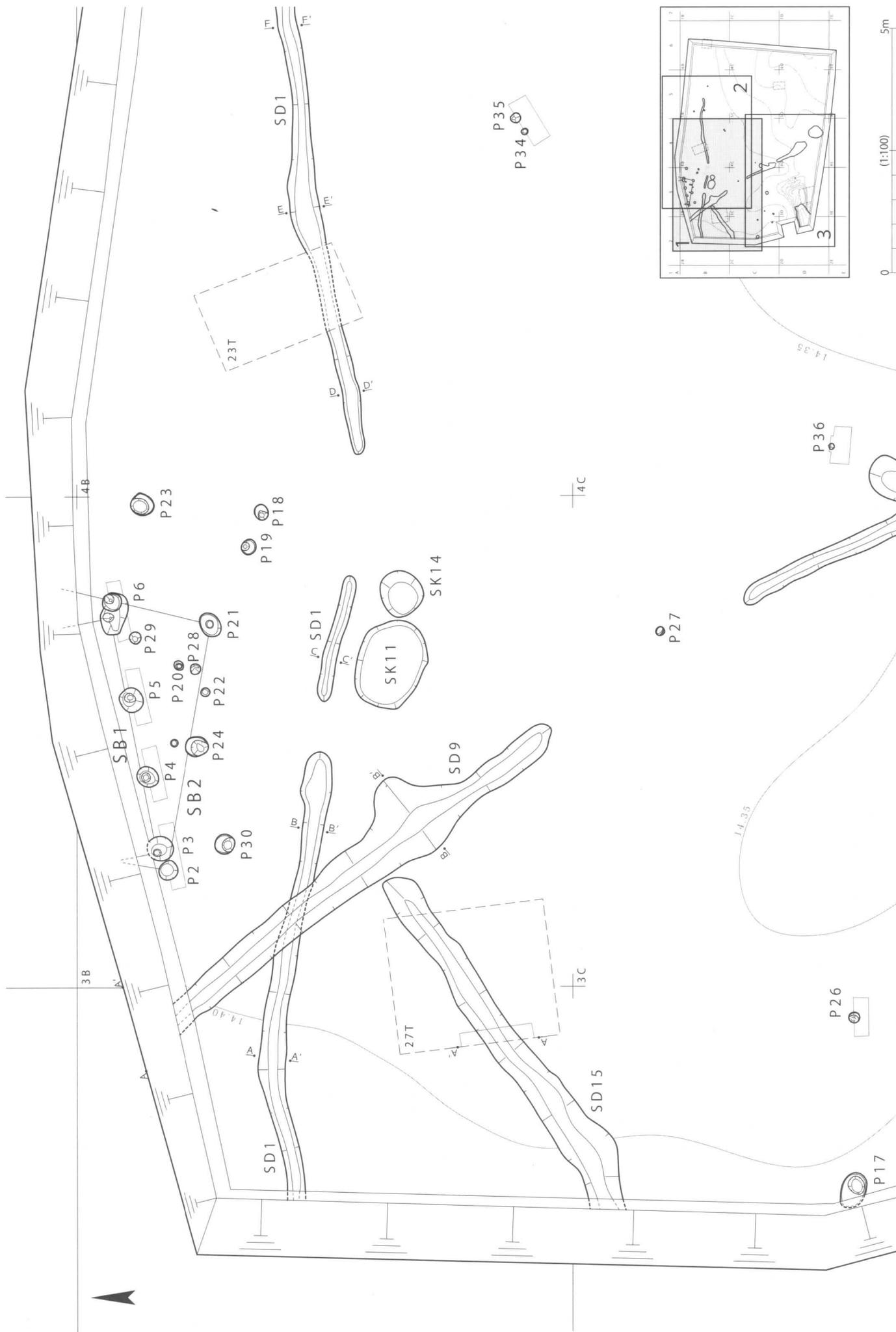
凡例

- 1 遺構図・遺物中のスクリーントーンは以下のものを示す。

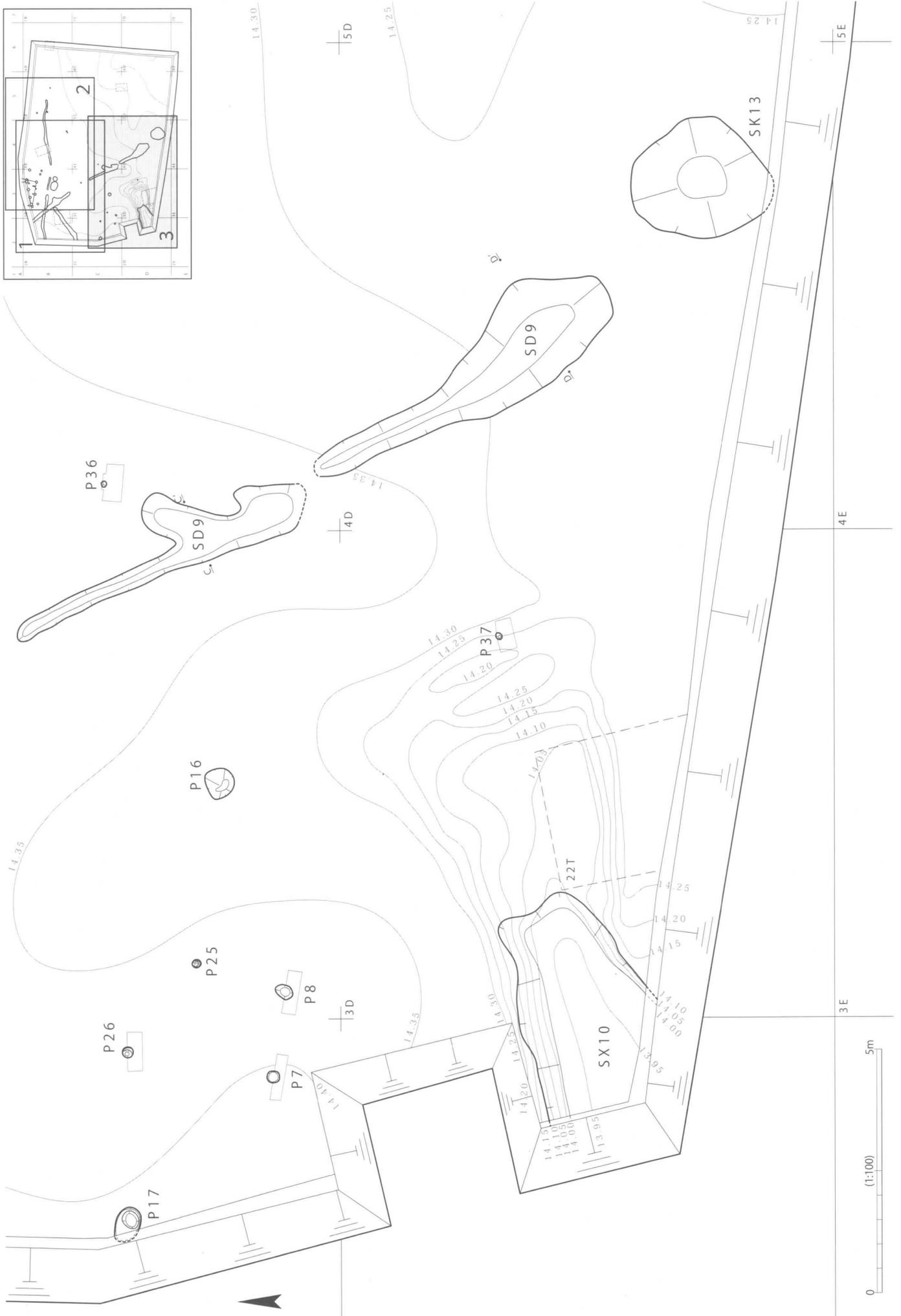
遺構図：地山  遺物包含層 
遺物図（その他）：羽口通風口部壁面  砥石使用面 

- 2 遺物図のうち、土器では須恵器の断面を黒塗り、その他を白抜きとした。
- 3 遺物の番号と縮尺は、図面図版と写真図版とで統一してある。
- 4 土層の土色観察は、『新版 標準土色帖 2004 年度版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を用いた。

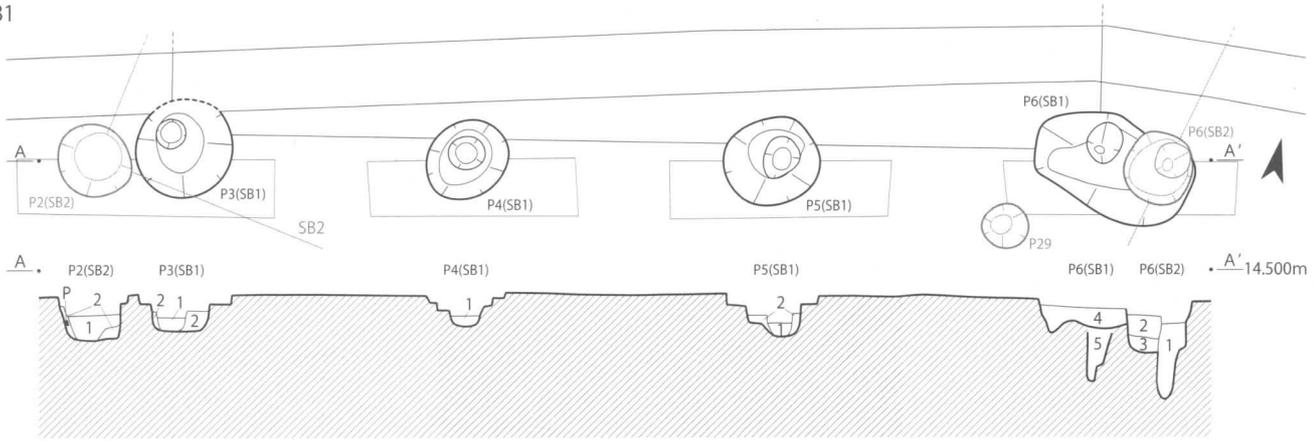






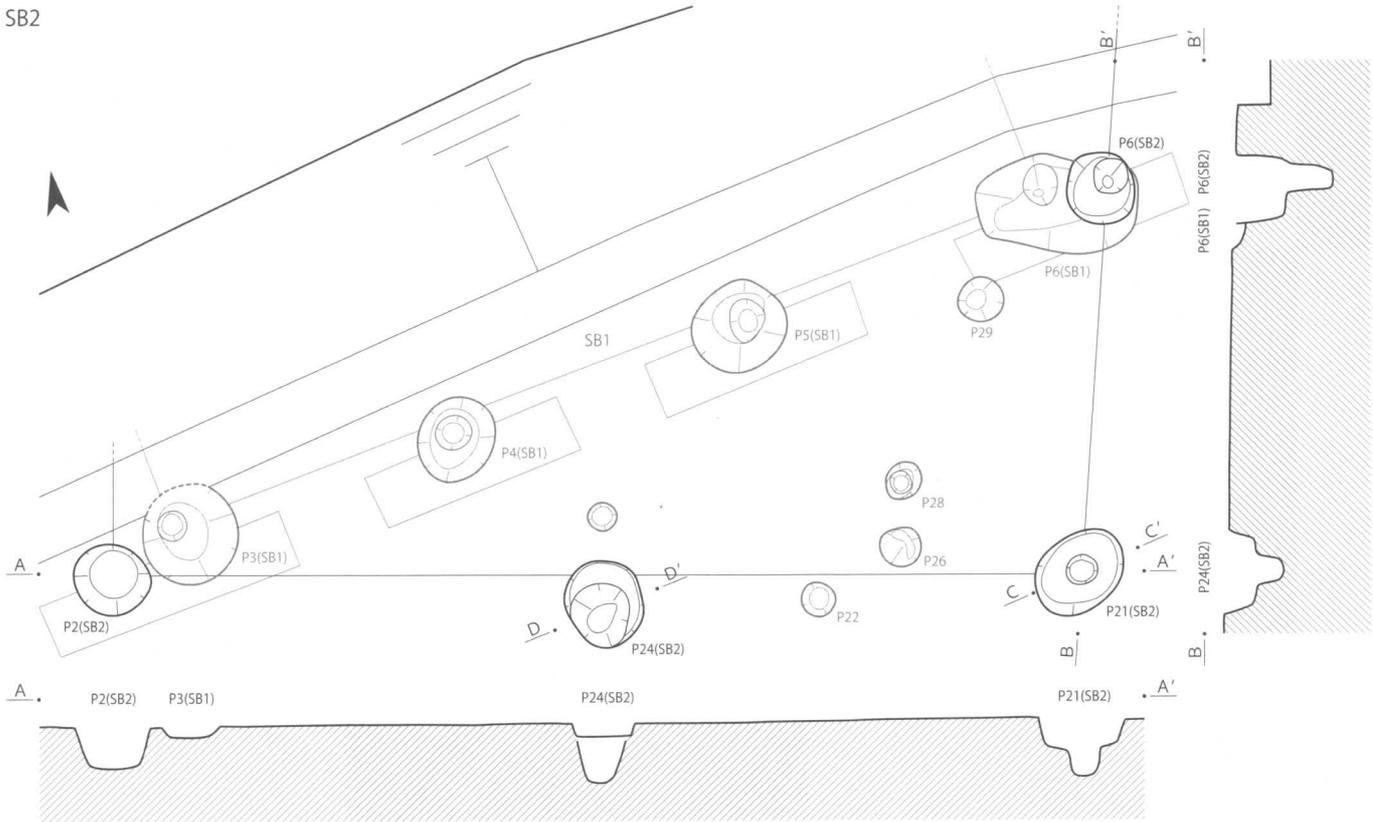


SB1



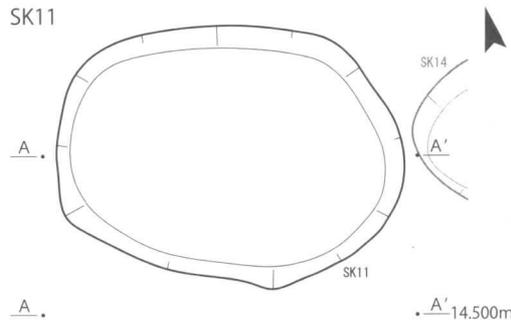
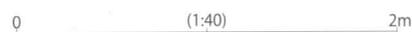
- P2**
 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまりやや強、最大 15mm の炭化物・マンガン粒少量含む)
 2. 7.5Y7/1 灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大 5mm の黄灰色土ブロック・酸化鉄少量含む)
- P3**
 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまりやや強、1mm 大の炭化物微量、酸化鉄少量含む)
 2. 7.5Y7/1 灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大 10mm の黄灰色土ブロック・酸化鉄少量、マンガン粒多量含む)
- P4**
 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまりやや強、最大 15mm の地山ブロック・マンガン粒少量、1mm 大の炭化物微量含む)
- P5**
 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまりやや弱、1mm 大の炭化物少量含む)
 2. 7.5Y7/1 灰色粘質土 (粘性強、しまりやや強、最大 30mm の黄灰色土ブロック・1mm 大の炭化物・酸化鉄・マンガン粒少量含む)
- P6**
 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまり弱、最大 2mm の炭化物・酸化鉄少量含む)
 2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大 5mm の地山ブロック・1mm 大の炭化物・酸化鉄少量含む)
 3. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまりやや強、1mm 大の炭化物・酸化鉄少量含む)
 4. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大 50mm の地山ブロック多量、1mm 大の炭化物・酸化鉄少量含む)
 5. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまり弱、1mm 大の炭化物少量含む)

SB2

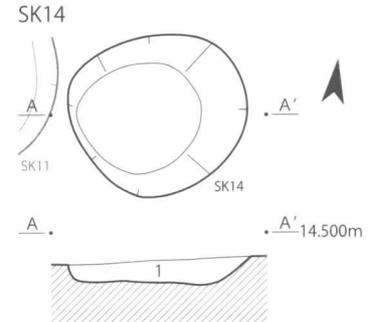


- P21**
 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまりやや強、最大 10mm の地山ブロック・酸化鉄・マンガン粒少量、1mm 大の炭化物微量含む)
 2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大 40mm の地山ブロック多量、1mm 大の炭化物微量、酸化鉄・マンガン粒少量含む)

- P24**
 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大 2mm の炭化物・酸化鉄少量含む)
 2. 7.5Y7/1 灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大 10mm の黄灰色土ブロック・最大 7mm の炭化物・酸化鉄少量含む)

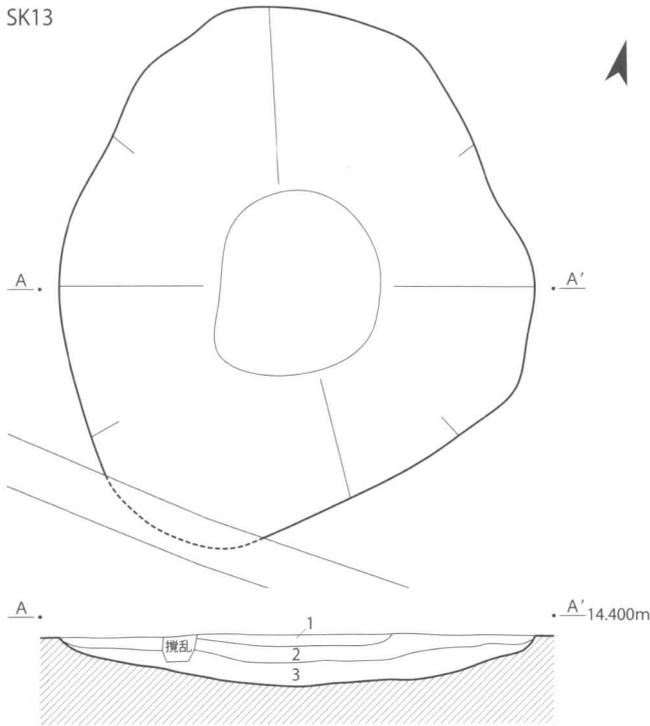


- SK11**
 1. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまりやや強、最大 5mm の炭化物・酸化鉄・マンガン粒少量含む)
 2. 7.5Y7/1 灰色粘質土 (粘性・しまり強、10mm 大の灰色土ブロック少量含む)



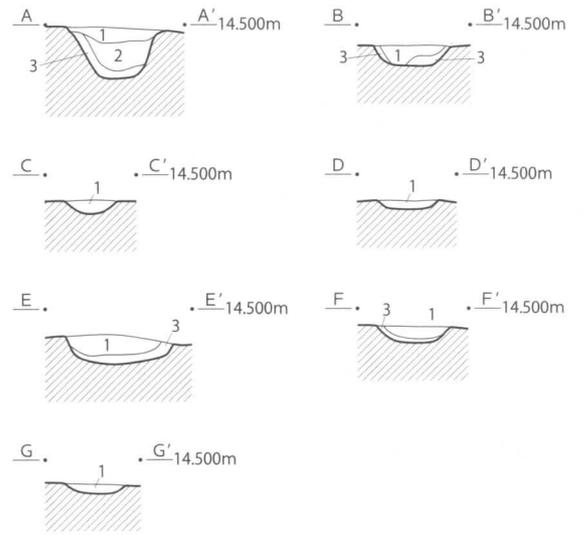
- SK14**
 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまりやや弱、最大 50mm の地山ブロック多量、最大 2mm の炭化物少量含む)

SK13



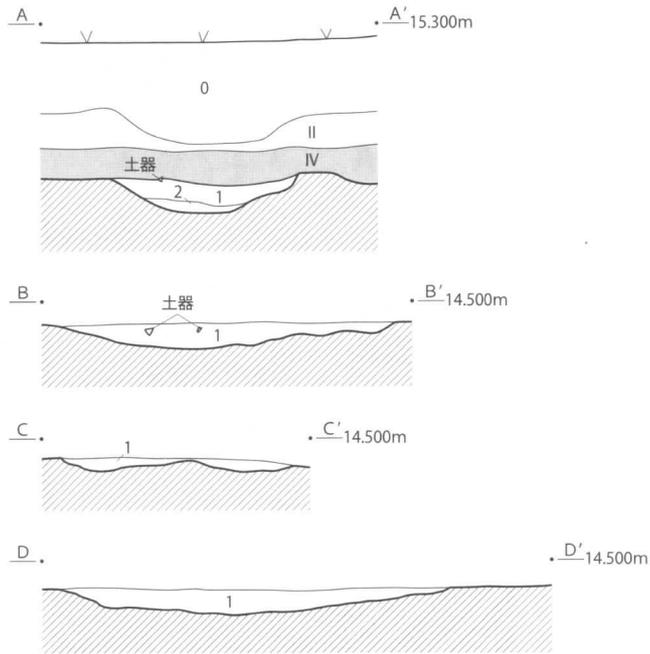
- SK13
 1. 5Y7/2 灰色粘質土
 (粘性・しまり強、最大 50 mm の灰色土ブロック・マンガン粒多量、最大 2 mm の炭化物・酸化鉄少量含む)
 2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
 (粘性強、しまりやや強、最大 50 mm の灰色土ブロック・マンガン粒中量、最大 5 mm の炭化物多量含む)
 3. 5Y7/1 灰色粘質土
 (粘性・しまり強、最大 30 mm の灰色土ブロック・最大 5 mm の炭化物少量含む)

SD1



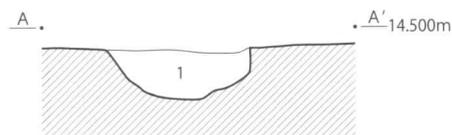
- SD1
 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
 (粘性強、しまりやや強、最大 20 mm の地山ブロック中量、最大 2 mm の炭化物少量含む)
 2. 10YR4/1 褐灰色粘質土
 (粘性・しまり強、最大 15 mm の地山ブロック中量、最大 10 mm の炭化物・マンガン粒多量含む)
 3. 7.5Y7/1 灰色粘質土
 (粘性・しまりやや強、最大 10 mm の灰色土ブロック・最大 2 mm の炭化物微量含む)

SD9



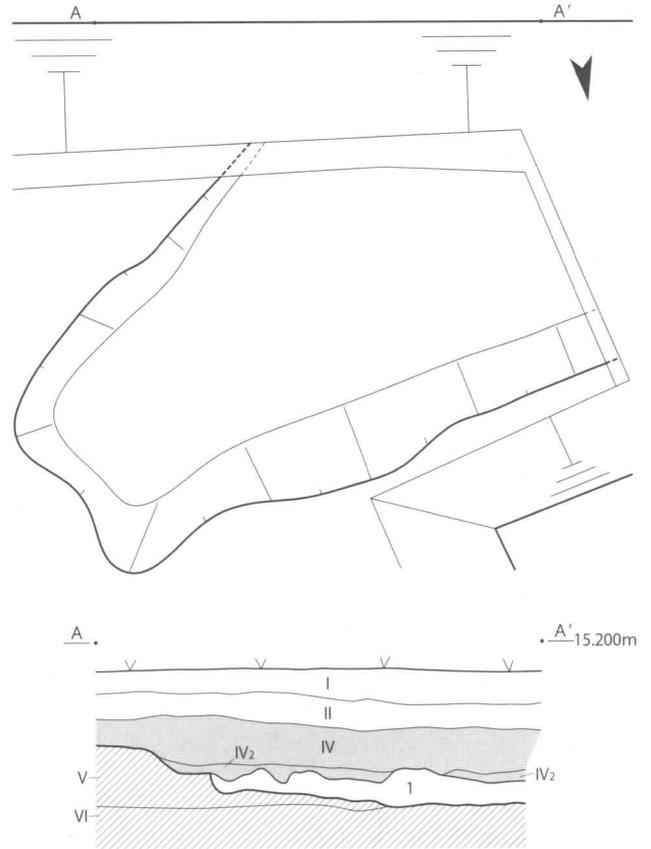
- SD9
 1. 10YR4/1 褐灰色粘質土
 (粘性強、しまりやや強、地山ブロック、最大 5 mm の炭化物少量含む)
 2. 7.5Y7/1 灰色粘質土
 (粘性・しまりやや強、褐灰色土ブロック含む)

SD15

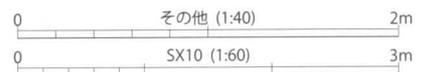


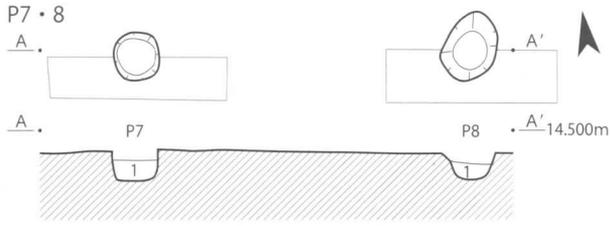
- SD15
 1. 5Y6/2 灰オリーブ色砂質土
 (粘性・しまり弱、地山ブロック多量含む)

SX10

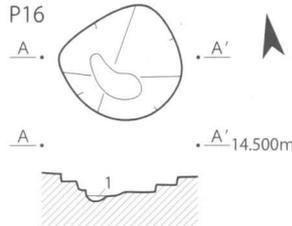


- SX10
 1. 7.5Y7/1 灰色粘質土
 (粘性強、しまりやや弱、灰色土ブロック・酸化鉄多量、最大 3 mm の炭化物・マンガン粒少量含む)

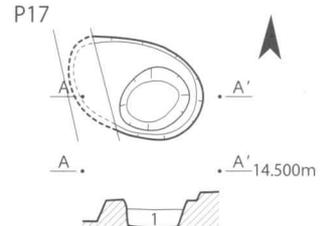




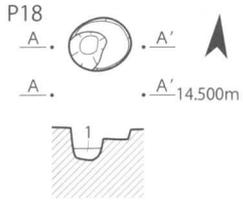
P7 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大5mmの炭化物少量、マンガン粒少量含む)
 P8 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大2mmの炭化物微量、マンガン粒中量含む)



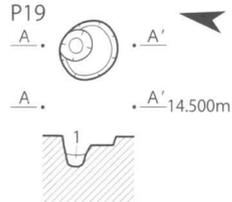
P16 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、酸化鉄微量含む)



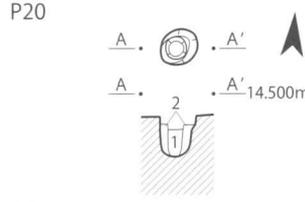
P17 1. 7.5Y7/1 灰色粘質土 (粘性やや強、しまり強、最大10mmの黄灰色土ブロック・最大7mmの炭化物微量、マンガン粒少量含む)



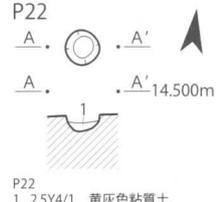
P18 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大30mmの地山ブロック多量、酸化鉄少量含む)



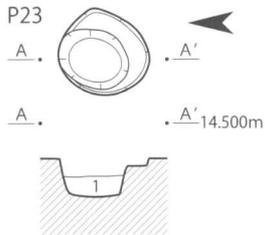
P19 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大40mmの地山ブロック多量、酸化鉄・マンガン粒少量含む)



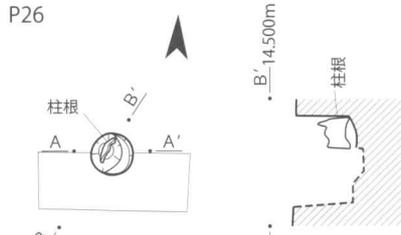
P20 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大2mmの炭化物少量、マンガン粒微量含む)
 2. 7.5Y7/1 灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大15mmの黄灰色土ブロック・1mm大の炭化物少量、マンガン粒微量含む)



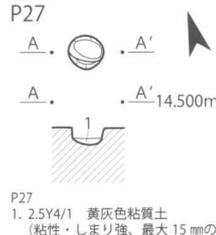
P22 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大1mm大の炭化物微量、マンガン粒少量含む)



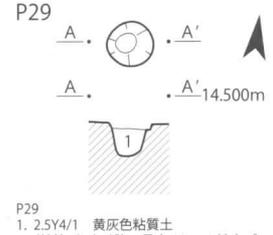
P23 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大40mmの地山ブロック多量、最大2mmの炭化物少量含む)



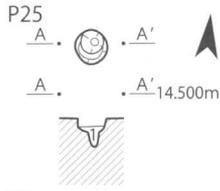
P26 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまりやや強、1mm大の炭化物・マンガン粒少量含む)
 2. 5Y5/1 灰色粘質土 (粘性強、しまり弱)
 3. 7.5Y7/1 灰色粘質土 (粘性強、しまりやや強、最大10mmの黄灰色土ブロック少量含む)



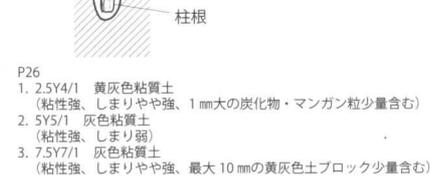
P27 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大15mmの地山ブロック多量、酸化鉄少量含む)



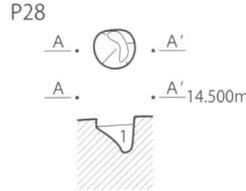
P29 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大10mmの地山ブロック・最大4mmの炭化物・マンガン粒少量含む)



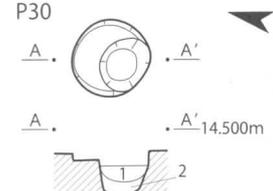
P25 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまりやや弱、最大20mmの地山ブロック・最大2mmの炭化物・マンガン粒少量含む)



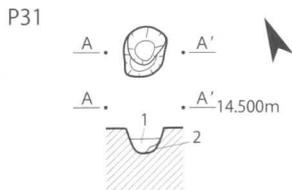
P26 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまりやや強、1mm大の炭化物・マンガン粒少量含む)
 2. 5Y5/1 灰色粘質土 (粘性強、しまり弱)
 3. 7.5Y7/1 灰色粘質土 (粘性強、しまりやや強、最大10mmの黄灰色土ブロック少量含む)



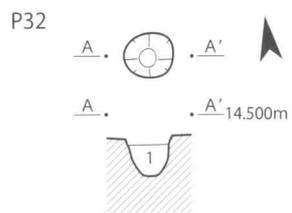
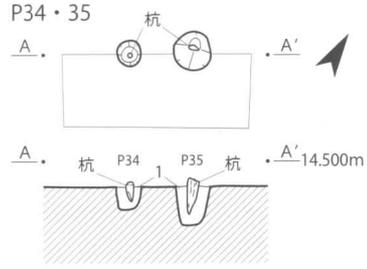
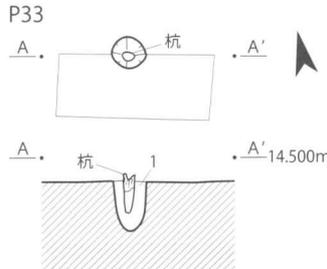
P28 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大20mmの地山ブロック・マンガン粒少量、1mm大の炭化物微量含む)



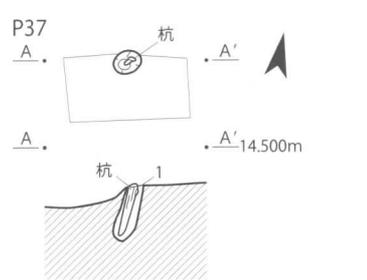
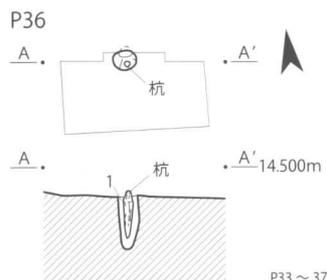
P30 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大30mmの地山ブロック多量、酸化鉄・マンガン粒少量含む)
 2. 7.5Y7/1 灰色粘質土 (最大5mmの黄灰色土ブロック・酸化鉄少量含む)



P31 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性・しまり強、1mm大の炭化物微量、酸化鉄少量含む)
 2. 7.5Y7/1 灰色粘質土 (粘性・しまり強、最大7mmの黄灰色土ブロック微量、酸化鉄少量含む)

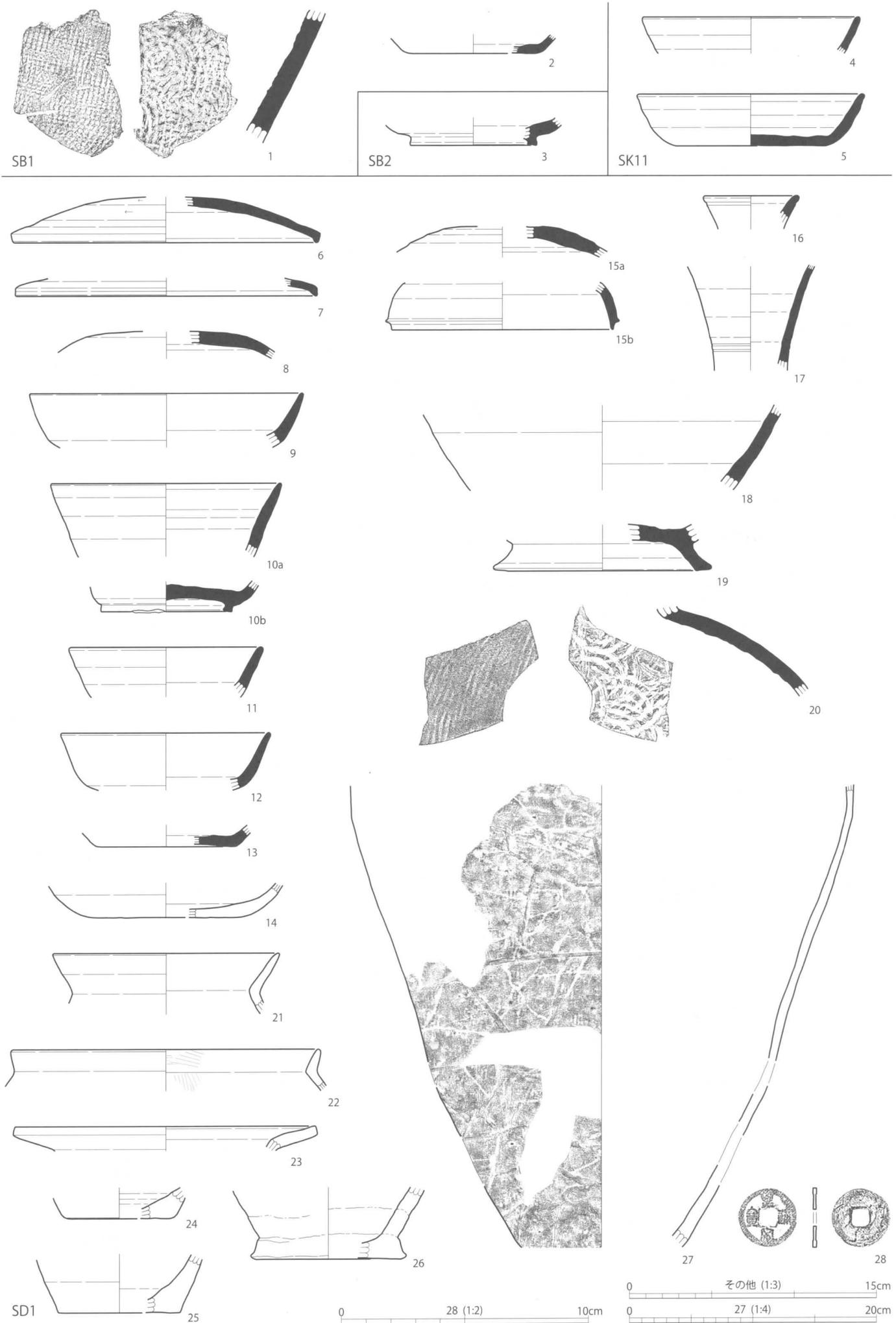


P32 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (粘性強、しまりやや強、最大10mmの地山ブロック多量、1mm大の炭化物微量、酸化鉄・マンガン粒少量含む)



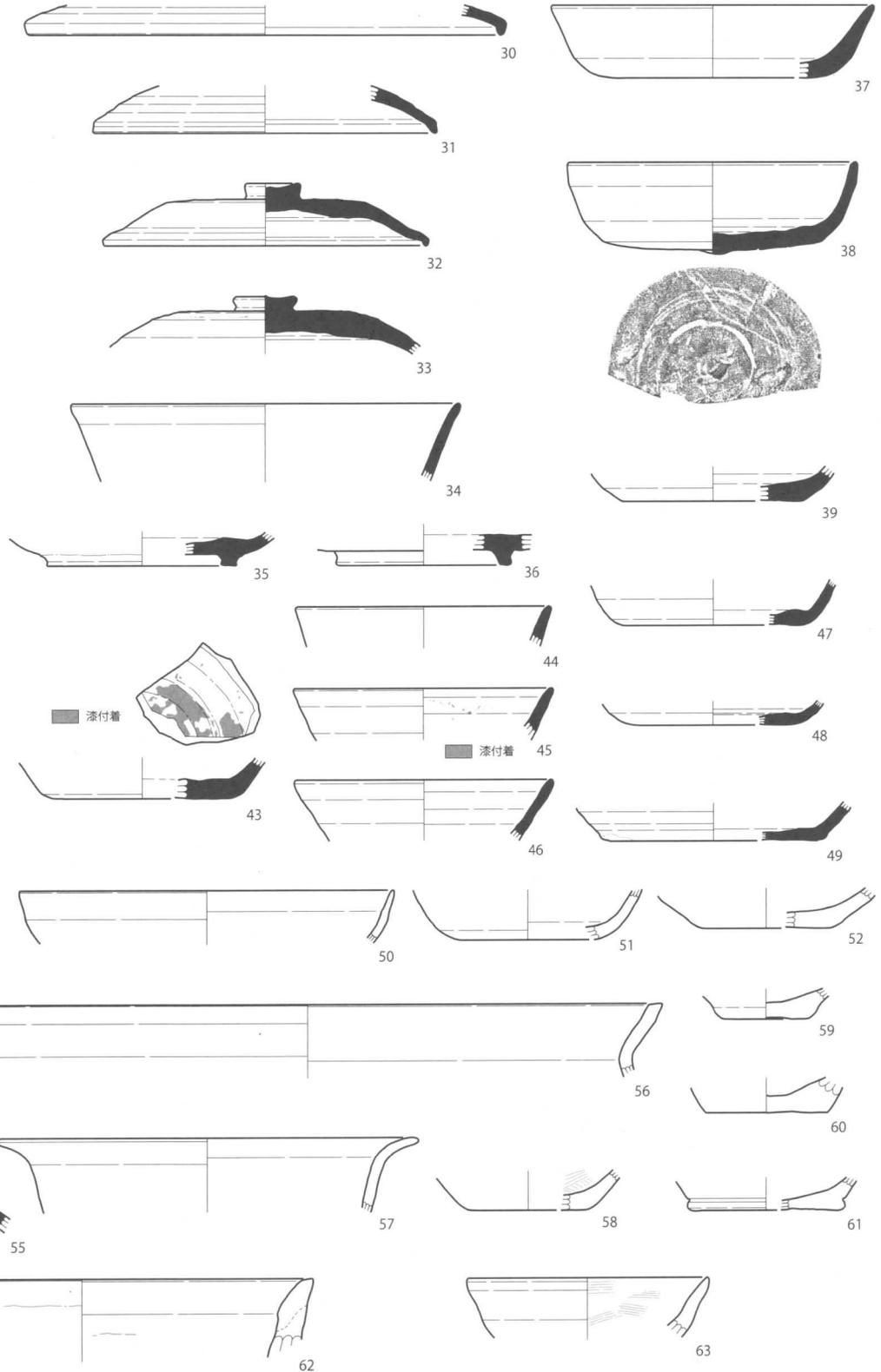
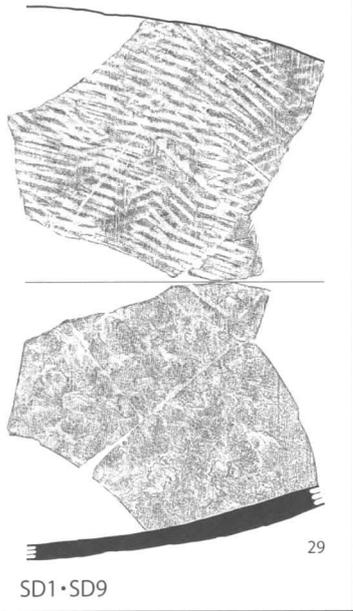
P33~37 1. 10GY6/1 緑灰色粘質土 (粘性強、しまり弱)



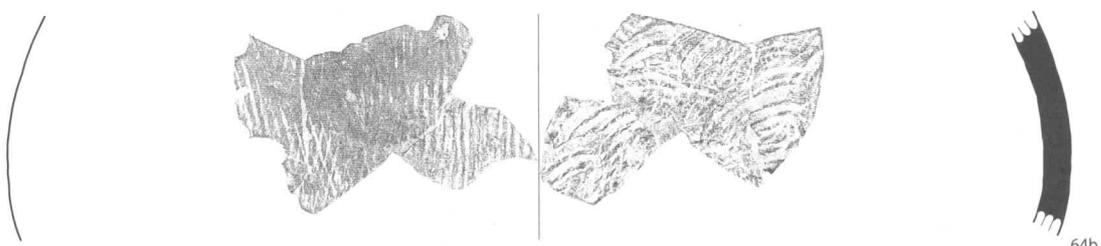


0 28 (1:2) 10cm

0 27 (1:4) 20cm
0 15cm
その他 (1:3)

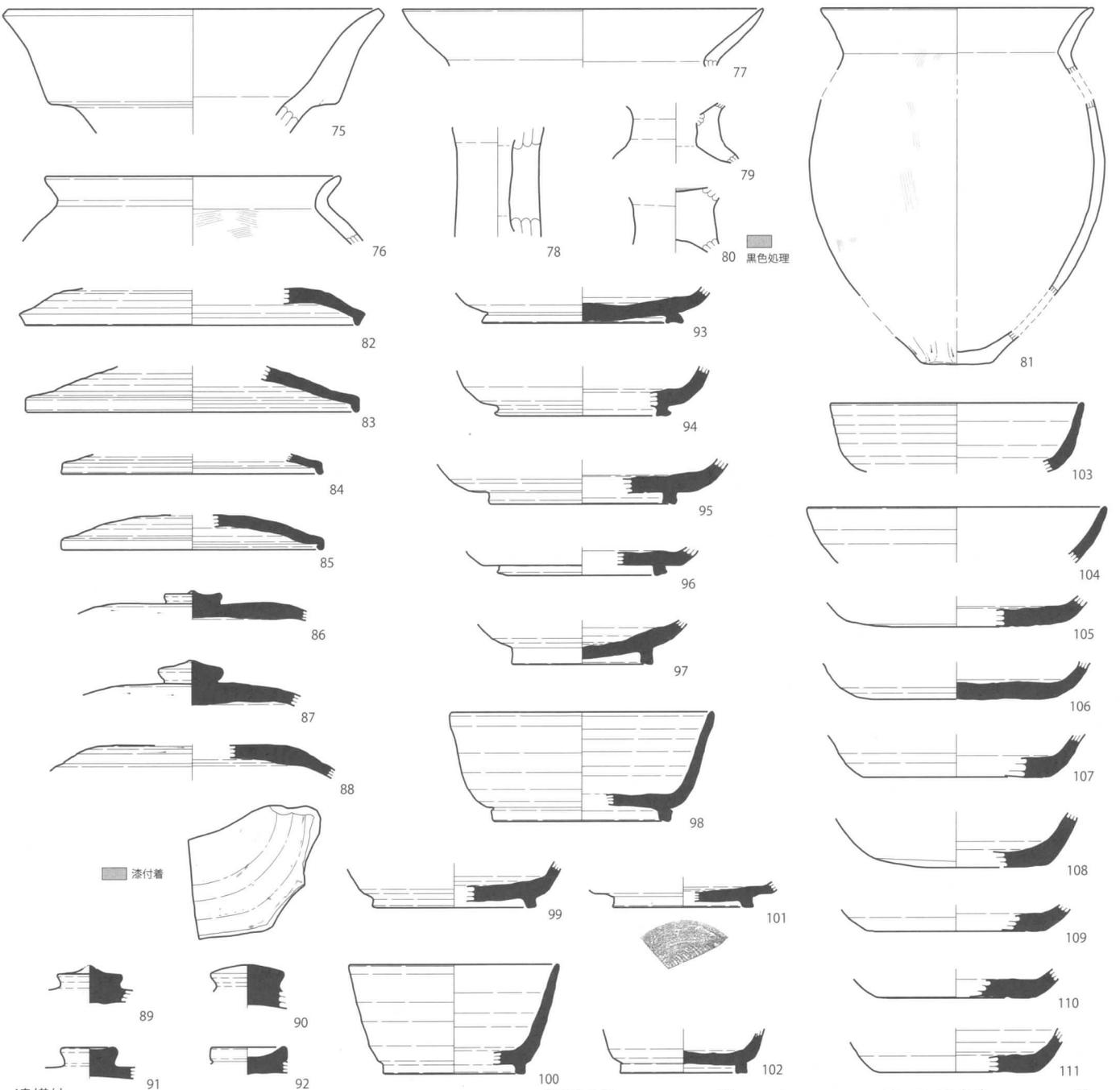
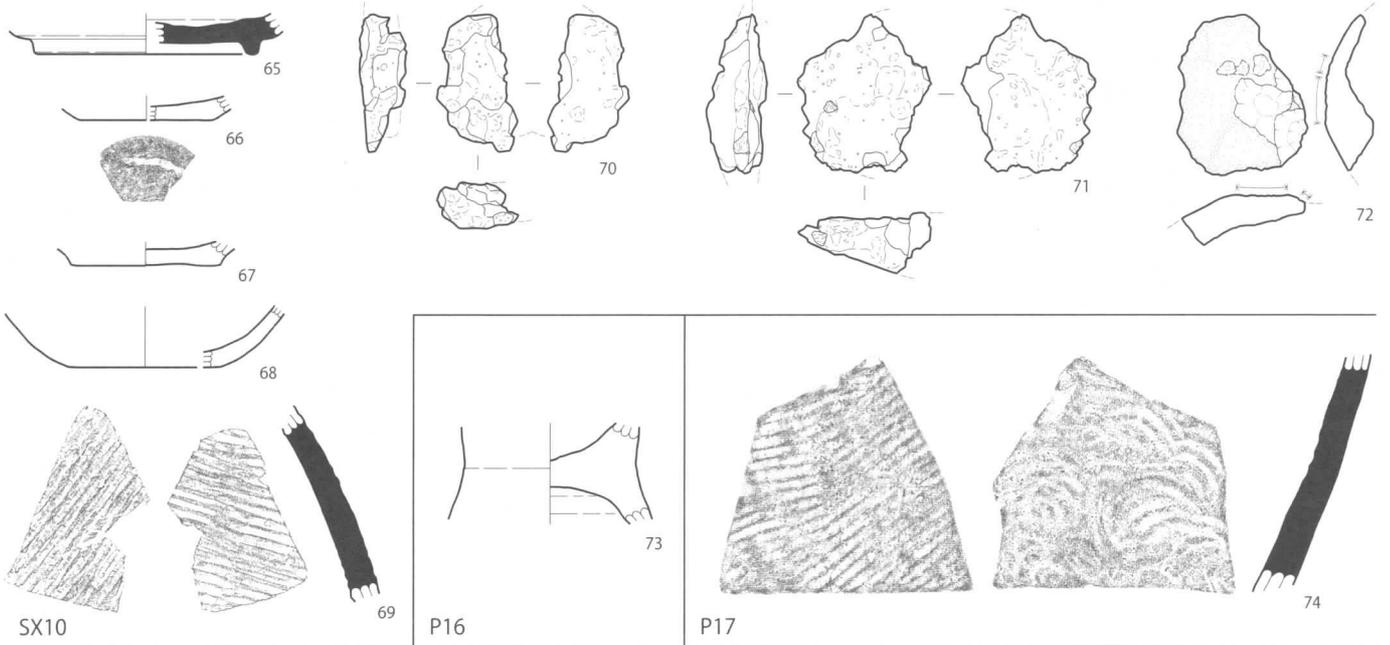


SD9



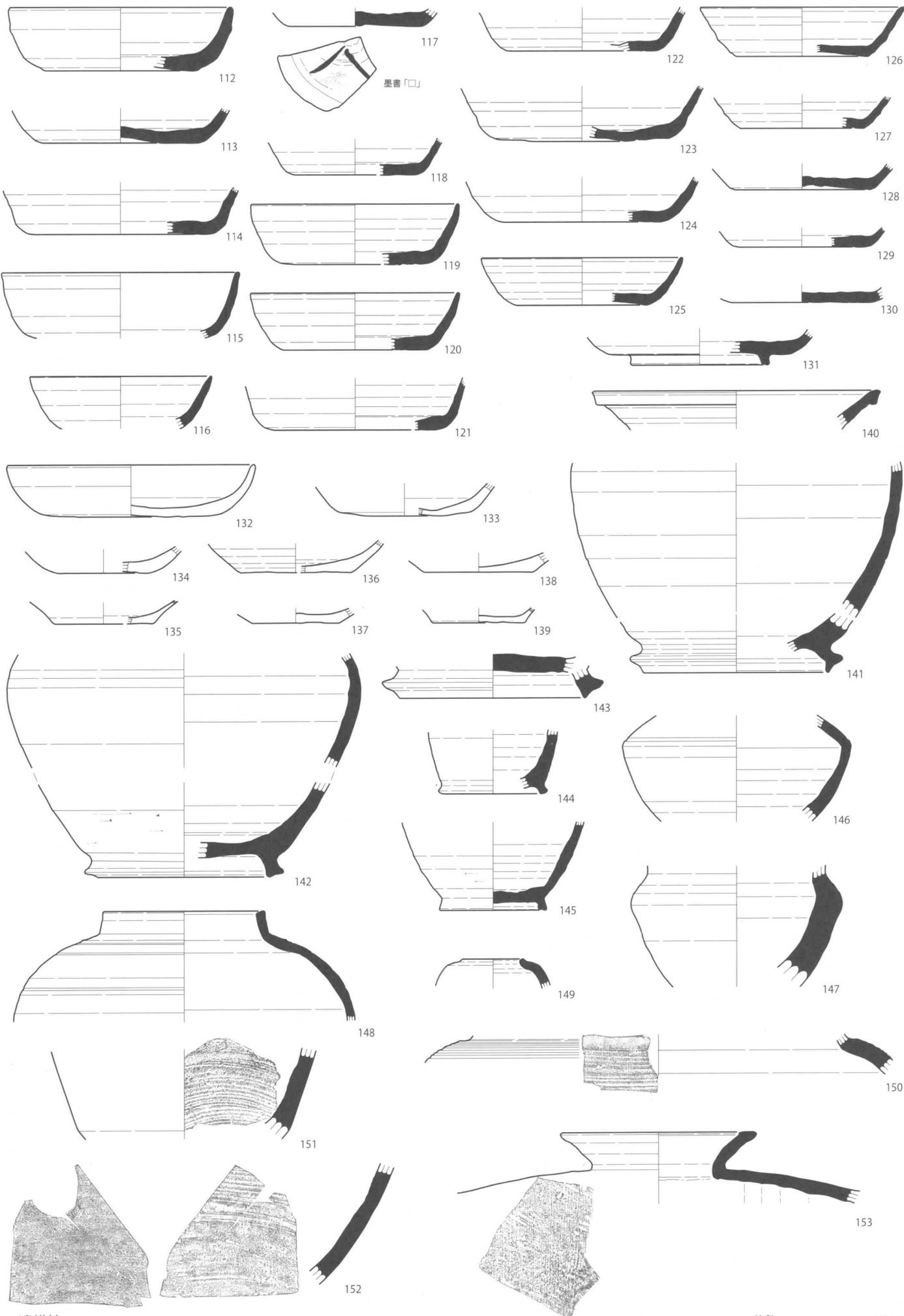
SD9・SX10

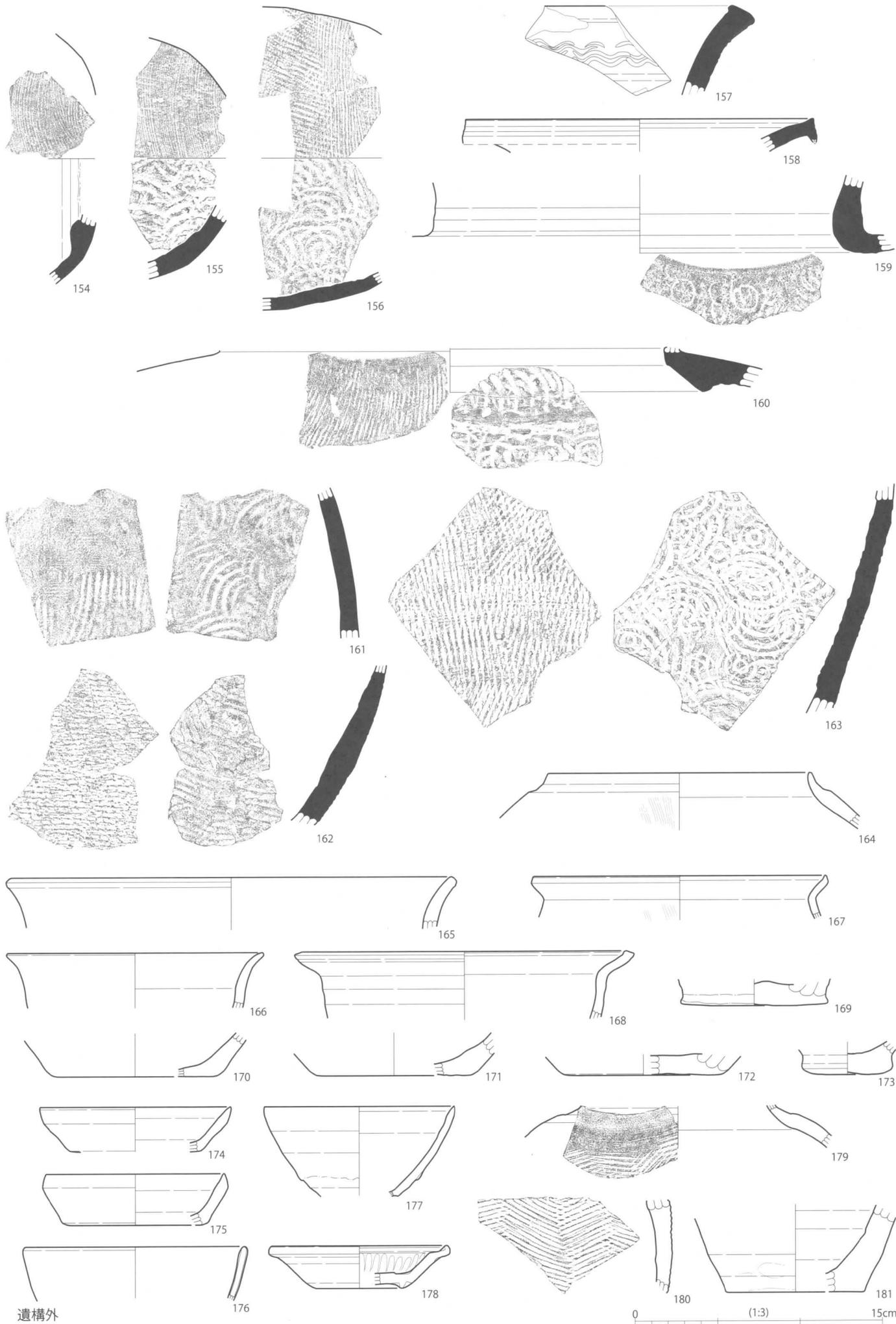
0 (1:3) 15cm



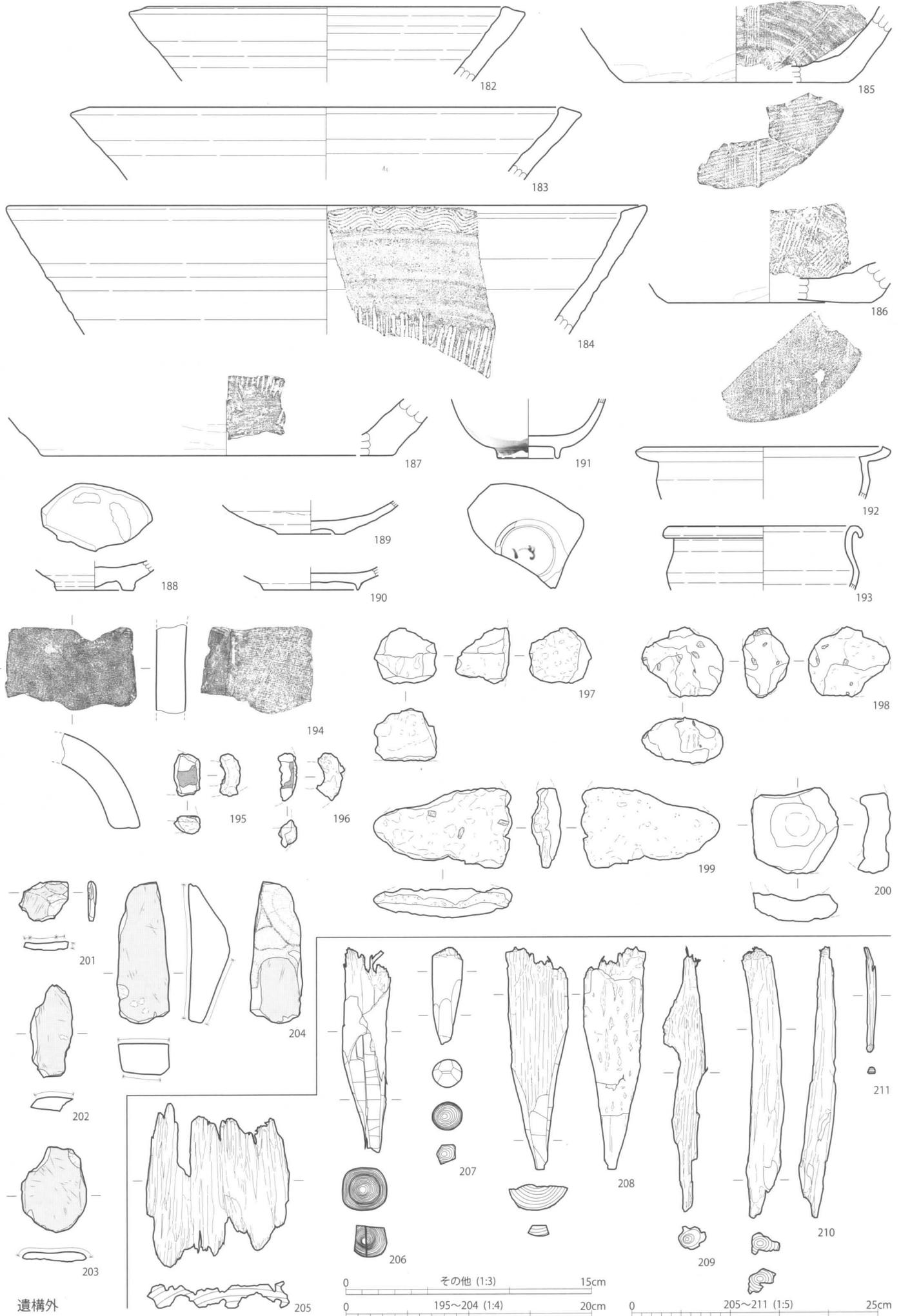
遺構外

0 100 その他 (1:3) 15cm 0 70~72・81 (1:4) 20cm





遺構外



遺構外

0 15cm
その他 (1:3)

0 20cm
195~204 (1:4)

0 25cm
205~211 (1:5)



遺跡全景 (西から)



遺跡全景 直下 (上が北)



着手前全景 (西から)



表土除去 (西から)



2B-9 基本層序 (南から)



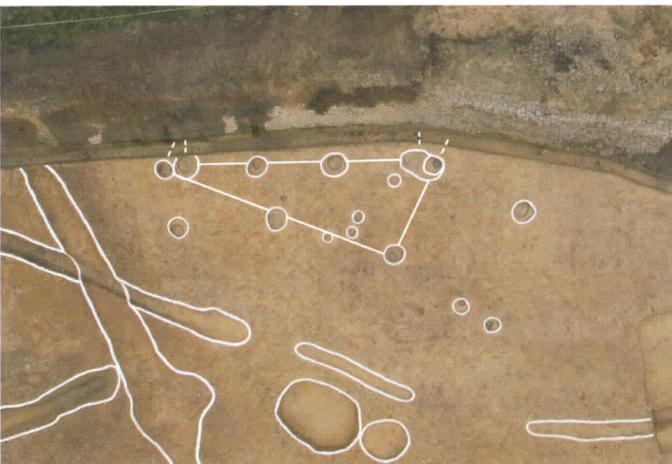
6C-3 基本層序 (西から)



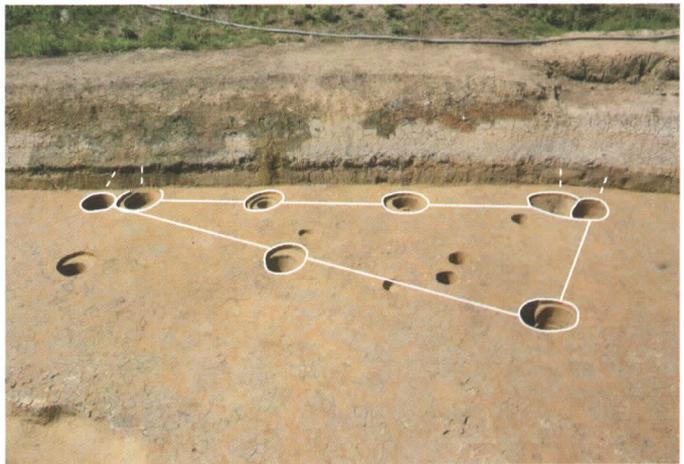
6D-22 包含層土師器 (81) 出土状況 (西から)



4D-4 包含層椀形鍛冶滓 (199) 出土状況 (南から)



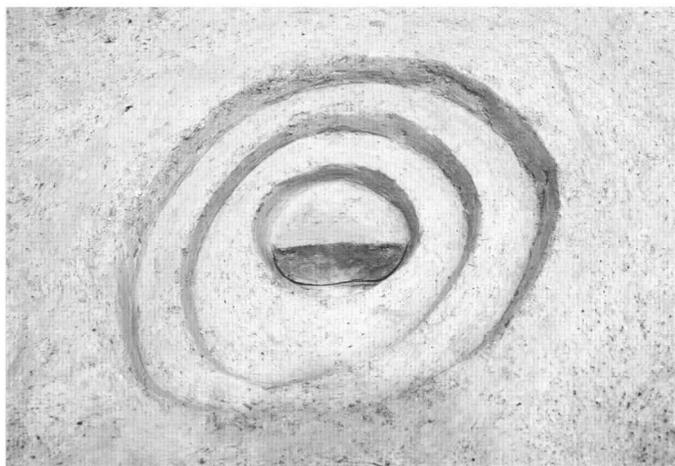
SB1・2 検出 直下 (上が北)



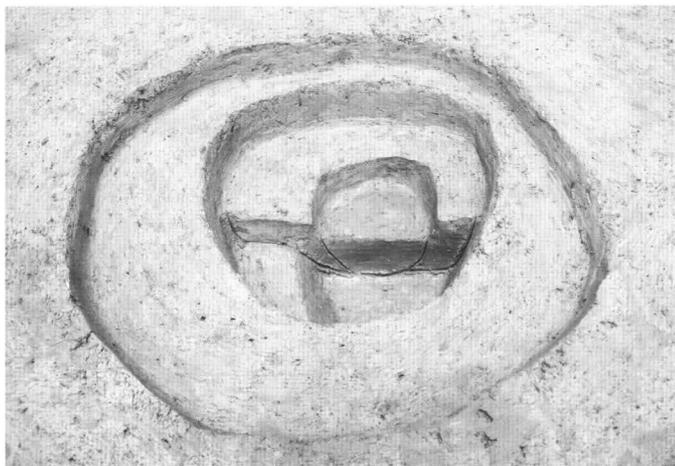
SB1・2 完掘 (南から)



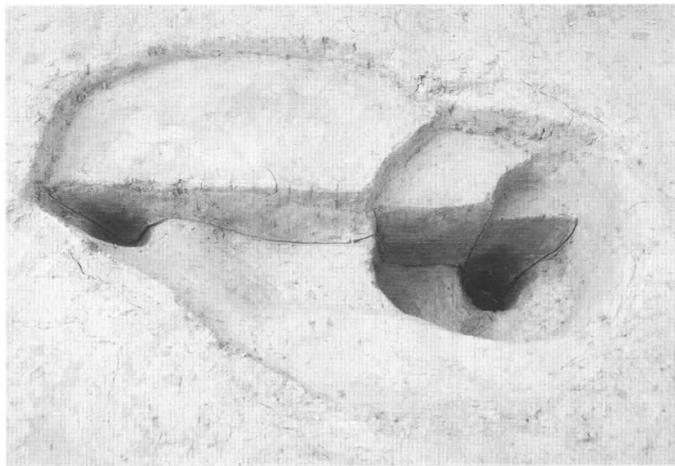
SB1-P3 セクション (南から)



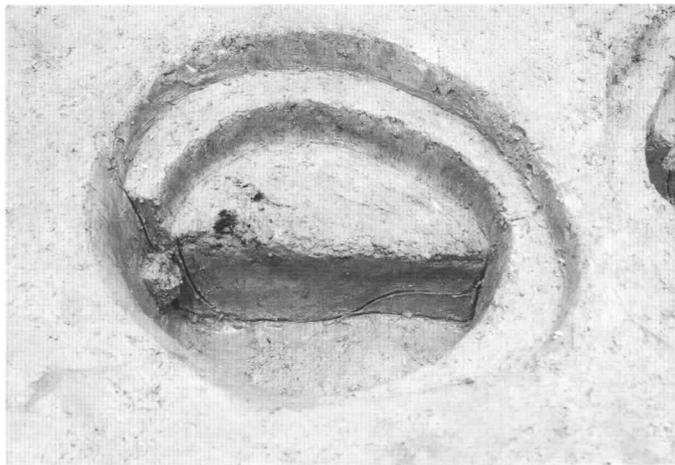
SB1-P4 セクション (南から)



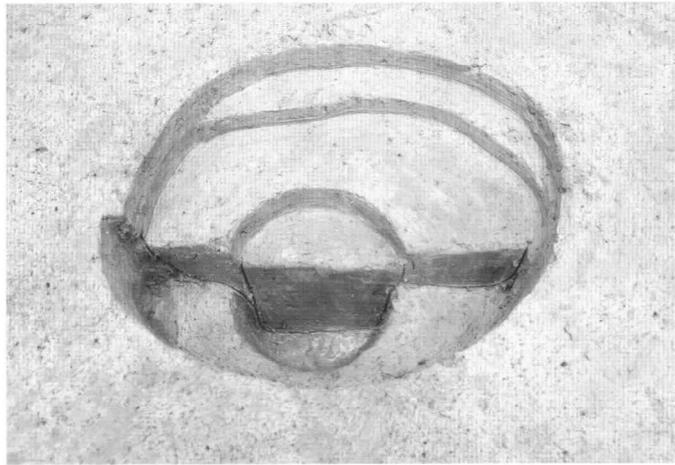
SB1-P5 セクション (南から)



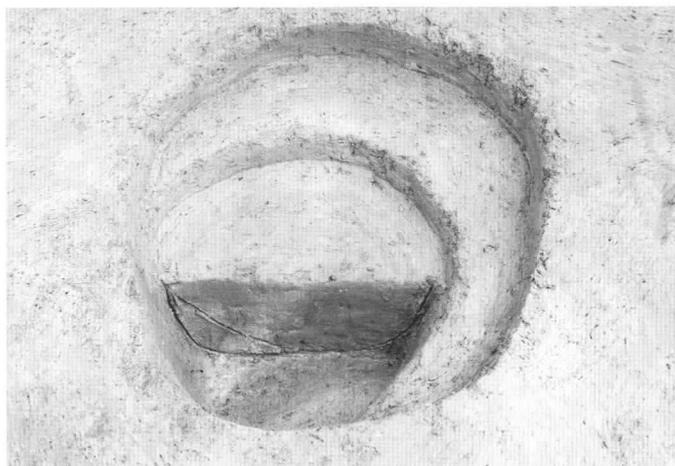
SB1・2-P6 セクション (南から)



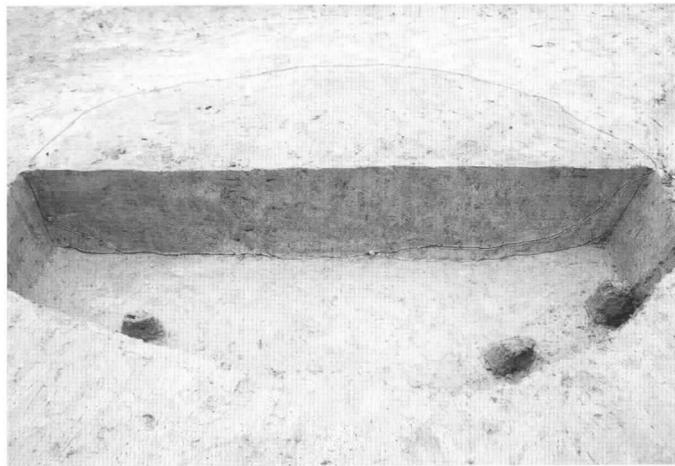
SB2-P2 セクション (南から)



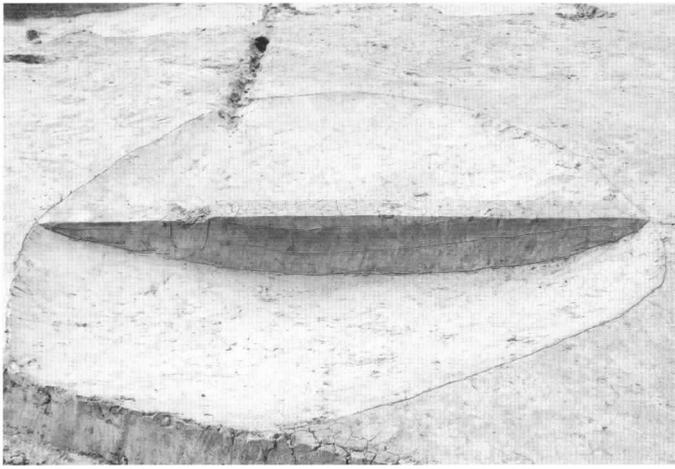
SB2-P21 セクション (南から)



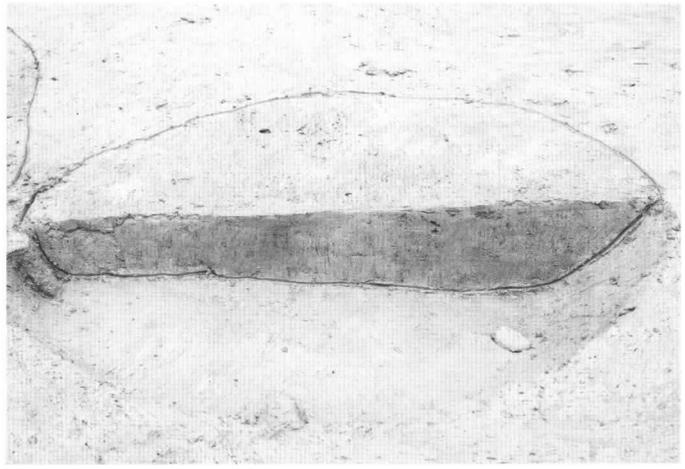
SB2-P24 セクション (南から)



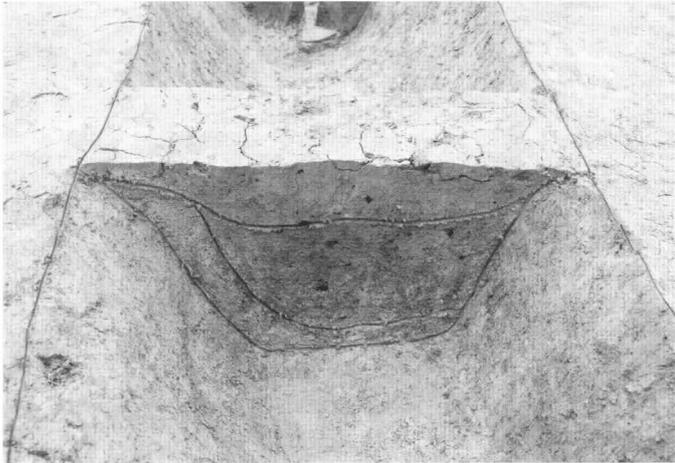
SK11 セクション (南から)



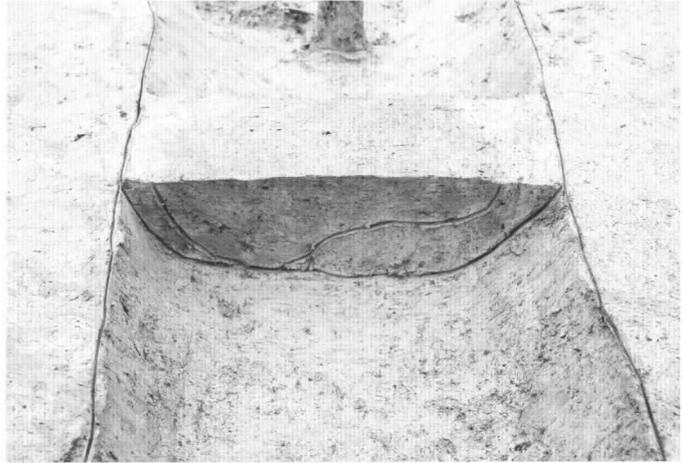
SK13 セクション (南から)



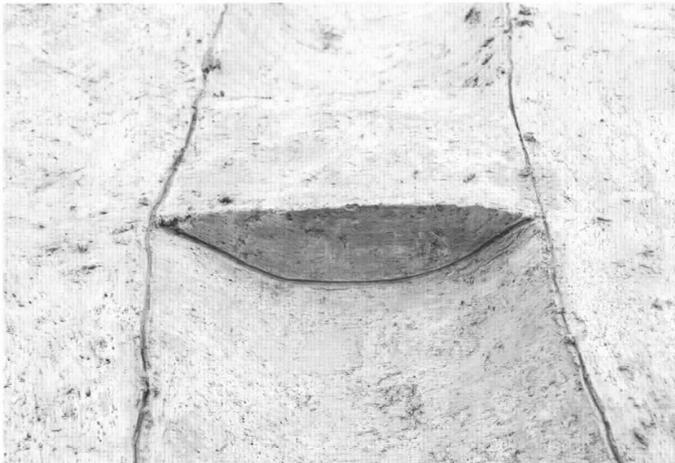
SK14 セクション (南から)



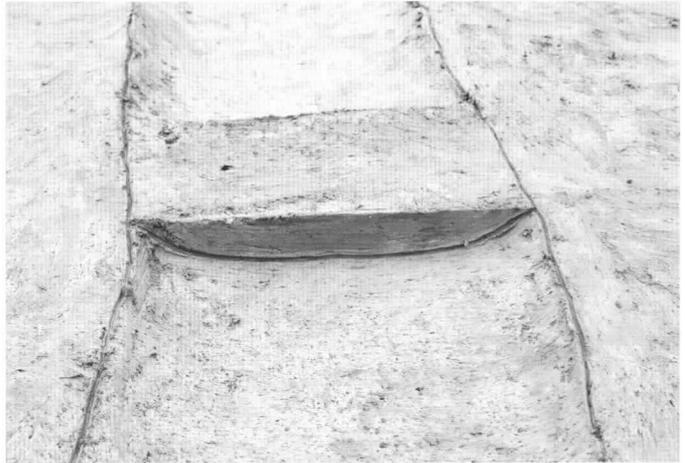
SD1A-A' セクション (西から)



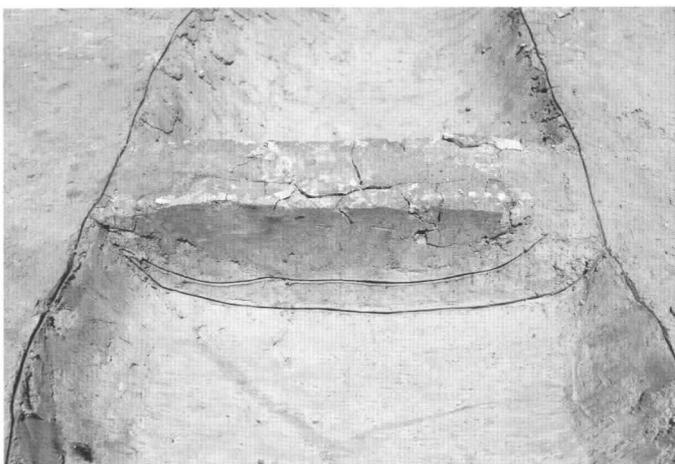
SD1B-B' セクション (西から)



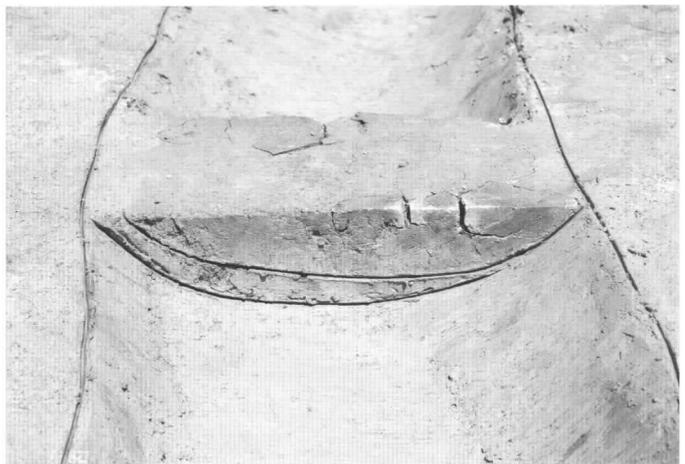
SD1C-C' セクション (西から)



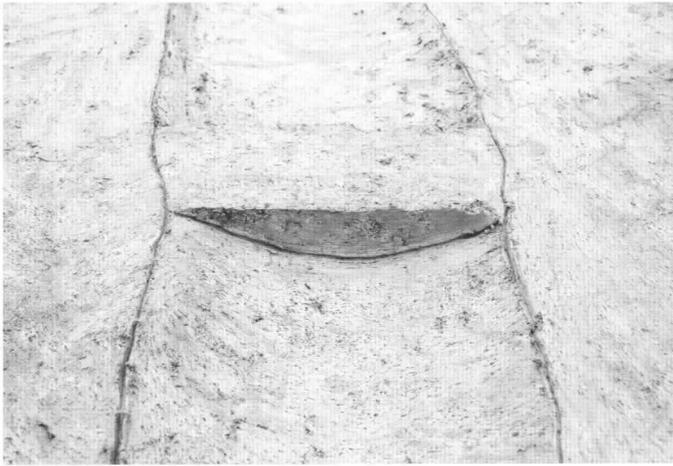
SD1D-D' セクション (西から)



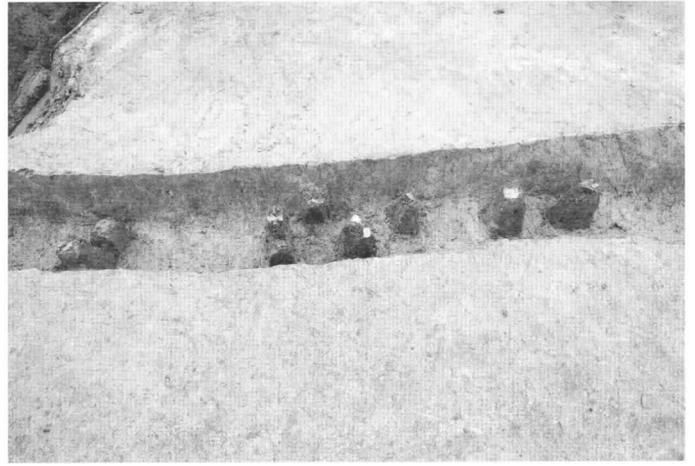
SD1E-E' セクション (西から)



SD1F-F' セクション (西から)



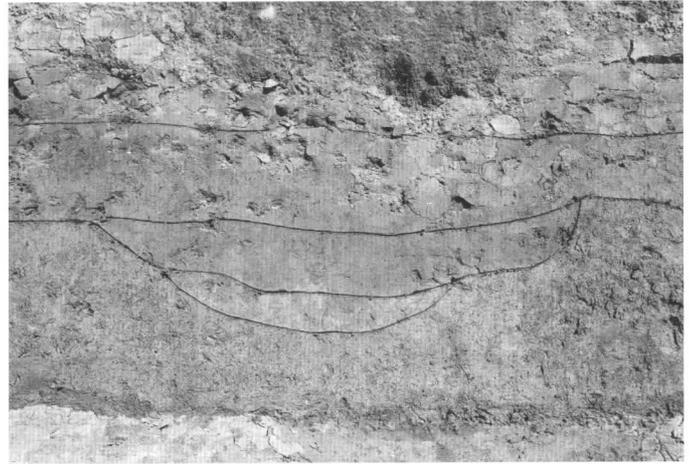
SD1G-G' セクション (西から)



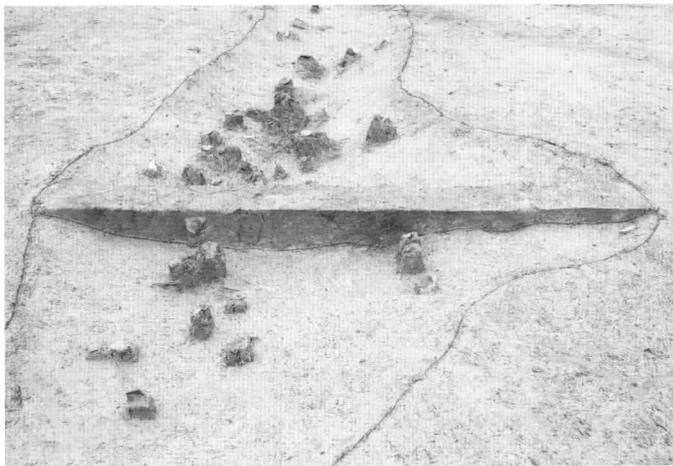
2B-14 SD1 遺物出土状況 (南から)



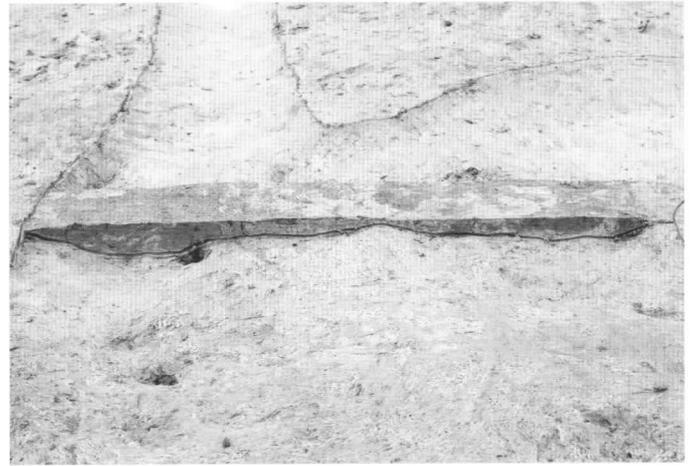
SD1 完掘状況 (西から)



SD9A-A' セクション (南東から)



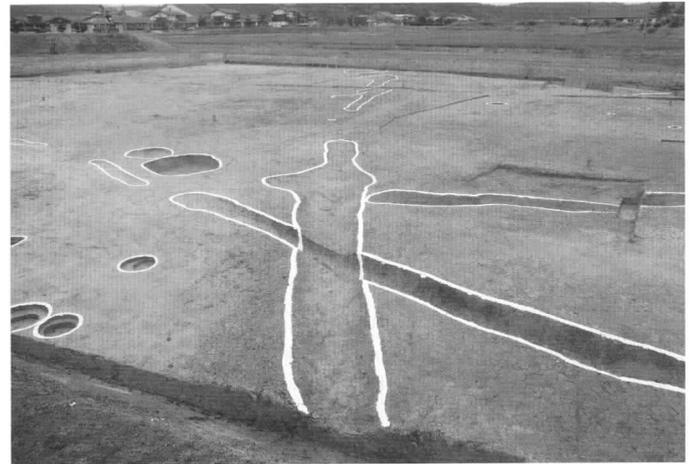
SD9B-B' セクション・遺物出土状況 (南東から)



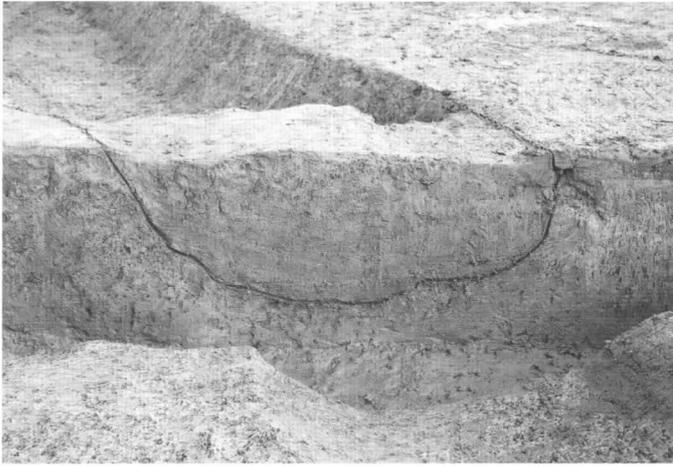
SD9C-C' セクション (南東から)



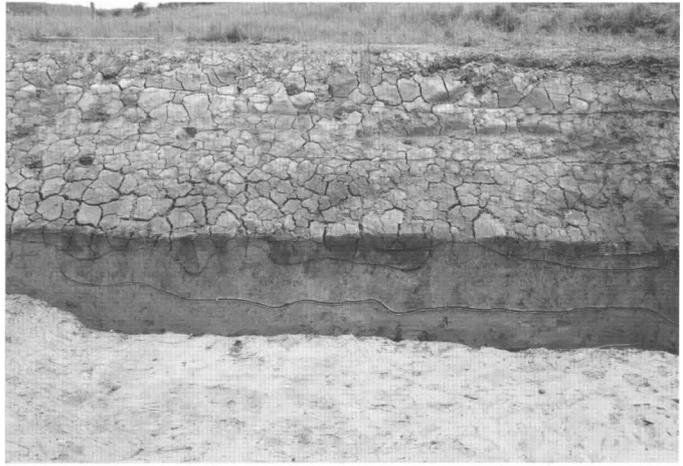
SD9D-D' セクション (南東から)



SD9 完掘状況 (北西から)



SD15 セクション (東から)



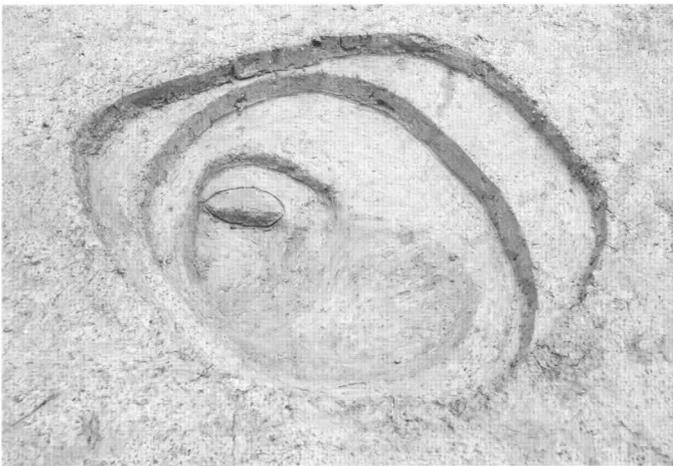
SX10 セクション (北から)



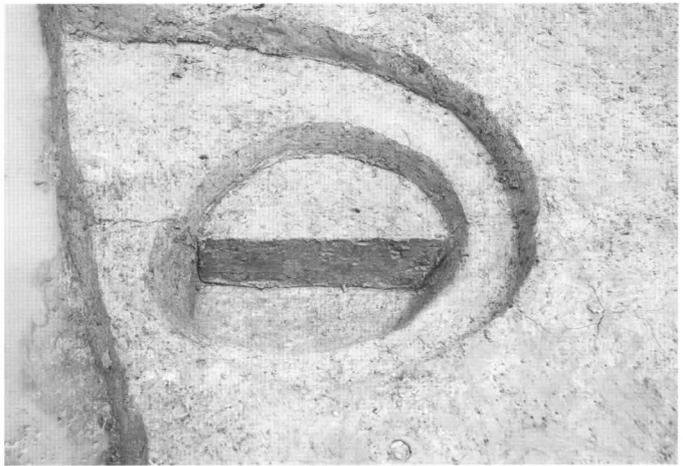
SX10 遺物出土状況 (北から)



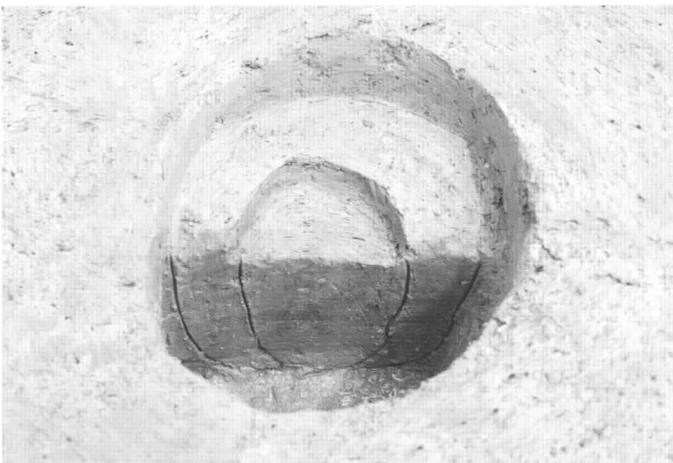
SX10 完掘状況 (北東から)



P16 セクション (南から)



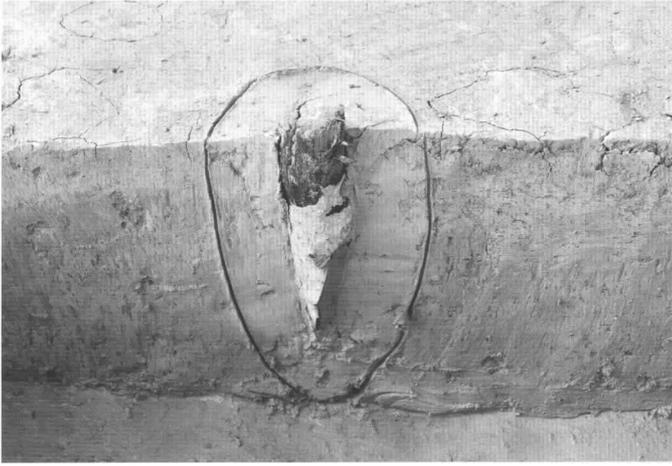
P17 セクション (南から)



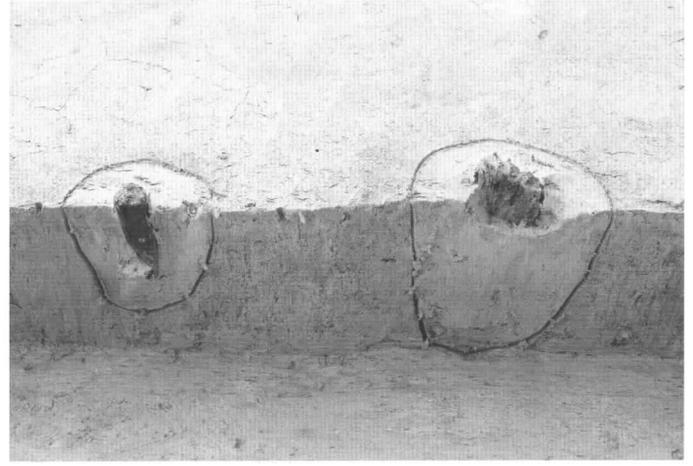
P20 セクション (南から)



P26 柱根出土状況 (南から)



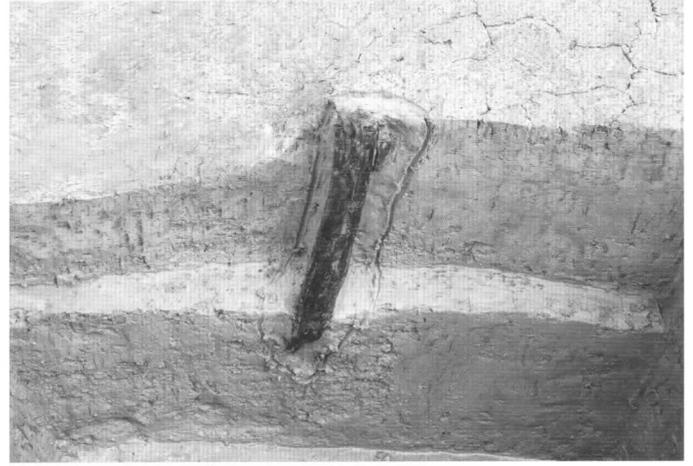
P33 セクション (南から)



P34 (左)・35 (右) セクション (南から)



P36 セクション (南から)



P37 セクション (南から)



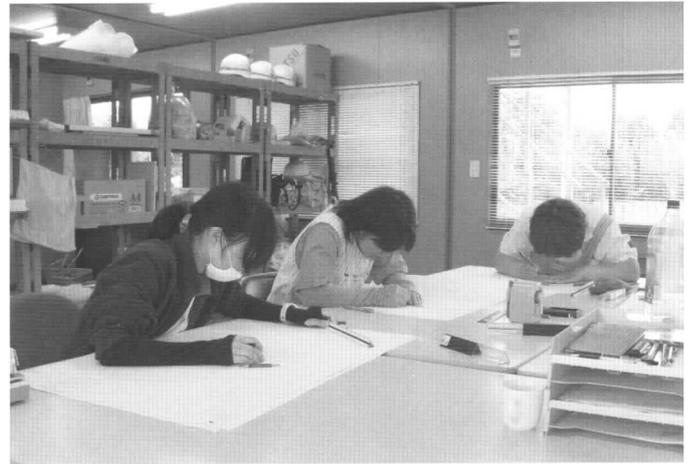
包含層発掘作業風景



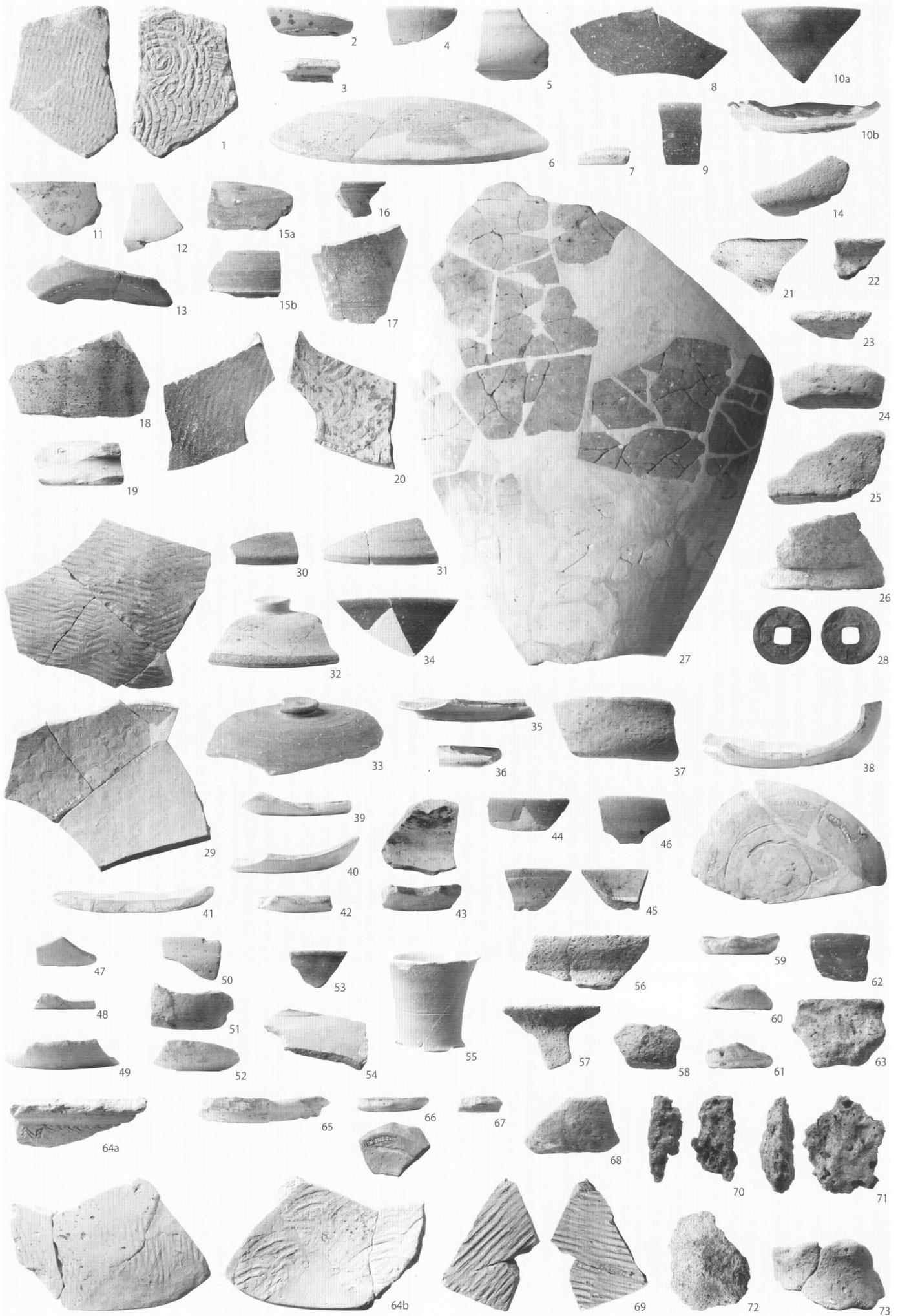
遺構精査作業風景

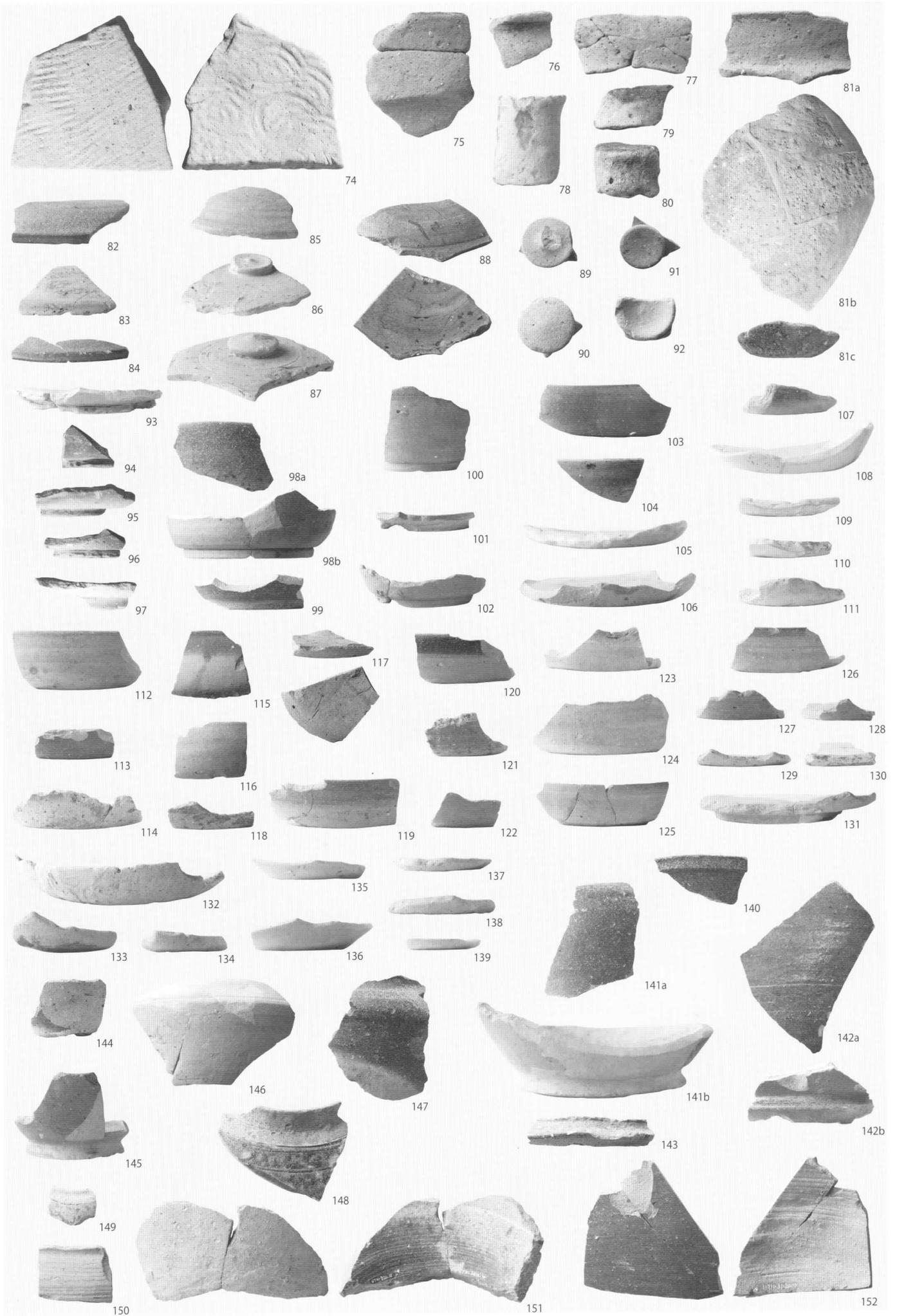


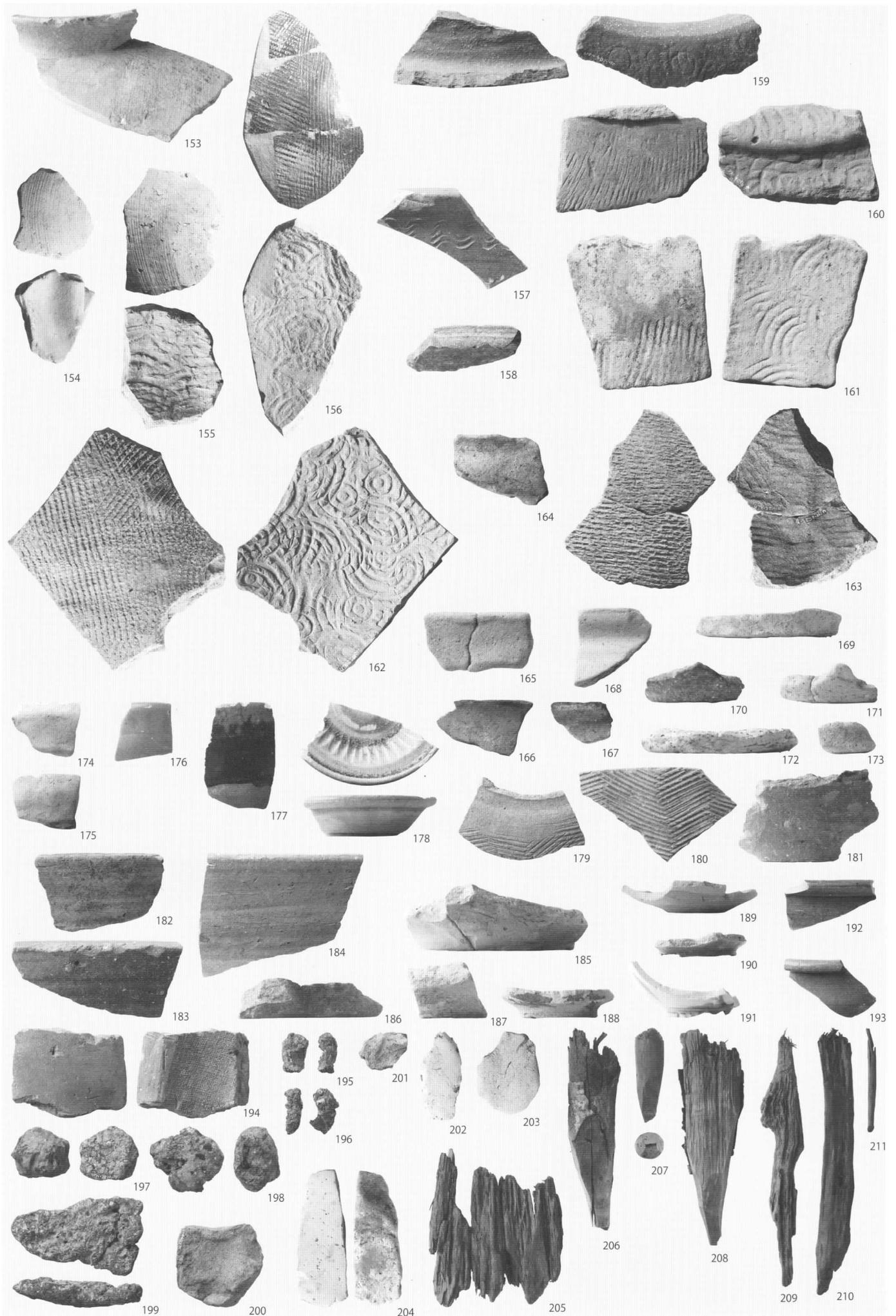
遺構発掘作業風景



整理作業風景







報告書抄録

ふりがな	うらたんぼにしいせき							
書名	浦反甫西遺跡							
副書名	二級河川郷本川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	加藤由美子 南波 守 竹部佑介 パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2013年11月15日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
うらたんぼにしいせき 浦反甫西遺跡	にいがたけんながかし 新潟県長岡市 しまざき 島崎	15021	1396	37° 34' 41"	138° 46' 05"	20130523 ～20130701	1,050㎡	二級河川郷本川 河川改修事業
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
うらたんぼにしいせき 浦反甫西遺跡	遺物包含地	古代・中世		掘立柱建物 土坑・溝・ピット		土師器・須恵器・珠洲焼 陶磁器・鍛冶関連遺物 砥石・北宋銭・木製品		掘立柱建物2棟 を検出。在地窯 産に加え小泊窯 産須恵器が出土。

浦反甫西遺跡

二級河川郷本川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25(2013)年11月15日 印刷

平成25(2013)年11月15日 発行

発行 新潟県長岡市教育委員会

印刷 あかつき印刷株式会社